
第 1 7 期
日 本 イ ン ド 学 生 会 議
活 動 報 告 書

2 0 1 3

THE 17th JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE
OFFICIAL BULLETIN



2013 年度

第 17 期

日本インド学生会議

活動報告書

開催地

デリー、コルカタ、バンガロール、チェンナイ

開催期間

2013 年 8 月 6 日から 9 月 3 日

《 目次 》

	ページ
はじめに	4
1、 実行委員長あいさつ	5
2、 実行委員メンバー一覧	7
3、 お世話になった方々からの御言葉	8
第一部 日本インド学生会議	24
1、 基本理念	25
2、 概要	27
3、 沿革	28
第二部 活動報告	40
1、 年間活動報告	41
2、 各局活動報告	43
第三部 本会議活動報告	47
1、 実施要綱	48
2、 本会議日程	51
3、 本会議日録	52
4、 企業訪問	72
5、 分科会報告	84
6、 文化交流・フィールドワーク報告	103
7、 ホームステイ報告	113
8、 本会議反省	120
9、 修了書	121
第四部 個人語録	123
1、 日本側実行委員からの声	124
2、 インド側学生からの声	140
おわりに	142
1、 謝辞	143
2、 日本インド学生会議規約	145
3、 編集後記	150

はじめに

- 1、 実行委員長あいさつ
- 2、 実行委員メンバー一覧
- 3、 お世話になった方々からの御言葉

《 実行委員長あいさつ 》

「インドは本当に不思議な国」、そんな印象を抱いたまま成田空港に9月4日、僕たちは帰ってきた。思い返せば懐かしく、日本に帰国してから時間の駒が早く進んでいくように感じる。多くの人と言葉を交わし、握手をして、お互いの違い、同質なことを感じとった。今でもリキシャーのクラクション音と独特の匂いが身体に染みついている。

僕たちは、デリー、コルカタ、バンガロール、チェンナイ4都市、一か月に渡る17期日本インド学生会議の本会議を終えました。何名か体調を崩すことはあったが、特に大きな問題もなく本会議を終えることができたのは、ご後援をいただいている在インド日本国大使館、在コルカタ日本国総領事館、在チェンナイ日本国総領事館、在日インド大使館、公益財団法人日印協会、国際交流基金ニューデリー日本文化センターの皆様、ご協力いただいているコルカタ日本語会話協会、チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI、東京大学インド事務所、バンガロール出張駐在官事務所、KOYO GROUP、日本インド学生会議 OBOG 会の皆様、助成金をいただいている公益財団法人双日国際交流財団、公益財団法人三菱 UFJ 国際財団、独立行政法人国際交流基金の皆様、長浜浩子先生、二ガム和子先生、吉野宏先生、ランガナタン様をはじめ多くの方々のサポートに支えられたからだ。深く御礼申し上げます。

この本会議のために、僕たちは約半年間の時間を費やした。目的意識をしっかりとって、100%以上の力を出す心意気で本会議に臨んだものの、実際に僕は100%の力を出すことはできなかった。インドという土地で、自らが持つベストパフォーマンスを出すことの難しさを強く痛感したのだ。それでも、この本会議は成功したように思う。それは17期メンバー、インドの学生たち、インドのカウンターパートの方たちによる多大な努力があったからだ。

限られた共有の時間、場所、人の中で、文化や言語、宗教、人種、国の違いを乗り越えて、想いを共有していくことは大変難しいことだと思う。僕たちは、分科会、文化交流会、NGO・企業訪問、フィールドワーク、ホームステイ、これら多くのことをインドの学生と共に過ごした。多くの時間がインドの学生との交流機会に費やされた。その中でどれだけお互いのことを理解できただろうか。ただ交流に満足することなく、その貴重な機会を活かして、どれだけ相手を理解し、その関係を続けられるかは僕たちの意志次第ではないか。きっとその経験・意識は、僕たちが世界に出ていく時に大事なことなのだと信じている。この本会議が皆にとっての一つのきっかけになることを心から願っている。

最後に、再度感謝の言葉をこの本会議を支えてくださったすべての人に、述べたいと思う。本当にありがとうございました。この経験を社会に発信していくために、今後ともメンバー一同、力を注いでいく次第である。日本インド学生会議をはじめとして、日本とインドの関係、日本人インド人との交流がより活発になっていくことを願って、報告書のご挨拶と代えさせていただきます。

第17期日本インド学生会議実行委員会
実行委員長 永田 光央

《 実行委員メンバー一覧 》

	名前	役職	所属
1	永田 光央	委員長	青山学院大学 国際政治経済学部 国際政治学科 4年
2	新谷 絵理香	副委員長 国際渉外局	立教大学 法学部 国際ビジネス法学科 4年
3	佐波 優紀	財務局	日本大学 法学部 法律学科 3年
4	軽部 真純	広報局	上智大学 総合人間科学部 社会福祉学科 3年
5	堀 友香	学術局	日本大学 生産工学部 土木工学科 2年
6	大津 嘉奈子	国内渉外局 総務局	慶應義塾大学 法学部 法律学科 2年
7	岡部 知美	国際渉外局	国際基督教大学 教養学部 アーツ・サイエンス学科 2年
8	森 理恵	国際渉外局	国際基督教大学 教養学部 開発研究学科 4年
9	大澤 瑞帆	企画局	青山学院大学 国際政治経済学部 国際政治学科 2年
10	柚木 隆太	財務局	東京大学 教養学部 文科三類 2年

計 10 名

(第 17 期日本インド学生会議実行委員会名簿より抜粋)

《お世話になった方々からの御言葉》

在日インド大使 H.E. Ambassador Mrs. Deepa Gopalan Wadhwa

AMBASSADOR OF INDIA
भारत का राजदूत



Message

I am very happy to learn that the 17th Indo-Japan Student Conference was successfully organized in India from August 3 to September 3, 2013 and that the organizers of the conference are publishing a report on activities undertaken during this month long interaction between students of Japan with Indian students in Bangalore, Chennai, Delhi and Kolkata.

I understand that the 17th conference was useful to the students who participated in it in understanding each other's cultures and education systems and also achieved the objective of the Conference that there should be a better intercultural communication between students of India and Japan.

I wish to extend my best wishes to the organizers for successful organization of such events in future.

(Deepa Gopalan Wadhwa)

在インド日本大使 八木 毅 様

第17期日本インド学生会議が有意義な成果を挙げられたことに心からお祝い申し上げます。

本年8月、第17期実行委員の皆さんをニューデリーの大使公邸にお迎えして懇談することができました。皆さんはその後、インド各地でインド人学生と生活をともにしつつ、交流されたと承知しております。単にインドに関心を持つだけではなく、このように強く、深くインドと関わろうと決意されたことに深い敬意を表します。

また、今回の経験は皆さんの将来にとっても大きな意味を有するものと確信しています。私自身について言えば、40年余り前、高校生の時にアメリカに留学し、同じプログラムで来ていた20数カ国の高校生と知り合う機会を得たことが、その後の自身の進路に大きな影響を及ぼしました。ぜひ、皆さんがインドに、そして世界に関心を持ち続けていただくよう希望します。

その一助として、現在の日本とインドとの関係について私の見方を紹介します。一言で言えば、ここ数年の日印関係は大変良好で、しかも、ますます緊密になっています。こうした両国の関係は、2006年の首脳レベルの共同声明により「戦略的グローバル・パートナーシップ」とされています。昨年外交関係樹立60周年に当たり、これを記念して両国で数多くの行事が行われました。今年は天皇皇后両陛下がインドをご訪問される予定であることが特筆されます。

政治レベルでは、2005年から両国の首相がほぼ毎年、相手国を訪問しており、今年5月にインドのシン首相が訪日しました。閣僚レベルの訪問は枚挙にいとまがありません。経済面では、両国間の貿易は2000年代半ば以降、急速に拡大し、2012年度は往復で186億ドルに達しています。貿易以上に伸びが著しいのが直接投資で、国際的な金融・経済危機の影響もあって主要国の投資が伸び悩む中、日本の対インド直接投資はここ数年1000億ドルから3000億ドルの高い水準で推移しています。これに伴って、インドに進出している日本企業の数も毎年100社を上回るペースで急増しており、今年中に1000社を越える見通しです。他方で、インドの経済・社会インフラの整備は遅れており、日本は政府開発援助（ODA）や国際協力銀行（JBIC）融資などにより、鉄道、道路、電力などの整備に協力しています。インドは日本のODAの最大の受け取り国（毎年2000～3000億円程度）であり、インフラ整備の他にも、水供給、環境保護、人材育成、貧困削減などの分野がODAの対象となっています。

政治、経済と並んで重要な「柱」は人的往来です。日本→インドの訪問者数は年間約19万人、インド→日本は約7万人で、このうち観光客は約2万人（数字はいずれも2012年）、傾向としては増加していますが、中国、韓国は言うに及ばず、最近、伸張が著しい

東南アジア諸国と比べても、かなり控えめな数字です。姉妹都市提携の数も6組にとどまっています。また、日本にいるインド人留学生数は500人台であり、インドが英語圏を中心に、欧米諸国に数千人、数万人の規模で留学生を送り込んでいることに比べると、ギャップは明らかです。両国の関係を厚みのあるものにしていくため、人的往来を今後もっと強化する余地があると言えます。

日本インド学生会議は既に17回を数え、人的往来の重要な要素となっています。ぜひ今後も活動を継続・拡大され、OB・OGの皆さんが日本とインドとの「戦略的グローバル・パートナーシップ」に貢献されることを祈念して止みません。

在コルカタ日本国総領事 川口 三男 様

第17回日印学生会議のご成功を心よりお祝い申し上げます。

コルカタにおける諸行事も成功裏に終了し、何よりでした。妻とともに開会式に出席させていただき、また皆さんと懇談する機会を得ましたが、日本側出席者も会議の成功のために意識を持って取り組まれており、披露された踊り一つをとっても、事前に準備してこられたことを感じました。日本から参加された永田光央実行委員長、そして団員の皆様、本当にご苦労様でした。

日印学生会議が日本の学生達の発意によって初めてコルカタで開催されて、17回目になりました。2001年から2004年までコルカタに勤務したときにも、同会議の行事に出席させていただきました。「よく続いてきた。日印学生会議はすでに日印関係の歴史の一章になった」というのが、私の思いです。地道ではあるものの、インドの学生達そして人々との間に、確かな交流の絆を編み続けてきた事実は、日印関係史に刻印されてしかるべきと思っています。

21世紀に入ってからも、この地球上に人間の争いや対立がなかった日は1日たりともありません。人はなぜ憎み合い、ときに殺し合わねばならないのか？ 正義とは何なのか？ そんな重苦しい疑問が湧いてきます。そんなときに思い出すのが、いつか聞いたアフリカの作家の言葉です。「私にとって正義とは特別なものではありません。私にとって、正義とは他者のことを考えることだと思っています。」(趣意) 私は、簡潔なこの言葉に深い共感を覚えます。

他者への思いやりは何から始まるのか？ 人と出会い、対話して、お互いを知ることから始まるのではないのでしょうか。理解し合える友人がたくさんいる国と争いたいなんて誰も思いません。この意味からも、インドの学生・人々との間で対話・交流の道を拓き、かつ持続されてきた日印学生会議の役割は非常に大きいと思っています。

毎年、参加者は変わるのでしょうが、友好の思い出の流れは引き継がれていきます。小さな流れは、いつかは大きな流れとなるでしょう。そのときに、小さな流れを作ってきた皆さん一人一人は、再びどこかで新たな小さな流れを作っておられるのではないか・・・そんなことを想像すると夢が大きく膨らみます。インドでの体験が皆さん今後の人生にとって貴重な財産となることを心より念願しております。

在チェンナイ日本国総領事 中野 正則 様

第17期日本インド学生会議が成功裏に終了したことを心よりお喜び申し上げます。残念ながら私は都合によりチェンナイを不在にしたため、皆様にお会いすることは出来ませんでした。皆様はデリー、コルカタ、バンガロール、チェンナイの4都市を訪問され、有意義な日印間の交流を果たされたものと思います。

日本とインドは近年政治、経済はもとより、文化、学術等幅広い分野でその関係を拡大・強化しつつあります。特に、日印間の経済関係の進展には目を見張るものがあり、日系企業の拠点ベースでみますと、インド全体では昨年10月末現在で1804社を数えており、前年度に比べて382拠点の増加をみています。中でもタミル・ナド州への日系企業の進出は著しく、その拠点数は約350社に上り、州別では最大となっています。

このような経済関係の緊密化に伴い、当地での日本に対する関心は確実に高まりつつあります。皆様ご存じのとおり、昨年は日印国交樹立60周年という節目となる年を迎え、当館でもタミル・ナド州を始め、管轄地域であるアンドラ・プラデシュ州、ケララ州、プドゥチェリー中央直轄領において60周年を祝う各種行事を行い、大きな手応えを感じることが出来ました。当館が力を入れている事業の一つである日本語普及についても、日本語学習者が着実に増えており、日本語能力検定試験の出願者数も毎年増加しています。

皆様は当地滞在中に、当館とABK-AOTS同窓会等の共催による「日本語の夕べ (JAPANESE NIGHT)」にも参加され、「ソーランよさこい節」の踊りと折り紙の実演を披露していただいたと伺っています。この催しは日本語を学ぶ楽しさを当地の人々に知ってもらうために昨年から始めたものですが、チェンナイで日本語を学習する方々との語りの中で、当地の人々の日本に対する思いや日印関係の発展の一端を感じとられたのではないかと想像しています。

これから皆様は様々な道に進まれるものと思いますが、今回の訪問が皆様のインドに対する関心を更に高め、また国際的な関心・視野を更に一層広げる契機となりますことを心より期待しています。最後に皆様のご活躍とご健勝、また日印学生会議の益々の発展をお祈りして、私のメッセージとさせていただきます。

公益財団法人日印協会 代表理事・理事長 平林 博 様

日本インド学生会議が第 17 期の諸活動を大きな成果で締めくくりましたことに対し、心からお慶び申し上げますとともに敬意を表します。

1998 年 5 月のインドによる核実験で一旦は迷走した日印関係は、2000 年 8 月の森 喜朗首相の訪印と「日印グローバルパートナーシップ」の打ち上げにより、再び軌道に乗りました。その後は、両国政府により「戦略的グローバルパートナーシップ」に格上げされるとともに、官民を通じた交流が一段と活発化し、今日に至っております。

私は核実験の 2 カ月前から 2002 年秋までの 4 年 8 カ月の長きにわたり駐インド大使を務めさせていただき、日印国交樹立 50 周年記念の諸活動にも携わりました。外務省退官後は、その御縁もあって森喜朗が会長を務める日印協会に参り、引き続き民間の立場から日印関係のために微力を尽くしております。

その間、両国間では政治安全保障と経済関係はめざましい進展を見たことに感慨を覚えます。2007 年は日印交流年、昨 2012 年は国交樹立 60 周年とマイルストーンを辿り、両国の発展が加速されてきました。しかし、わが両国の持つ潜在的可能性に比すると、まだまだ不十分の感を免れません。特に文化・学術と青少年交流については、なお理想への道は遠く感じられます。

国と国の関係も、畢竟、人と人の関係に帰します。運輸通信手段や I T C の発展のために世界はますます狭くなってきましたが、人と人とのつながり、すなわち連結性 C o n n e c t i v i t y が進展しなければ、真の友好親善関係や相互利益の向上は望めません。特に、次の時代を背負う若者の交流は、極めて大事です。

日本学生会議の皆様が、勉学ほかの大学活動と両立させながら、この会議を継続させ、しかも年を追うごとにより充実したプログラムにより、インドの同世代の若者との交流を行っておられることは、まことに頼もしい限りです。日本とインドは、益々世界の政治経済の中心となりつつあるアジアにおいて、民主主義と基本的人権等の価値観を共有するとともに長い歴史を通じて常に友好的な関係を維持して今日に至りました。両国の国民はもとより、アジアさらには世界の諸国民が日印両国の世界に対する貢献を期待しております。

それは皆様の方にかかっております。日本インド学生会議の皆様が、インドとの交流の経験を生かして大きく羽ばたき、両国の将来を担う人材へと成長飛躍することを信じてやみません。今後とも、この会議がわが国の若者の国際交流のモデルとして発展していくことを、心からお祈りいたします。

日本語会話協会チーフパトロン ニガム 和子 様

第17期印日学生会議が無事終了しましたのは多くの皆様のご理解とご協力のお陰と心より感謝しお礼を申し上げます。

大雨や竜巻などの自然災害があちこちであったこの夏、日本側チームが次ぎの会議開催地のバンガロールに向け出発された翌日からコルカタにも大雨が降り始め、市内の至るところに水が出て交通が半ばストップしてしまいましたが、学生の皆さんの日頃の行いが良かったので会議終了後に降り始めてくれました。

今回のコルカタチームは半数以上が去年の会議参加者だったので会議全体の様子が最初から分かっていて、準備もそれなりによく出来たかと思います。今までホームステイは一泊だったのですが日本側のリクエストで二泊にし、お互いをもう少し知り合えたことでしょう。

17回の会議を通していつも感じることは両国の国民性ということです。こちらの人は多くが前向きで楽天的で何がおこっても「No problem」という態度で、その反面に日本の学生は綿密な計画をたて実行しますが何かハプニングがあった時、小さな問題でも「Big problem」ととらえる人が多いかと思います。お互いからいいところを学び取ってほしいものです。

川口 三男コルカタ総領事が「この印日学生会議は日印友好交流の歴史に残るだろう」と開会式のご挨拶でおっしゃいました。2007年には安倍総理が（前回総理だった時）コルカタを訪問されました。今年の冬には天皇陛下、皇后陛下の訪印が予定されているそうです。今以上に政治経済文化の面で両国が親密になる日が近いと思われます。このような関係が始まるずっと前1997年に開始された印日学生会議の参加経験を基にして皆さんがご自分の将来に役に立てて欲しいと願っております。来年は日本開催の年、一人でも多くのインドの学生が日本の生活を肌で感じて欲しいと思います。

ABK AOTS DOSOKAI Chairman Mr. M. R. Ranganathan

This year 2013, the 17th JISC Japan India Students conference took place in Chennai between 26th August to 3rd September

The members arrived from Bangalore on 26th evening and left for Delhi on 3rd morning.

The young students exhibited enormous amount enthusiasm, Challenging spirit , willingness to participate with pleasant smile and Cheer always during the entire Period.

On the first day there was a simple Inauguration Ceremony and in the afternoon they had a practice secession for the Japan Night.

The Consulate General Japan came up with the idea of Japan Night to be conducted every year along ABK AOTS DOSOKAI in order to bring the Chennai Japanese Community and Indian Community Closer from 2012 and we scheduled the Japan night evening to be held during the Visit of JISC every year for the last two years. The Participation JISC is well appreciated by all.

There was a welcome Dinner held to honor the visiting 17th JISC team. Next day they Visited the Chennai museum and also there was lecture by JETRO Chennai representative in Chennai

Since that was celebrated in Chennai as God, Lord Krishna's Birthday they Visited the ISCON, Hare Krishna's Krishna Temple and in the evening after a Japanese Dinner went for a Good night sleep.

Next day they had a factory visit to Tractors and Farm equipment manufacturing Factory and later had an interactive secession with the Loyola school of Business management students. Later came to our center to watch a Tamil Movie

Next day they had a second interactive secession with Loyola school of Business management students and then visited a software company Nihon Technology. Then evening was well spent at the Elliot's Beach.

Next day Forenoon was spent on learning lessons of Yoga from Isha Yoga Center and then evening the JISC team gave thrilling and scintillating performance during Japan night Vol. 3 and also enjoyed watching others Performance.

They attended next day morning an Indian wedding of our Student Ms Gayathri and had Lunch, a Special Lunch on a wedding day, on a Banana leaf and using their fingers. Afternoon interacted with our school students speaking in Japanese and gave origami demonstration and we had a Certificate awarding during the closing Ceremony.

After that they moved for home stay with our students and next day assembled at our

center in the morning

That day they went to Dakshin Chitra a culture center depicting the ancient south Indian Culture by the Habitats in different regions and Cultural activities of Different Region.

Then they went to Mahabalipuram to visit the Shore temple and other Historical sites and Had final dinner at AKASAKA , Japanese Restaurant.

Last day at Chennai was 3rd September and they departed for Delhi.

It was a great experience for young students who were the Coordinators of this Program. Ms. Vedha and Team had wonderful learning and the JISC Visit as Usual is a memorable experience for all of Us. Their performance at Japan Night is still spoken about as the outstanding event of the evening,

We are Thankful to Nagahama Sensei and JISC Team and their leaders who exhibited great friendship and love to people of Chennai. We wish to say, "Mata Kite Kudasai".

Prof. Ashok K. Chawla

Chief Scientist, CSIR-NISCAIR &

India Side President, Indian Cultural Study Association

今年、17回目の日印学生会議がインドで成功に終わり、日本からの参加学生がインドで様々な経験を積み、たくさんの思い出と友人をつくり、全員無事帰国されことを大変うれしく存じております。

2000年に発起人の一人、長浜先生から学生会議のデリーでの開催希望の話を受け、印日友好協会の傘の元でのカウンターパートとなる学生ウィングを起こし、デリーでの活動がスタートしました。十数年経った今も、その活動が根強く続いていることは、発起人、OBそして現役のアクティブメンバーのご努力の結果です。

2001年、第5期からのデリー開催のことを古い資料から引き出してみましたら、学生のデリー滞在は10日間。メインの活動である分科会のテーマは、インターネットも含むマスメディア、核兵器と平和、男女平等、家族・教育・価値観そして日印関係を促進させる課題などで、すべてがとても有意義なテーマでした。その他、ニューデリーの国立美術館見学や市内観光に出かけ、ホームステイでは日印の学生が寝食を共にする経験をしています。当時のことをふり返りますと、インド側の学生に対しては大人からの事前指導・指示が必要であったし、開催中もサポートが必要とされていました。一方、日本側の学生は殆ど自分たちの手で企画から実施までを実現していました。その違いを目の前にして感じたことは、インド側も基本的に学生自身の手で企画・実施を進め、学生の役割を大きくするべきではないかということでした。さらに日本側については、OBと発起人をもう少し組織内に位置づけることができたという想いと、この活動は草の根レベルの人的交流をベースにした日印関係の構築に大きく貢献できる可能性があると感じたことが思い出されます。

毎回、若い学生が参加しますので第5期の時の参加者に比べて基本的なところは変わっていないですが、特に今期の学生たちは、過去・現在・未来の日印関係、インド政治、インド経済、インド人の国民性、教育システムなどに強い関心を示し、日印学生ネットワーク造りと連携強化に資するよう、インド人学生に対して日本の大学・大学生活に関してプレゼンを英語で行い、日本でのサバイバルに関しての質問にも応えてくれたことは非常に印象的でした。また、日本人学生のインドに関しての知識レベル、受容生、英語で対話を試みる精神、そしてポリウットダンスパフォーマンスは、インド側の参加者から大きな評価を受けました。

日印学生会議は継続性を保ち、持続可能な形でこれからも成長し、具体的な日印協力への活動に繋がるような方向に向かうようお祈りします。

東京大学インド事務所 所長 吉野 宏 様

HP : <http://www.indiaoffice.dir.u-tokyo.ac.jp/>

昨年に続いて 8 月皆さんをバンガロールにホームステイにてお迎えしました。当方にとり 2 回目の経験。試行錯誤をしながらも皆さんに良かれと思いベストアレンジしたつもりです。今回の新たな主な試みとしては次の 2 点です。インドの明日を担う若者たちと彼らを教育する一大研修センター。その質の高さを味わって戴きましたでしょうか。

●昨年インフォシス本社を訪問しましたが、今年は同社マイソールキャンパスをご案内。一企業の社内研修センターとしては世界一の規模と質の高さを誇るとの評判。体感して戴きましたでしょうか。この会社の会長は Narayana Murthy 氏。東大総長の諮問委員の一人でもあります関係で、当方の依頼を快諾されて日本の若者に明日のインドを見て貰おうと見学を許して戴きました。

●日本に留学希望しているインドの若者との交歓会をシバニさんの家で開催。バンガロール在住のインド人 20 人が集まりました。早稲田に留学中の 1 年生、IBM 研究所勤務の社会人で大使館推薦国費留学 1 次合格者（東大留学希望者）、日本留学を夢見る高校生とそのご両親、ホンダの社員で APU の MBA 合格者、一ツ橋大学に国費留学内定者などなど集まり、皆さんのキャンパス生活などの話を熱心に聴いておられました。ヒンドゥー教やゾロアスター教のお方もいれば、厳しい菜食主義者（玉子も食べない）と非菜食主義者、海外の生活に慣れた人や海外経験無しの人、話を聞くと皆さままでありました。

インド各地に変貌するインドと変わらぬインドの 2 面があります。何処に行こうと貧しいながらも希望を持って明日を切り開こうとする若物のひた向きに勉学する姿とチャレンジ精神に出会う筈です。こんなインド人と交流して、何か刺激を受けてお帰りになったことと存じます。時にインドでの体験を思い出して下さい。

今回、救急車に担ぎ込まれた経験をされた方もいました。又、私のアパートで寝込んだ方もいました。心配しましたが、良く克服してくれました。何が原因でありましたでしょうか？ よくよく反省して戴きたいと思います。大事に至らずに済みましたこと不幸中の幸いでありました。

皆さんが帰国してから、インドは毎年恒例のお祭りで各地は賑わっております。9月ガネシヤ祭で始まり、10月マイソールダサラ祭、グジャラート州ナブラトリ祭、コルカタドウルガプジャ祭、そして最後に11月2日デワリ（ヒンズー教徒のお正月）でクライマックを迎えます。友人や家族が久しぶりに故郷の家に帰り集います。人々は去年の自分と今年の自分を振り返り、明日を考える時期を迎えています。

今年は何人日本留学を決意してくれたでしょうか？ いよいよ願書の提出期限がやって来る今日この頃です。一人でも多くのインドの若者たちが日本に勉強に来てくれますように。同時に皆さんの成長をお祈りします。

敬具

Rabinder N. Malik, Ph.D.

Visiting Lecturer, Keio University

Former Executive Officer, United Nations University

It gives me great pleasure to send this message of congratulations on the successful completion of the 17th Japan India Student Conference. What I find admirable is that the Japanese university students themselves organize the whole program.

As an Indian living in Japan, I feel very happy to be associated in some way with this excellent exchange program which helps strengthen friendship and understanding between the peoples of our two countries. It is heartening to note that Japan-India relations have undergone a significant and qualitative shift in recent years, and the establishment of the Strategic and Global Partnership between Japan and India has started a new era of relations between our two countries. I believe that strong Japan-India ties are good not only for our two countries but also for world peace and stability.

Students participating in this program are exposed to cross-cultural learning experiences through intercultural interactions with students and people in the host country. This promotes personal growth and open-mindedness to diversity, and has a strong impact on the development of intercultural competence of the students.

I would like to extend my best wishes for continued success of the Japan-India Student Exchange Conference.

日本インド学生会議創設発起人 長浜 浩子 先生

日本インド学生会議は数多くのお力をいただき、17年目の開催も可能にさせていただくことができました。これまでご尽力下さってましたお一人おひとりに、心より御礼申し上げます。

今期のデリー訪問では、JICAを訪問させていただきデリー・メトロのお話をうかがい、立命館デリー事務所にて日本留学を考えている高校生との交流会に参加し、アショク・チャウラ先生の研究所にお訪ねして様々なインドを学ぶ機会をいただきました。また、在インド日本国大使館大使公邸にお招きをいただき、八木毅大使閣下をはじめとする館員の皆様と貴重な時間を過ごさせていただくことができました。

コルカタ本会議では、ハーバード大学スガタ・ボース教授をお迎えしての開会式。コルカタ学生メンバーの中にパル判事の曾孫さんの2年続けての参加もあり、日印の歴史に触れるよい機会にも恵まれたことに感謝しております。

今期も総領事川口三男様からのお招きでコルカタ日本国総領事館公邸に両国メンバー全員と館員の皆様などが集い、東京大学大学院留学が決ったインド側16期メンバーのお一人を皆で祝福する機会ともなり嬉しく存じました。

本年、長年NKKの会長として活動を支えてくださいましたモハン・ゴーシュ氏の訃報が届き、肩を落としました。コルカタ滞在中には、モハン・ゴーシュ氏を偲ぶ会に私も出席させていただき、御家族・御親戚・御友人より生前の様々なお話をうかがう輪に入れていただきました。モハン・ゴーシュ氏の息子さんは、1期より学生メンバーとして参加し、初めての日本開催であった第3期日本インド学生会議にも参加してくださいました。昨年16期コルカタ滞在中に、奥様・お孫さんを交えたゴーシュ家三代とニガム先生ご夫妻と楽しく夕食のテーブルを囲んだことが思い出されます。

生前のご恩に感謝すると共に、ご冥福をお祈りいたします。

17年の歳月は、いろいろな変化を感じさせるものです。私は、初めてコルカタを訪ねた時、インド人家庭にホーム・ステイをしておりました。毎日の予定はホスト側が決めたもので、毎朝ガイドさんの迎えを待つ滞在でした。その時のガイドさんの一人リマさんは、日本語を話す子育て中のお母さんでもあり、その数年後NKKのメンバーだとわかり、以来コルカタ本会議開催では毎年お世話いただく存在となりました。そして今年、17期のメンバーの中にリマさんの息子さんがいらっしゃることに驚かされました。

リマさんのお子さんが男の子か女の子か尋ねた記憶もないままの「あっという間と思える17年」と「様々な記憶が押し寄せる17年」とが混在する、大きな時の流れを感じています。JISCの活動が17年間続けられたことにより、JISC誕生とほぼ同時に年齢を重ね始めた学生をメンバーとして迎えられたことは、うれしい限りです。

また、今年はNKKとコルカタ日本国総領事館との共催で書道デモンストレーションの開催

をしていただきましたことを、大変嬉しく存じております。会場にはたくさんの方がおいで下さり、どなたもが筆を執り毛筆体験も楽しんで下さいました。過去の IJSC に参加した先輩方の参加もあり、日本への興味が継続していることをうれしく思いました。

バンガロールでは、今期も IT 大国インドに触れる機会を東京大学インド事務所所長の吉野宏様より繋いでいただき、更に日本語を学ぶ大学生との交流も実現できました。

最後の訪問都市チェンナイでも暖かなおもてなしをいただきつつ学生との意見交換を進め、インドでありながら日本語以外の言語使用禁止のジャパン・ナイト(在チェンナイ日本国総領事館共催)への参加もさせていただきました。

JISC の活動を支えて下さった皆様。そして JISC の活動に参加して下さいました学生の皆様。皆様のおかげで、17 期も無事に大きな成果をあげることができました。数年後には、二世のメンバーが参加するという楽しみもあります。

これからも、この日印学生間での意見交換をとおしての交流活動が、末永く続けられますことを願っています。

日本インド学生会議 OBOG 会 会長 5 期 OB 鈴木 佑輔 様

第17期日本インド学生会議も無事に全日程を終えることができました。

インド、日本双方の多くの方々のご支援、ご協力により会議が無事に開催することができたことをここに御礼申し上げます。

参加したメンバーから「学生会議、無事終わりました！」と連絡をもらい、日本側の実行委員に会いに行きました。「どうだった？」と声をかけると、目がそらされないまま、一瞬の間後、「いやあ、」と言う言葉の後に、「面白かったです」「いい経験でした」と話し出しました。初めに目があつたときの目は、こちらが緊張するくらい力があり、前向きで、好奇心で溢れているながら、悩んでいるような表情をして話してくれました。みんな「インド顔」とも言うべき、インド、インド人、そして自分と出会ってきた表情をしていました。インドがある。

そのことだけで私にとっては驚きでした。

日本インド学生会議に参加した当時、その驚きに向き合うこと、つまり、驚きを解釈すること、驚きを質問にしてぶつけることを繰り返す毎日は、とても刺激的で、とても感情的で、とても創造的だったことを今でも思い起こします。

帰国した17期の日本側のメンバーの表情にそのことを思い出させてもらいました。少ないトラブルはあったものの、この第17期日本インド学生会議が、日本人学生とインド人学生がまさに寝食を共にし、意見を交わす中で、各日本人学生はインドに出会い、インド人学生の意見や機微に触れ、そして自分と新たに出会い、日本へ帰って来た、第17期日本インド学生会議がしっかりとその成功を納めることができたことを感じました。

この報告書を読まれる皆様には、今度とも日本インド学生会議に対して応援を頂けますようよろしくお願い致します。また第17期日本インド学生会議に参加された日本、インド双方の学生の皆さんには改めてその努力と成果に胸を張り、大切にしていきたいと思っています。

第一部 日本インド学生会議

- 1、 基本理念
- 2、 概念
- 3、 沿革

《 基本理念 》

「学生の学生による国際社会の将来のための会議」をモットーとする、私ども日本インド学生会議の主たる目的は以下の通りであります。

1、 学生という立場を存分に生かした、既存の概念や営利関係、特定の政治・宗教にとらわれない自由かつ建設的な直接討議を通じ、世界の諸問題について新たな意見、解決策を導き出し、自ら実行するとともに、それを社会に報告・提案する。

2、 上記のような討議に限らず、日本とインド両国の学生が寝食をともにする本会議の全日程、またそこまでの準備期間を通じて、両国の学生が直接的な交流をすることにより、お互いの社会、文化、価値観、考え方などについて認識・理解をし、それらを社会に発信する。

現在、私たちが生活するこの地球上では、環境問題・内戦・経済摩擦・人権侵害・人種差別など様々な問題が起こっています。そんな中、次世代を担う我々学生は、このような問題に対して真剣に取り組まなくてはならないと考えます。そこで、当団体は「日本とインドの学生による会議」というかたちで、解決の道を模索していきたいと考えています。

まず初めに、学生という社会的・営利的・政治的なものから自由な立場の我々は、専門家やビジネスマン、政治家ではすることのできない、より直接的で草の根的な会議をすることが可能であります。当団体はその利点を存分に生かした、政治家や専門家の「縮小版」にならない会議を目指しています。その一方、いくら「草の根」とは言え、私どもと対話するのは、インドの学生という一部の上流階級の若者ではあります。しかし、彼らは確実にインド社会を変えていける存在として、非常に意味があるものだと考えています。

次に、何故インドなのでしょう？インドは複雑に民族・宗教が絡み合う、他に類を見ない多様性に富んだ国であり、同じアジアでも日本とは全く違った文化・社会を持っています。そのようなインドからは新たな道を探ること、新たな価値観を学ぶことができるのです。また、現在、日本とインドはわずかな政治的・経済的關係を除き、文化的・精神的交流つまり人と人との交流は著しく乏しい状況にあり、お互いに誤解、偏見が至る所でみられます。私どもは、一年間の準備期間も含め「会議」というものを通して生

身のインド人、インド文化を体験することができます。

そして以上のような成果で自分たちが成長するのはもちろんのこと、これらを社会に報告・提案することによって、国際社会に貢献することが当団体の最終目標であります。私どもは、社会からの助成・支援を受けて活動しているという自分たちの「公的性格」を認識し、社会還元への模索を続けていきます。

《 概要 》

名称	日本インド学生会議（英語名：Japan-India Student Conference）
設立年月	1996年8月
創設発起人	石津達也、長浜浩子、後藤千枝
組織構成	実行委員会、OBOG会、創設発起人(3名)、顧問(1名)、賛助会員 (実行委員会...参加資格は大学、大学院、短期大学、専門学校に所属する学生)
協力団体	インド側パートナー、国際協力ユースネットワーク「絆」
団体目的	日本とインドの学生同士の討議や交流を通じて、お互いの社会、文化、価値観などを理解し合うことで、学生という立場での日印友好関係を築く。そして討議結果や交流の体験を社会に発信し、国際社会に貢献する。
活動概要	事前活動...組織運営、勉強会、合宿 本会議...学生同士のディスカッション、ホームステイ、フィールドワーク、文化交流（毎年日本、インドのどちらかで開催する。）事後活動...報告書作成、報告会開催、次期実行委員募集週に1回ほど定期的にミーティングを行う。
発行物	機関誌、活動報告書
広報活動	ホームページ、ブログ、twitter、facebook

日本インド学生会議は1997年のコルカタ大会を第1回目として始まり、2012年で第16回目を迎えます。2001年にデリー大会が始まり、2009年から始まったチェンナイ大会も現在まで続いています。プネーで開催したこともあり、2012年はバンガロールにも訪れました。このように、開催年によって開催場所や内容は変わります。

運営は実行委員である学生が行っています。OBOG会、創設発起人、顧問からの助言を受け、学生でありながら、日本とインドを結ぶ団体としての意識をもって活動しています。

対外活動としては、一人でも多くの方に日本インド学生会議を知っていただくため、多くの人にインドに関心を持っていただくために、講演会やイベントの開催などを行っております。また、社会と接点を持って活動していくために、財団や企業、その他国際交流団体などへ積極的に渉外活動をしております。他の同じような志を持つ学生会議団体とも交流を図り、お互いに切磋琢磨しております。

《 沿革 》

沿革 (2013年11月現在)

1996年 8月 日本インド学生会議創設事務所発足
(石津達也、長浜浩子、後藤千枝)

第1期

1996年 10月 第1期日本インド学生会議実行委員会発足
11月 臼田雅之氏(東海大学文学部教授)顧問就任
1997年 3月 カルカッタに第1回先遣隊派遣
8月 **第1期日本インド学生会議本会議**
(於:カルカッタ 8月2日~9月11日)
11月 第1期本会議報告会開催

第2期

1997年 11月 第2期日本インド学生会議実行委員会発足
1998年 1月 (財)アジアクラブ主催 沖守広氏写真展参加
2月 機関紙第1号発行
3月 カルカッタへ第2回先遣隊派遣
4月 (財)国際教育財団より助成金給付第1回総会開催(各種規約施行)
6月 (財)三菱銀行国際財団より助成金給付機関紙第2号発行
7月 会議前合宿
8月 **第2期日本インド学生会議本会議**
(於:カルカッタ 8月5日~15日)
9月 (財)吉田茂国際基金より助成金給付
10月 (財)アジアクラブ主催イベント
インド政府観光局主催イベント「ナマステ・インディア」参加
第2期本会議報告会開催

第3期

1998年 11月 第3期日本インド学生会議実行委員会発足
機関紙第4号発行
12月 「再考・JISCの基本理念」討論会第1回開催

- 1999年 2月 「同上」 討論会第2回開催
 3月 機関紙第5号発行
 4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
 6月 カルカッタへ第3回先遣隊派遣
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 8月 福永正明氏 (拓殖大学) 顧問就任
 機関紙第6号発行
 9月 本会議直前合宿
 10月 **第3期日本インド学生会議本会議**
 (於: 東京 10月2日~13日)
 機関紙第8号発行
 「ナマステ・インディア」参加
 12月 第3期本会議報告会開催
 第3回総会開催

第4期

- 1999年 12月 第4期日本インド学生会議実行委員会発足
 2000年 1月 「第1回学生会議連絡協議会フェア」参加
 JISC 公式ホームページ作成
 2月 日本インド学生会議メーリングリスト作成
 4月 機関紙第9号発行
 第4回総会開催
 「学生会議連絡協議会合同新歓」(SCN フェア 2000) 参加
 5月 (財) 日印協会主催「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」出席
 6月 バラーナス・ヒンドゥー大学ヤーダヴ教授を迎えてのヒアリング開催
 (財) 三菱銀行国際財団・(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 機関紙第10号発行
 8月 機関紙第11号発行
 本会議団結式・壮行会開催
第4期日本インド学生会議本会議
 (於: カルカッタ 8月7日~26日)
 9月 (財) 日印協会主催「森総理南西アジア訪問」講演会出席
 帰国報告会主催
 10月 「ナマステ・インディア」参加
 (財) インドビジネスセンター主催「日印 IT シンポジウム」参加

- (財) 日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席
 11月 国際基督教大学学園祭参加
 インド側発起人モハン・ゴーシュ氏を囲む会主催
 機関紙第12号発行
 「学生会議連絡協議会合同報告会」参加
 12月 第4期本会議報告会開催
 駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会開催
 第5回総会開催

第5期

- 2001年 1月 第5期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 デリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催
 4月 SCN フェア 2001 参加
 (財) 国際教育財団より助成金給付
 5月 機関紙第13号発行日印議員連盟訪問
 外務省アジア大洋州局南西アジア課 訪問
 6月 山内利男氏を招いてのヒアリング勉強会開催
 日印経済委員愛甲次郎氏による講演会主催
 岐阜女子大学南アジア研究センター主催
 「日印 IT シンポジウム」参加 協力
 7月 機関紙第14号発行
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付直前合宿
 国際交流基金より助成金給付福永正明氏顧問退任
 8月 **第5期日本インド学生会議本会議**
 (於：デリー・コルカタ 8月2日～23日)
 9月 帰国報告会開催
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 10月 「ナマステ・インディア」参加
 11月 亜細亜大学学園祭参加
 機関紙第15号発行
 12月 第5期本会議報告会開催
 第6回総会開催

第6期

- 2002年 1月 第6期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 第3期メンバーからのヒアリング

- 3月 機関紙第 16 号発行
- 4月 小野基先生（筑波大学教授）からのヒアリング開催
SCN フェア 2002 参加
在インド大使館後援名義受理
（財）国際教育財団より助成金給付
- 5月 保坂俊司氏（麗澤大学）顧問就任
（株）インドビジネスセンター後援名義受理
- 6月 勉強会集中合宿
- 7月 国交樹立 50 周年記念行事インドメラーに参加
（財）日印協会後援受理
（財）アジアクラブ後援名義受理
インドセンター後援受理
外務省後援名義受理
- 8月 コルカタ、デリーに先遣隊派遣
- 9月 本会議直前合宿
（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付
（財）吉田茂国際基金より助成金給付
機関紙第 17 号発行
- 10月 （財）国際交流基金より助成金給付
（財）東京都国際交流財団より助成金給付
第 6 期日本インド学生会議本会議
（於：東京 10 月 18 日～31 日）
- 12月 第 6 期本会議報告会開催

第 7 期

- 2002 年 12 月 第 7 期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2003 年 1 月 第 7 期日本インド学生会議「本会議案」作成
- 3月 機関紙第 18 号発行
- 4月 実行委員交流合宿
SCN フェア 2003 参加
- 5月 （財）国際教育財団より助成金給付
- 6月 （財）国際交流基金より助成金給付
勉強会合宿（分科会案作成）
学生会議連絡協議会情報交換会参加
（財）日印協会より後援名義受理
デリー・コルカタに先遣隊派遣

- 7月 機関紙第 19 号発行
 - (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
 - (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 - (財) 日商岩井国際交流財団より助成金給付
- 8月 本会議直前合宿関係者挨拶回り
 - 第 7 期日本インド学生会議本会議**
 - (於：デリー・コルカタ 8月9日～9月2日)
- 10月 報告書作成
 - 小学校訪問（社会還元事業）計 4 回
 - 「ナマステ・インド」参加
 - (財) 東京都国際交流財団より助成金給付
- 11月 第 7 期本会議報告会開催
 - 「インドの魅力を発見する会」主催パネルディスカッションに参加
- 12月 第 7 期本会議報告会開催

第 8 期

- 2003 年 12 月 第 8 期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2004 年 1 月 第 8 期日本インド学生会議「本会議案」作成
 - 学生会議総会開催
- 2月 ミーティング開始
- 3月 大使館主催のパーティーに参加
- 4月 機関紙第 20 号発行
 - OB・OG との懇親会
 - 第 8 期募集〆切（4 月末）
 - SCN フェア 2004(29 日)参加
- 5月 メンバー交流合宿(9、10 日)
 - (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 - (財) 国際教育財団より助成金給付
 - (財) 日商岩井億歳交流財団より助成金給付
- 7月 機関紙第 21 号発行
 - 本会議前直前合宿(31 日、8 月 1 日)
- 8月 **第 8 期日本インド学生会議本会議**
 - (於：デリー・コルカタ 8月11日～30日)
 - 在コルカタ日本総領事館より後援名義受理
- 10月 第 9 期実行委員募集開始
 - 「ナマステ・インド」参加（16、17 日）

- 小学校訪問（社会還元事業）報告書作成（10月末発行）
 11月 第8回日本インド学生会議報告会開催（28日）

第9期

- 2004年 12月 第9期日本インド学生会議実行委員会発足
 2005年 1月 本会議案作成
 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
 3月 新人勧誘開始
 4月 SCN フェア 2005(29日)に参加
 5月 ミーティング開始
 OBOG インタビュー実施
 6月 合宿実施
 7月 分科会トピック決定
 8月 ミーティングを週2回に変更
 本会議直前合宿（11・12日）
 日本インド学生会議機関紙発行
第9期日本インド学生会議本会議
 （於：東京 8月28日～9月12日）
 9月 第9期日本インド学生会議本会議終了（12日）
 コルカタ側メンバー帰国（13日）
 デリー側メンバー帰国（14日）
 10月 報告書作成開始
 日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2005」に協力（1・2日）
 11月 報告書作成
 12月 第9回日本インド学生会議本会議報告会（11日）

第10期

- 2005年 11月 第10期日本インド学生会議実行委員会発足
 2006年 1月 本会議案作成
 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
 3月 新人勧誘開始 ミーティング開始
 4月 SCN フェア 2006 参加
 5月 合宿実施（26・27日）
 6月 インド大使就任パーティー
 先遣隊派遣（10日～19日）
 合宿実施（23・24日）

- 7月 上方舞友の会、吉村桂充様訪問
- 8月 シン大使就任パーティー
第1回インド知識経済勉強会参加
第10期日本インド学生会議本会議
(於：プーネ・コルカタ・デリー 8月24日～9月19日)
- 9月 日印文化交流祭「ナマステ・インドゥア 2006」に協力 (23・24日)
- 10月 インディアンデイ開催(28日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第10回日本インド学生会議本会議報告会 (26日)

第11期

- 2006年 12月 第11期日本インド学生会議発足
(以降毎週土曜ミーティング実施)
事業計画書・予算案作成、財団渉外・申請
- 2007年 1月 事業計画書・予算案作成、広報 (新メンバー募集)
アイセック主催インド勉強会参加 (7日)、財団渉外・申請
- 2月 広報 (新メンバー募集)
後援渉外・申請
- 4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 5月 財団申請
(財) 日商岩井国際交流財団(財)吉田茂国際基金より助成金給付
- 6月 **OBOG 会主催 第1回 JISCDAY (30日)**
合宿実施 (30日・7月1日)
在インド日本大使館、在コルカタ総領事館、
在ムンバイ総領事館より後援名義受理
(財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
- 7月 勉強会、模擬ディスカッション
先遣隊派遣プネー・デリー (29日～8月4日)
外務省より後援名義受理、日印交流年イベントとして認定
日印交流年実行委員より助成申請受理
(財) 国際交流基金デリー実行委員より協賛申請受理
- 8月 直前合宿実施 (12日・13日)
第11期日本インド学生会議本会議
(於：コルカタ・プネー・デリー 8月15日～9月7日)
- 9月 本会議終了 (9月7日)、反省会
日印文化交流祭「ナマステ・インドゥア 2007」協力 (29日・30日)

- 10月 報告書作成、12期準備
- 11月 報告書完成第11期日印学生会議報告会実施
(3日オリンピックセンターにて)

第12期

- 2007年11月 第12期日本インド学生会議実行委員会発足
第11期メンバーからのヒアリング
各種資料作成(事業計画書・予算書など)第1次京都先遣隊派遣
IIT 同窓会講演会(於:慶應義塾大学)を補助
- 12月 国際開発研究者協会(SRID)学生部にて講演第1次勉強会合宿
財団助成・後援の申請開始
- 2008年2月 日本インド学生会議OBOG総会
- 3月 第2次勉強会合宿
(財)日印協会後援名義受理
- 4月 学生会議合同説明会(日印・日越・日韓・日中・日ケ)実施
外務省後援名義受理
- 5月 インドセンター後援名義受理京都府後援名義受理
第2次京都先遣隊派遣本会議直前合宿
(財)日商岩井国際交流財団より助成金給付
第12期日本インド学生会議本会議
(於:東京・京都 5月29日~6月11日)
- 6月 (財)日印協会より助成金給付
- 7月 (財)吉田茂国際基金より助成金交付
- 8月 報告書完成
第12期本会議報告会実施

第13期

- 2008年10月 第13期日本インド学生会議実行委員会発足
第12期メンバーからのヒアリング
- 11月 各種資料作成(事業計画書・予算書など)
実行委員の募集
- 12月 学生会議合同講演会の企画と実施
(日中学生会議、日露学生会議と協働)
- 2009年1月 実行委員の募集
定例会
- 2月 日本インド学生会議OBOG総会

- 学生会議合同講演会の企画と実施
 (日中学生会議、日露学生会議と協働)
 取材 (メンターダイヤモンド学生記者クラブよりウェブ記事の取材)
- 3月 学生会議評議会の合同イベントの企画と実施
 予算案の見直し
 (財)日印協会後援名義受理
 (財)双日国際交流財団助成金給付
 (財)吉田茂国際基金助成金給付
- 4月 (財)国際交流基金助成金給付
 学生会議評議会合同説明会実施
 外務省後援名義受理
 在インド日本国大使館後援名義受理
 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
- 5月 日本インド学生会議 OBOG 会主催
 「キャリアエクステンジ」参加
 学生会議評議会交流会
 学生会議合同講演会の企画と実施
 (日中学生会議、日露学生会議と協働)
 於：東京大学 5 月祭
- 6月 (財)三菱 UFJ 国際財団より助成金給付
 学生会議合同勉強会 (日中学生会議、日露学生会議と協働)
 勉強会合宿
- 7月 合宿
- 8月 先遣隊派遣(8月5日～)
 第13期日本インド学生会議本会議
 (於：コルカタ・チェンナイ・デリー 8月17日～9月7日)
- 9月 ナマステインディア 2009 出店
 報告書作成
- 10月 報告書作成、決算報告
 財団渉外、14期引き継ぎ準備
- 11月 第13期報告会実施
 学生会議評議会合同報告会実施
 第14期引き継ぎ

第14期

- 2009年 12月 第14期日本インド学生会議実行委員会発足
第13期メンバーからのヒアリング財団渉外
各種資料作成（事業計画書・予算書など）定例会
- 2010年 1月 日本インド学生会議 OBOG 総会
メンバーリクルーティング
定例会
- 2月 財団渉外
SCN ミーティング定例会
- 3月 SCN イベント
予算案見直し
(財)日印協会後援名義受理
(財)双日国際交流財団助成金給与
(財)吉田茂国際基金助成金給与
- 4月 (財)国際交流基金助成金給与
分科会（勉強会）合宿実施（10日・11日）
SCN イベント（25日）
- 5月 SCN 交流会（27日）
文化交流会（日舞・ダンス練習）合宿実施（15日・16日）
入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 ソフトブリッジソリューションズ訪問（25日）
(財)三菱UFJ国際財団より助成金給付
- 7月 在インド日本国大使館 後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
分科会（勉強会）合宿実施（3日・4日）
直前合宿実施（31日・8月1日）
- 8月 先遣隊派遣（8月8日～）
第14期日本インド学生会議本会議
(於：コルカタ・チェンナイ・デリー8月14日～9月4日)
- 9月 「ナマステ・インディア 2010」協力
報告書作成
- 10月 報告書完成 決算報告
財団渉外
第15期引き継ぎ準備
- 11月 第14期報告会実施（14日、オリンピックセンターにて）

12月 第15期引き継ぎ

第15期

- 2010年 12月 財団渉外
各種資料作成（事業計画書・予算書など）
- 2011年 1月 メンバーリクルーティング
第15期日本インド学生会議実行委員会発足
第14期メンバーからヒアリング
- 2月 財団渉外
- 3月 東日本大震災により活動休止
- 4月 予算案見直し
- 5月 入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 （財）三菱UFJ国際財団より助成金給付
合宿オリンピックセンターにて（10・11日）
- 7月 外務省後援名義受理
株式会社インド・ビジネス・センター後援名義受理
- 8月 独立行政法人国際交流基金後援名義受理
JICA 後援名義受理
公益財団法人日印協会後援名義受理
- 9月 本会議直前合宿オリンピックセンターにて（3日）
経済産業省後援名義受理
在日インド大使館後援名義受理
第15期日本インド学生会議本会議
（於：東京 9月10～21日）
「ナマステ・インディア2011」協力報告書作成
- 10月 報告書作成財団渉外
第16期引き継ぎ準備
- 11月 報告書完成決算報告
第15期報告会実施（26日、東京大学にて）
- 12月 第16期引き継ぎ

第16期

- 2011年 12月 財団渉外
- 2012年 1月 メンバーリクルーティング
- 2月 入会希望者へのオリエンテーション
- 3月 第16期日本インド学生会議実行委員会発足

- 第 15 期メンバーからヒアリング
- 4 月 (財) 双日国際交流財団助成金給与
(独) 国際交流基金助成金給与
予算案の見直し
定期勉強会開始
ブログ更新開始
新歓イベント参加 主催：国際協力学生プラットフォーム「絆」(15 日)
新歓説明会 (29 日)
インド側とやり取り開始
- 5 月 新歓イベントビラ設置 主催：YDP Japan Network (5 日)
バンガロール訪問決定
国交樹立 60 周年記念イベント認定
(財) 三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 6 月 笹井大嗣氏からのヒアリング
機関誌第 1 号発行
参加メンバー確定 (リクルーティング終了)
事前合宿実施 (30 日・7 月 1 日)
- 7 月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
(財) 日印協会後援名義受理
中津雅昭氏による勉強会
- 8 月 機関誌第 2 号発行
在日本インド大使館後援名義受理
第 16 期日本インド学生会議本会議
(於：コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー)
- 9 月 ナマステ・インディア 2012 協力
報告書作成開始
- 10 月 財団渉外
報告会準備
- 11 月 報告書完成
第 16 期報告会 (於：東京外国語大学 10 日)
総会
機関誌第 3 号発行

第二部 活動報告

- 1、 年間活動報告
- 2、 各局活動報告

《 年間活動報告 》

第 17 期日本インド学生会議 年間活動（2013 年 11 月現在）

- 2012 年 12 月 メンバーリクルーティング、財団渉外
- 2013 年 1 月 第 17 期日本インド学生会議実行委員会発足
 メンバーリクルーティング
- 2 月 本会議案作成、メンバーリクルーティング、定期勉強会、
 インド側との調整開始
 日本イスラエルパレスチナ学生会議との合同イベント
- 3 月 合宿、事業計画書見直し、本会議プログラムの検討、広報
- 4 月 （財）双日国際交流財団助成金給与
 （独）国際交流基金助成金給与
 参加者決定、分科会議題決定、本会議プログラムの検討、機関紙発行
- 5 月 実行委員参加締切、広報、後援申請、本会議日程・内容最終調整
 （財）三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 6 月 合宿
- 7 月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理
 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 在インド日本国大使館後援名義受理
 在日本インド大使館後援名義受理
 （財）日印協会後援名義受理
 事前合宿
 機関誌第 2 号発行
- 8 月 第 17 期日本インド学生会議本会議
 （於：デリー、コルカタ、バンガロール、チェンナイ
 8 月 6 日～9 月 4 日）
- 9 月 ナマステ・インドア 2013 協力
 報告書作成開始
 第 18 期実行委員募集開始
- 10 月 財団渉外
 報告会準備
- 11 月 報告書完成

第 17 期報告会
機関誌第 3 号発行 (予定)
12 月 第 17 期第 2 回報告会
総会

《 各局活動報告 》

国際渉外局 (International Liaison)

局長：新谷 絵理香

局員：岡部 知美、森 理恵

—概要—

国際渉外局は、本会議開催にあたってお世話になるインド側各関係者様に対し、日本インド学生会議のコミュニケーターとしての役割を担う。本会議の内容調整や各機関様訪問依頼及び調整、後援名義使用許可申請、その他常に学生会議の窓口となり質疑応答や情報提供に応じる。当局の醍醐味は、学生会議の顔として緊張感を持って仕事ができること、そして渡印前よりインド側の方々と直接やりとりができることにより、その人柄に触れることができる点であるといえる。

—反省—

昨年までと方法を変え、今年は都市ごとに担当者を決めて活動した。先方から得たご要請や情報のメンバー間への共有、また、学生会議内の決定事項の伝達をいかに迅速・正確に行うかに尽力したが、膨大な情報量に追いつけず至らぬ部分もあった。今後は引き継ぎに重きを置きたい。

国内渉外局 (Liaison in Japan)

局長：大津 嘉奈子

—概要—

国内渉外局は主に日本に在住されている方との連絡を担当した。具体的には、後援名義使用許可申請、航空券の手配、お世話になっている方々への報告書のメッセージのお願い、会議参加希望者への連絡を行った。

—反省—

後援名義使用申請許可申請や航空券の手配が出発直前になってしまった。より余裕を持って準備を行う必要があった。今後は引き継ぎに力を入れていきたい。

企画局 (Activity Planning)

局長： 大澤 瑞帆

－概要－

企画局の仕事は主に、本会議前後の合宿を企画することだ。本会議前には2回合宿を行い、メンバー間の親睦を深めたり、文化交流時のダンスの完成度を高めたり、分科会の精度を上げたりする事を目標に掲げ、本会議に向けての事前準備に重点を置く。また帰国後にも合宿を実施し、反省点や改善点を共有することで来期以降への引き継ぎにつなげる。本会議の充実のために、JISCの内部や外部との活動を企画するという形でJISCを支える役割を担っている。

－反省－

事前合宿では分科会の練習に多くの時間を割くが、局としてインド側と分科会についての共有があまりできておらず、なかなか本番を想定した分科会練習ができなかった。早いうちから局としてインド側と積極的にコミュニケーションをとり、練習を企画、サポートすべきだと感じた。

学術局 (academe)

局長： 堀友香

－概要－

本会議の分科会のテーマを軸に日本メンバーの学術学習を担当する局である。今期、分科会に向けて4つのグループに分けた。自分の分野にとどまらず、ほかの分野の知識も共有したうえで本会議に臨むべきだということで、それぞれのグループ内での勉強会、全体のグループでの勉強会を行った。この勉強会の日時設定やプレゼンの発表者の割り振りを行った。

－反省－

勉強会の頻度、時期による内容の設定、期の結成から本会議まで期の希望を早い時期に確定、メンバーの負担を考慮の上、逆算して予定を組む必要があったと感じる。分科会の形式やテーマ、トピック等日本側の意見を早い時期で固め、インド側と調整することができれば内容の充実はもちろん、メンバーの負担を軽減することができたと感じる。この反省を踏まえ引き継ぎ資料を作成し、今後の期の参考としてもらいたい。

財務局 (Financial Bureau)

局長：佐波優紀

副局長：柚木隆太

—概要—

本会議の予算を作成し、その案を元に現地でのお金の管理全般を行う。

そして帰国後は、会議で使用したお金を計算し、一年間の決算を作成する。

また、助成財団からの助成金受領や、関係者様との渉外、協賛金の募集、そして来期の助成申請も、財務局の仕事である。

重要書類を扱い、金銭の管理をする局なので、事務的な責任が特に重い局といえる。今期は局員二人で仕事を分担し、取り組んだ。

—反省—

渡印前の反省点としては、予算作成開始時が遅かったこと、更に情報不足、不安定な円レートのため、予算作成に多くの時間を要し、完全な予算が出来上がったのは、渡印直前だったこと。

渡印後の反省点としては、現地での盗難のリスクを減らす必要があると強く感じた。

また、問題視されていた資金運営については、国際渉外局と宿泊代、交通手段について何度も話し合いを重ね、本会議中も常にお金の管理や支出に気を配ることで乗り越えることが出来たが、体力面などでメンバーに無理を強いてしまった場面が多かったように思える。本会議に集中するために確保すべき質の見直しが必要。

広報局 (Public Information)

局長：軽部 真純

—概要—

広報局は機関誌ならびに報告書の発行、J I S Cの活動を広く周知するための広報活動を主な仕事とする。

年間を通して公式ホームページ、ブログ、facebook、twitter の管理・更新や、2ヶ月に1回のペースで関係者向けに機関誌（活動報告）を作成し送付した。本会議中は撮影係に徹し、帰国後は本報告書の編集・発行に尽力した。

—反省—

広報媒体が多すぎて更新しきれず、うまく活用できなかった。ブログの更新などはメンバーで交代して行う等の工夫をするべきだったと感じた。

機関誌は今期では英語版も作成し、定期的に発行することで関係者の方々からご好評をいただいた。

報告書に関しては、帰国後に記事がなかなか集まらなかったため、本会議前から綿密に準備をしておくべきだったと感じた。

第三部 本会議活動報告

- 1、 実施要綱
- 2、 本会議日程
- 3、 本会議日録
- 4、 企業訪問
- 5、 分科会報告
- 6、 文化交流・フィールドワーク報告
- 7、 ホームステイ報告
- 8、 本会議反省
- 9、 修了書

《 実施要綱 》

- 事業名： 第 17 期日本インド学生会議本会議
- 主催： 第 17 期日本インド学生会議実行委員会
- 開催期間： 2013 年 8 月 6 日（火）～9 月 3 日（火）
- 開催地： デリー 8 月 6 日（火）～ 8 月 8 日（木）
コルカタ 8 月 8 日（木）～ 8 月 19 日（月）
バンガロール 8 月 19 日（月）～ 8 月 26 日（月）
チェンナイ 8 月 26 日（月）～ 9 月 3 日（火）
- 助成： 公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団
独立行政法人 国際交流基金
- 後援： 在日インド大使館
在インド日本国大使館
在コルカタ日本国総領事館
在チェンナイ日本国総領事館
公益財団法人 日印協会
国際交流基金 ニューデリー日本文化センター
- 協力： コルカタ 日本語会話協会(Nihongo Kaiwa Kyokai)
Destiny Foundation / Reflection
チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI
東京大学インド事務所
バンガロール KOYO group
INFOSYS
Sony India Software Centre
- 参加学生：
日本
第 17 期日本インド学生会議実行委員会

委員長	永田 光央	青山学院大学国際政治経済学部 4年
副実行委員長・国際渉外局	新谷 絵理香	立教大学法学部 4年
財務局	佐波 優紀	日本大学法学部 3年
広報局	軽部 真純	上智大学総合人間科学部 3年
学術局	堀 友香	日本大学生産工学部 2年
国内渉外局・総務局	大津 嘉奈子	慶應義塾大学法学部 2年
国際渉外局	岡部 知美	国際基督教大学教養学部 2年
国際渉外局	森 理恵	国際基督教大学教養学部 4年
企画局	大澤 瑞帆	青山学院大学国際政治経済学部 2年
財務局	柚木 隆太	東京大学教養学部 2年

コルカタ

President	Ayan Mitra	Jadavpur University
VP(Finance)	Debanka Mitra	IIPM
VP(Event Management)	Sayan Mukherjee	Calcutta University
VP(Culture)	Writosree Mukherjee	RKSM Vivekananda Vidyabhaban
Communicator	Saheli Barua	Calcutta University
Coordinator (The Mad Owls)	Aaleya Chanda	Calcutta University
Coordinator (The Saints)	Divya Bannerjee	Presidency University
Coordinator (The Fighters)	Simpy Ghosh	IGNOU
Coordinator (The Mechano Mesh)	Soham Pal	Techno India
	Anunita Banerjee	Calcutta University
	Deya Ray	National Institute of Fashion Tech,
	Dipnil Das	Brainware Business School
	Pratishtha Chanda	Vivekananda College for Women
	Rajarshi Ghosh	City College (South)
	Sayantana Bhattacharya	RCC IIT
	Sheuli Das	IGNOU
	Siddhesh Goptu	Jadavpur University
	Smaran Basu	City College (South)
	Sohini Roy Chowdhury	City College (North)
	Varsha Agarwal	Calcutta University

チェンナイ

Students of	LIBA (Loyola Institute of Business Administration)
-------------	----------------------------------------------------

《 本会議日程 》

7月31日(水)～ 第1次先遣隊派遣
 8月3日(土)～ 第2次先遣隊派遣

日にち	都市	午前	午後
8/6(火)	デリー	大使館訪問	立命館インドオフィスで学生交流
8/7(水)		自由時間	JICA訪問、チャウラ先生と談話
8/8(木)	移動	自由時間	デリー出発、コルカタ到着
8/9(金)	コルカタ	開会式	自由時間
8/10(土)		文化交流会①	ホームステイ
8/11(日)		ホームステイ	
8/12(月)		分科会①	分科会②
8/13(火)		小学校訪問	NGO訪問、総領事公邸訪問
8/14(水)		分科会③	観光
8/15(木)		自由時間	NKK創立記念パーティー
8/16(金)		分科会	自由時間
8/17(土)		ショッピング	文化交流会②
8/18(日)		分科会成果発表	閉会式、さよならパーティー
8/19(月)		移動	自由時間
8/20(火)	バンガロール	出張駐在官事務所訪問	Christ College訪問、東大インド事務所訪問
8/21(水)		インフォシス訪問	
8/22(木)		自由時間	IJCCI訪問
8/23(金)		ソニーインドシア訪問	Christ Collegeの学生と交流
8/24(土)		日本への留学希望者と交流	KOYOとの交流会
8/25(日)		自由時間	
8/26(月)	移動	自由時間	バンガロール出発、チェンナイ到着
8/27(火)	チェンナイ	開会式	ショッピング、ウェルカムディナー
8/28(水)		博物館見学	JETRO講義
8/29(木)		TAFE訪問	分科会①、映画鑑賞
8/30(金)		分科会②	日本テクノロジー訪問、ビーチ観光
8/31(土)		ヨガ体験	ジャパンナイト
9/1(日)		結婚式参列	閉会式、ホームステイ
9/2(月)		ダクシントラ観光	マハーバリプラム世界遺産観光
9/3(火)	移動	チェンナイ出発、デリー到着	デリー出発、翌朝日本到着

《 本会議日録 》

8月6日 (火) 担当： 軽部 真純

9:00 ダンス練習
10:00 文化交流会練習
11:00 日本大使館訪問
15:00 立命館インドオフィ
スで日本に留学予定の学生
と交流会



いよいよ今日から本会議が始まった。午前中は交流会で発表予定のダンスや折り紙の確認をホテルで行った。先遣のうちに皆インドの民族衣装(サルワールカミーズ)を購入したので、 Bollywood を踊る準備は完璧だ。11 時からは在インド日本大使館を表敬訪問し、大使や書記官の方々と昼食を共にさせていただいた。リラックスした雰囲気の中でインドとの外交政策や経済発展の話がたくさん聞かせていただき、日本大使館の方々の温かいおもてなしには、心から感謝申し上げたい。午後は立命館大学インドオフィスで、近々日本に留学予定あるいは留学希望の学生達と交流をした。どの都市でも言えることだが、インドの学生は総じて向上心や積極性、語学習得能力がとても優れていると感じた。

8月7日 (水) 担当： 堀

14:00 JICA 訪問
18:00 チャウラ先生の研究室訪問



JICA インド事務所を訪問。活動の中でどんな問題が起こり、どう解決しようとしているのかなどお話を聞くことができとてもよい勉強になった。日本の協力の元インドで様々な活動が行われていることを誇りに思った。また、事務所におかれていた資料をいくつかいただいたので帰国したらじっくりと読みたいと思う。楽しみだ。

チャウラ先生の研究室では、印度の教育や文化、政治など日本との違い、そして先生のお考えについて質問を交えながらお話していただいた。初めて知ることが多く、特に印度において戸籍が存在しないというのはかなり衝撃的であった。

8月8日（木） 担当：大津

9:00 お世話になった中村お上人、
WBCの皆さんにご挨拶
14:00-16:00 飛行機でコルカタへ移動
16:30 空港にてコルカタ側の学生と
対面
19:00 ラーマクリシュナミッション
到着



空港でコルカタの学生たちに初対面したが、皆笑顔が素敵なのが印象的だった。また、何時間も私達の到着を待っていて疲れていたであろうが、私達の荷物を運んでくれたり、お菓子を配ってくれたり、終始気遣ってくれた。ラーマクリシュナに到着してからも、チェックインなどの手続きを手伝ってくれ、夜遅くまで一緒にいてくれた。この時はお互いに緊張していたからかそこまで会話は多くなかったが、これから始まる本会議が楽しみになる一日だった。

8月9日（金） 担当：森理恵

10:00 集合
11:00 開会式
13:30 解散
13:30 昼食
その後 自由時間



空港でIJSCの何人かの学生から歓迎を受け、休む暇もないまま次の日開会式を迎えた。IJSCの学生グループはニガム先生を筆頭に我らが到着する約2ヶ月前から準備を進めてくれていた。

最終確認は開会式担当の学生と前日に車の中で済ませ、着替え場所、音響、プロジェクターは万全に用意。17年間日印学生会議が築いてきた成果はこの様な学生の緊張感に現れるのだと思う。

午前11時からの開会は準備のおかげで少し押したが、ハーバード大学の教授やコルカタ領事館の領事を始めとし、日本とインドの架け橋となる重要な面々が顔をそろえた。人々が口をそろえて日本とインドの未来に期待を抱き、どんどん次世代になればなるほど繁栄していく事を願っている。まだまだ土壌としては不完全で、多くの人々を巻き込みしっかりした土台を作っていく必要があるのかもしれないが、力ある現地の日本人、寛容で清い頭脳を持つインド人によってこうして土壌がだんだん出来ていく。

重要人物の挨拶が一通り終わったあと、JISCとIJSCの代表者が挨拶を交わし、日本メンバーが舞台へと案内される。バラとビンディーによるインドスタイルの素晴らしい歓迎を受ける。16期のメンバーが作成したビデオが上映される。写真と一人一人からのメッセージ付きだ。会場の雰囲気ががらりと変わる。その後、日本側による日本紹介のプレゼンテーション。BGMと一緒に更に柔らかい雰囲気が流れ、JISCメンバーの生活の様子と家族の写真を目にし、参加者一人一人との距離が縮まったように感じた。

お互いの催しでは、練習の成果が発揮された。日本側はソーラン節、そしてサプライズとしてポリウッドダンスを2曲披露した。こちらの期待を裏切らない反応で、

多くの人々に喜んでもらえた。インド側は素敵でインドの古典舞踊、歌が会場を魅了した。学生自ら脚本／演出を手がけた劇も鑑賞したが、なかなか分かりづらく理解に苦しんだ。

万全なスタートを切り、これからのコルカタ本会議がどのように進んでいくのか楽しみである。

8月10日（土） 担当：佐波優紀

10:00 Jadavpur University
にて文化交流会①
各自ホームステイ先へ



朝、ISCメンバーのお迎えで Jadavpur University へと向かった。入り口に、IJSC・JISC と書かれた横断幕が掲げられている建物の一室に案内され、その部屋で文化交流会が行われた。IJSCのメンバーは歌を歌ったり、Kolam と呼ばれる床絵を書いて私たちを歓迎してくれたり、メヘンディを施してくれた。日本側ももてなしてもらってばかりではなく、積極的にインド側メンバーに話しかけた。また、日本から持ってきた漫画やファッション雑誌、お菓子にインド側メンバーは興味深々だった。中でも大盛況だったのは、メンバーが持参してきたスルメ。臭い！固い！変な味がする！！...とは言いつつも、なんだか楽しそう。その後、同大学内の食堂で昼食をとってから、日本メンバーは一人ずつ、それぞれホームステイ先と一緒に教室を後にして行った。中でも、絶対楽しんでくるという宣言を掲げ教室を出ていった岡部の姿が印象的だった。

8月11日（日） 担当：岡部知美

終日ホームステイ



ガンジス川の前で

前日に引き続き、ホームステイ先で1日を過ごした。ステイ先によっては近くに住む人達で集まったり、ステイ先の家族とだけでゆったり過ごしたりと各々ホームステイを満喫したようだ。私はインド側メンバー5人と日本人（私）1人だったので始めは少し緊張した。午後は町のキリスト教教会やヒンドゥー寺院、ガンジス川を見に行った。夕食にはホストマザーがチキンビリヤニを作ってくれた。手作りのビリヤニは格段においしかったので少々食べ過ぎてしまった。また、この日はあるインド人メンバーの誕生日だったので夜中にお祝いのケーキをみんなで食べた。インドでは誕生日の人がケーキを切り分け、みんなに食べさせる習慣があるらしい。慣れない生活スタイルに驚き戸惑うこともしばしばだったが、その中にこそ学ぶべきことも多々ある有意義なホームステイだった。

8月12日（月） 担当：新谷 絵理香

10:00-13:00 分科会①
13:00-14:00 昼食
14:00-17:00 分科会②



ホームステイ 2 日目の朝。ホストマザーの作ってくれた朝食をいただきながら談笑をし、名残惜しくも別れを告げた。私にとってこのホームステイは、たくさんの会話や彼らの生活を垣間見ることを通してインドの新たな面を知ることでできた貴重な経験であった。私達を家族同然に歓迎してくれた皆様に心から感謝を述べたい。この日は一日を通して分科会を行った。テーマに沿って 4 グループに分かれ、印日双方のプレゼンテーション、そしてディスカッションをするという流れである。私のグループは「経済発展と社会への影響」を主に話し合うグループで、この日は環境問題に焦点を当てて話し合った。初の分科会ということではじめは手探り状態であったが、後に議論は白熱した。途中トピックが逸れてしまったことが反省点である。

8 月 13 日 (金) 担当 : 大澤 瑞帆

10:00 LA MARTINIÈRE FOR GIRLS (小学校) 訪問

15:00 Destiny Foundation 訪問

18:00 在コルカタ日本国総領事館 訪問



午前中はあるコルカタメンバーの女の子の母校を訪問した。私たちが訪問したのは幼稚園から高校まである女子校であったが、道を挟んで反対側が男子校であった。彼女たちは全員白い同じ制服を着ており、これは学校内では身分や階級が関係ないということを表しているとのことだった。制服の意味合いが日本とは異なることは、新たな発見であった。また生徒は教師に対し従順で、また大変教師を尊敬していた。日本ではあまり見ることのできない光景で、非常に新鮮に感じた。 午後は **Destiny Foundation** にて、活動内容についてレクチャーを受け質疑応答の後、実際に少女がバックなどを作っている様子を見学した。レクチャーの中で、持続可能な支援プログラムを目指しているとおっしゃっていて、それが私にとって非常に印象的だった。夜は、在コルカタ日本国総領事館での夕食会に参加した。日本食を楽しみながら、総領事、そしてインドメンバーとインドの話だけでなく環境問題などグローバル問題についても話し合うことができ、大変貴重な時間を過ごすことができた。

8月14日（水） 担当：柚木隆太

10:00-13:00 分科会③

14:00-15:00 ボースミュージアム

16:30-17:30 ダクシネーシュワル・カーリー寺院

18:30-19:00 Second Hooghly Bridge



分科会、メカノメッシュではサヤンタンとアヤンが二人で発表した。この二人は兄弟みたいに仲良くて羨ましい限りだった。見学した寺院にはどうやら戦いの女神であるカーリーという神様が鎮座されているようだが、この神様、全身黒色（青？）で目が3つ、腕が四本で血と殺戮を好む大変恐ろしい神様。ということで、この神様に呪われないようにそっと見学をした。コルカタ自慢のブリッジのスケールには感動した。特に橋を愛している堀ちゃんのテンションの上がりようは半端なかった。帰りのバスでは、サヤンタンが「Shinjiru ♪」や「世界の一つだけの花」を熱唱していて、とても楽しい雰囲気だった。分科会もいいけど、たまには観光も楽しい、そんな一日だった。

8月15日（木） 担当：大津

17:00- NKK 創立記念パーティー



午前中は各自買い物や休息を取るなど、自由行動だった。私は分科会でのプレゼンが明日に迫っていたので準備をしていた。夕方からはニガム先生のお宅で NKK の創立記念パーティーに参加した。先生方が日本語で「花は咲く」「橋をかけよう」を歌ってくださったり、メンバーの森さんがボリウッドダンスを踊ったり、インド側の学生がベンガル語の歌を歌ったりと賑やかで楽しいパーティーだった。私達日本の学生も、最後に「世界にひとつだけの花」を歌った。まだ日本を離れて1週間ほどだったが、日本の歌を聞くと何故かなつかしく感じられた。同時に、インド（コルカタ）に対して一層親しみを感じるようになってきたとも思う。

8月16日（金）担当：堀

10:00 分科会



プレゼン発表。自分の準備の不足を反省したのはもちろんだが、それ以上にインド側メンバーの知識の幅・深さに圧倒された。また、ディスカッションにおける話の組み立て方、英語力にも刺激を受けた。話に追いつくので精一杯な部分も大きかったが、メンバーや通訳の方の手助けを受けながら話を進めていた。どんな分野のことを聞いてもなんでもこたえてくれるディープニル君の存在は THE FIGHTERS にとってとても心強かった。交通について話し、PASMO を紹介したところ、使用済みのバス定期権をくれた。料金や学生割引だったりと比較材料となって面白かった。

8月17日(土) 担当: 永田 光央

11:30: South city にあるデパートでインド学生と買い物

13:30: 昼食

15:00: 文化交流会

20:00: 夕食



この日は、何人かのインド学生がショッピングに連れて行ってくれた。サウスモールというそのショッピングモールは、日本のデパートよりも綺麗なくらい先進的であった。その後、私たちは学生に招かれてお家を訪問した。UNOなどのゲームで遊んだ後に、メインである文化交流の衣装交換を行った。男子はクルタと甚平、女子は浴衣とサリーをお互いに着せあった。個人的に甚平の着せ方がうまくいかなかったのが大きな反省点だったが、とても楽しく交流することができたこと、女子学生が浴衣を着られて凄く嬉しい表情をしていたのが印象的であった。

8月18日(日) 担当: 佐波優紀

- ・分科会成果発表
- ・閉会式
- ・さよならパーティー



Jadavpur University にて、分科会のまとめを行った。各グループごとに分科会の良かったことや改善点を発表した後全体で振り返りを行い、今日まで意見を交わした仲間と、分科会の閉会を惜しんだ。そして夕方から閉会式が始まる。司会は開会式でもお馴染みの Sayan と Aaleya。催しは、Pratishtha、Deya の日本のアニメソングから始まり、Siddhesh によるチェロの演奏、Writosree のインドの古典舞踊、日本側実行委員全員の Believe 歌唱と続いた。更に Soham の提案でインド人と日本人でソーラン節を踊ることになり、会場からも”ソーラン!ソーラン!の掛け声が掛か

り、大いに盛り上がった。Ishan と Rajarshi によるフォークソングと閉会式は進んで行き、最後に全員で別れを惜しむベンガルソングを歌った。催しが終わると、一人ずつ日本人の名前が呼ばれ、日本語会話協会から卒業証書が授与され、10 日間続いた Kolkata の本会議はこうして幕を閉じた。そして別れの悲しみを取り繕うように、今度はさよならパーティーが幕を開ける。会場にはボリウッドソングが流れ、多数の学生が円を囲み、ダンスを楽しんだ。最初は学生だけだったが、多くの先生方もダンスに加わり、国境も世代も超えたダンスパーティーが始まった。しかし楽しいときはそう続かず、いよいよお別れの時間に。中には泣き出すメンバーもあり、会場は別れを惜しむ言葉でいっぱい。生まれた国は違う、育った環境も違う、知っている世界も違う、話す言葉も違うが、互いを思いやる気持ちは一緒だ。たったの 10 日間だ。当然まだお互いに理解できないこともある。しかし日本から遠く離れた異国で、自然に抱き合っ別れを惜しめる友人達を、私達は見つけたのだ。

8 月 19 日（月） 担当：森理恵

13:00 ホステル出発
15:25 コルカタ出発
17:55 バンガロール到着
19:00 シバニさん宅到着
その後 ミーティング /
Dinner



昨夜に行われた閉会式とさよならパーティーの余韻もつかの間、疲れ果てたメンバー達は次の都市へと今日移動する。コルカタでは体調不良者が目立ったが、文化交流会、分科会、ホームステイを通して学生との交流はとても有意義なものとなった。一人一人がそれぞれの形で友情を深め、団体としてもそれから個人としても繋がりが深いものになった。ホステルでのチェックアウトや全体の開催費の支払いはニガム先生の多大な協力により、特に問題がなくスムーズに執り行われた。ほとんどの IJSC メンバーがホステル、もしくは空港までお見送りに来てくれた。たった 5～10 分のさよならを言うために同行してくれた友達には感謝してもしきれない。空港では殆どの JISC メンバーがスーツケースの重量オーバーにより、1500 ルピー程度の料金を払うことになった。荷造りはいくら工夫しても、4 都市まわるとなれば仕方ない。

約 2 時間強、更に南へ。日系企業が多く進出するバンガロールでの滞在が始まる。

空港を下りた瞬間、Toyota や Sony の広告、走っているタクシーは Honda のマークが目に入る。空港からバンガロール市内へのハイウェイはまるで東京を思い出させる綺麗さ。インドという国はそれぞれの都市がそれぞれのスタイルとペースで発展を遂げているから面白い。デリーで中村さんが口にしていた”インドは United Union”という言葉がしっくりくる。約1時間少しかけて、シバニさん宅に到着。南インド料理のディナーと共に歓迎を受け、JISC の女性メンバーには3つの広い部屋が用意されていた。バンガロール気候と滞在の環境の安定感に、安堵を覚えた。その後バンガロール内での簡単なスケジュール共有を行い、みんな疲れていたのでは就寝。

8月20日(火) 担当：岡部知美

10:00-12:00 日本大使館出張
駐在官事務所訪問
14:30-16:45 Christ College
Campus Tour
17:00 東京大学インドオフィ
ス訪問



出張駐在官事務所にて

午前中は出張駐在官事務所へ訪問し、バンガロールの政治・経済事情、文化交流について領事・山本様、副領事・長谷川様からお話を伺った。外国企業が多く進出するバンガロールならではの社会事情を知ることができ、非常に有益だった。邦人数は比較的少ないが、その中で日本文化に関するイベントなどが定期的に開催されていることは喜ばしかった。その後、Christ College では広い校内を案内してもらった。バンガロール内でも学費、レベル共にトップの大学のように諸施設が充実していた。また、校内でエコを推進しており、古紙を再利用して雑貨を作る過程を見学した。次に東京大学のインドオフィスを訪問し、日本の若者・インドの若者の比較についてなどお話を伺った。日本の未来について考えさせられた。

8月21日(水) 担当：大澤 瑞帆

Infosys Mysore Campus 訪問



この日は Infosys Mysore Campus を訪問させていただいた。まず到着して驚いたのは、Campus の巨大さ、そしてホワイトハウスを模したトレーニングセンターを始めまるで異国にあるかのような建物の数々、そして綺麗に整備された道路だ。門の外は、のどかな風景が広がっているが、一步ここに入ると全く雰囲気が異なり、身が引き締まる気持ちになった。はじめは企業理念、この Campus でのトレーニング内容についてのプレゼンテーション。PC等の技術的なトレーニングだけでなく、グローバルスタンダードとしての振る舞い方までもトレーニングしているということに驚いた。その後、Campus 内のツアーをしていただいた。ジムやスイミングプール、病院、ムービーシアターなど設備が完璧に整っており、一つの街の中にいるような感覚になった。Campus 内では、インド人だけでなく他のアジア人をよく見かけた。世界から研修を受けに、若者がこの Campus に来ていると考える度に、この Campus の偉大さを実感した。

8月22日(木) 担当：永田 光央

午前中：自由時間
12:00-13:00 お昼
14:00-17:00 IJCCI 講演



この日の午前中は、昨日の疲れもあり各自自由に時間を過ごして疲れをとった。午後からは IJCCI の職員お二人から講演があり、私たち学生にプレゼンテーションをして頂いた後に、質疑応答という形で行った。内容は主に日印関係全般であったが、その中でも特になぜ日本がインドに対する投資を欧米諸国に比べて遅れてしまっているのか？という点がとても興味深かった。これからインドで仕事をする時、また世界に出て仕事をする時に、インドの市場に適したマーケティングを行い、この市場で成功することが、世界での成功につながる。日本のビジネスにとってインドの重要性が強くなってきていることを実感した。

8月23日（金） 担当： 新谷 絵理香

9:00 SONY India software center Private Limited 訪問
14:00 学生交流（ Christ College ）



午前中は SONY India software centre Pvt. Ltd. を訪問させていただいた。はじめはインドの IT 業界及び業務内容についてのプレゼンテーション。ここで、昨日 IJCCI にて受けた講義が大変役立つ。昨今のインド IT 業界の情勢、それに対する各国の反応、今後の課題への理解が深まった。その後は入社 1 年目のインド人若手社員の皆様との交流。エンジニアとして働く彼らの価値観や展望、印日双方の文化について意見交換を行った。総じてバンガロールならではの経験であった。

午後は Christ College にて学生の皆さんとの交流を行った。歓迎のセレモニー、日本文化紹介のプレゼンテーションを行った後はグループに分かれ、それぞれ印日の文化に特化して情報交換を行った。私が印象に残ったのは、インド中からこの学校に生徒が集まってきているため、非常に多様な生徒がいるということである。

8月24日(土) 担当：堀

午前：日本への留学希望者との
交流会

午後：KOYO と簿文化交流会、
東大インド事務所訪問



この日は、日本に興味を持つ方々との交流が主だった。皆、日本への関心を持ち始めた理由は様々で興味深かった。そして、午後は KOYO という日本語学習者の集まる団体との交流会を行った。ダンスを踊ったり、歌を歌ったりとインドの文化に触れた。また、米粉で描く絵に挑戦。初めは難しかったが、徐々にコツをつかんできていろいろな色を用いてカラフルなデザインに仕上げることができ、とても楽しかった。

8月25日(日) 担当：大澤 瑞帆

スラム訪問



この日はメンバー全員が自由時間であった。そして私は二つのスラムを訪問した。一つ目のスラムは、道を挟んで片側がスラムなのに対し、もう片側には高層ビルが立ち並んでおり極めて対照的であると感じた。スラム街では、物乞いの子供たちが多数いるイメージだったが、私の予想とは反対に誰も私たちにお金を要求してくるような子供はいなかった。このスラムでは二軒の家に訪問したが、二軒とも家にテレビがあったことに驚いた。このスラム街ではほとんどの家にテレビがあるらしく、自分が描いていたイメージと異なり衝撃を受けた。二つ目のスラムは、一つ目のスラム街とは異なり、家が密集している形のスラムであった。訪問させていただいた家では、チャイとクッキーで温かくもてなしてくれた。どんなに貧しくても、

お客様を神様としてもてなすのはインドの習慣であると彼らは言うており、この言葉が非常に私にとって印象深かった。二つのスラムを訪問して言えることは、スラムの定義は大変難しいということだ。そして自分の中にスラムに対する偏見があったことをひどく恥じた。実際に足を運んでみることで、得るものが多くあり、貧困問題を改めて考える良い契機となった。

8月26日(月) 担当：永田 光央

14:00 バンガロール発
20:00 チェンナイ着



この日、私たちはバンガロール最終日を迎えた。女子学生がホームステイさせて頂いていたシバニさん宅にお昼集まり、物凄く美味しいビリヤニをご馳走になった。今まで食べたビリヤニの中で一番美味しかった。その後、駅に向かい列車を待つこと1時間。予定通りに列車はチェンナイに向けて発った。これまで私がインドで乗ったことのある列車と違い、とても快適で日本の特急列車と変わらないくらいであった。無事に長旅を終えて、チェンナイでの日々が始まった。

8月27日(火) 担当：柚木隆太

10:00-12:00 ABK-AOTS 同窓会にて開会式・交流
12:00-13:00 ジャパンナイトのリハーサル
14:00-17:30 skywalk mallにてショッピング
18:30-20:00 ABKにてウェルカムディナー



「hot, hotter, hottest」と言われるチェンナイはやはり暑かった。というか予想以上に暑い。ABKにての開会式ではメンバー一人一人が呼ばれ、インドの国旗をモチーフにした大きな飾りをつけてもらい、とても温かい歓迎を受けた。ABKには流暢に日本語を話す人が20人もいるそうで、皆さんとても上手に日本語をしゃべる。日本人として嬉しい限りだ。Skywalk mallでのショッピングではメンバーそれぞれ買い物やお土産探しを楽しんだようだ。僕は永田と一緒にゲームセンターに行ったり、面白そうな映画・本を買い（日本と比べると大変安かった）、日本へのお土産もここで買った。ウェルカムディナーではABKの生徒の皆さんと交流した。大切なことなので二度言うが、本当に日本語が上手で、外国語を学ぶものとして見習わなければならないと実感した。

8月28（水） 担当：佐波優紀

国立博物館見学
JETRO 守岡さん講義
Iscom 観光



SarathiさんとBharathさん。付添の下、博物館の見学をした。彼らは到着するなり、古代のことから近現代の製糸業まで細やかに我々に教えてくれた。中でもインドの神の話はとても興味深く、皆真剣に耳を傾けていた。その後ABKに移動し、JETROの守岡さんのお話を頂いた後、この日はクリッシュナの誕生日ということで、ABKメンバーとIscomに向かった。お寺までは裸足で行くのだが、道中の道は小石が足の踏み場もないくらい落ちていて、インド人二人の手を借り、やっこのことで寺院に到着した。そしていよいよクリッシュナを祭る本堂の中へと入る。そこには、賑やかな音楽でクリッシュナの生誕を祈る人々がいた。こんな賑やかなお寺も中々良い...

その後海へ行って、インドならではの海の遊び方を体験し、食事をとってから、この日は帰宅した。

8月29日(木) 担当: 柚木隆太

8:00 出発

10:00-12:30 TAFE 訪問

14:00-17:00 LIBA にて分科会①

18:00-20:30 ABK にて映画鑑賞



TAFE ではインド農業の現状を垣間見ることができ、とても貴重な経験をさせていただいた。やはりインドでも日本でも農村は落ち着くな、と思った。LIBA にての分科会は経済・格差というテーマだけでなく結婚観など様々なことを聞いてよかった。インドの婚活サイトには爆笑した。LIBA の学生は一度企業に就職してからLIBA に勉強しにくる学生もいて、とても真面目な印象を受けた。また日本についてもとてもよく勉強していて感銘を受けた。タミル映画はとても面白かったのだが、それよりもチェンナイの皆のリアクションの大きさに驚いた。日本の映画館とは大違いだった。今日もハードでしたが充実した一日だった。

8月30日(金) 担当: 森理恵

9:30 Loyola University キャンパスツアー&分科会

1:30~2:30 昼食

2:30 日本テクノロジー訪問

4:00 Elliots Beach 自由時間



Loyola University の学生との分科会は大変有意義なものになったと皆が口をそろえて言った。全体で2つのグループに分かれ、インドと日本の社会的な問題と経済発展についてセッションを行ったわけだが、相手は経済／経営を専攻しているトップクラスの大学院生。私達と果たして話す時限が噛み合うのかと心配していたが、以外にもお互いの知らない知識を探索するような形になり、真剣なトピックから個人個人の意見、そして国家としての意見を聞くことが出来た。時折、娯楽や結婚、学生生活の話で盛り上がり、アカデミック且つ国際交流に根ざしたなんのしがらみもない交流となった。Loyola University の歓迎、準備、そして寛大な対応にはこちらも感銘を受けた。これからのこの大学の生徒がパートナーとなってくれることを強く期待している。

次に NIHON TECHNOLOGY にて新入社員のインド人と交流を交わした。ちなみに昼食は先方のご好意で日本の弁当が用意されていた。久しぶりに日本料理にこの上ないありがたみを感じた。交流会はかなりフランクなもので、日本語の紹介や相手の出身地の話など、フレンドリーなものとなった。

その後、ビーチに移動。インドで触れる初めての海。砂浜がどこまでも続く場所で海水浴を楽しんでいる人はあまり見かけなかったが、座って夕日を眺めたり、馬に乗ったり、射的を楽しんだり、ゆっくりと平和な時間がそこに流れていた。

8月31日（土） 担当：岡部知美

11:00-12:00 Yoga 体験

12:30-13:30 昼食

17:00-20:00 ジャパンナイト



午前中は ABK-AOTS へ移動し、ヨガをした。ヨガというとストレッチのようなものを予想していたが実際には呼吸を整えながらする瞑想だった。インド発祥のヨガには色々な種類があり、瞑想一般的なもの1つだそうだ。体験後には気が少し軽くなったような感じがした。昼食後はジャパンナイトに向けての出し物を確認・練習した。その後移動し、本番へ。会場には多くのインド人日本語学習者や日本人が集まっていた。チェンナイにこんな多くの日本人がいることに驚いた。どの団体も上手に日本語を使いながら劇や歌を披露し、私達も知らないような日本文化について紹介していた。私達はソーラン節と折り紙を披露し、どちらも大盛況だった。このような文化交流が今後も続いてほしいと思った。

9月1日(日) 担当：新谷 絵理香

7:30 結婚式参列

13:00 ABK-AOTS DOSOKAI
訪問

学生交流

14:30 閉会式

15:30 ホームステイへ



早朝6時半に宿を出発。ABK-AOTS DOSOKAIのおひとり、GAYATHRIさんの結婚式に参列させていただいたためだ。到着した午前7時には、既にセレモニーが始まっていた。ヒンドゥー教、タミルナド州方式のその結婚式は圧巻。衣装の華麗さ、参列者の多さも含めた式そのものはもちろんのこと、私は特にセレモニーひとつひとつにこめられた意味や、インドにおける結婚式の位置づけに感銘を受けた。その後はABK-AOTS DOSOKAIの日本語クラスに参加し、学生の皆さんとの交流を行った。日本に興味を持ち、質問してもらうことはいつでも嬉しい。回答するという事は、私自身日本について再考し、勉強する良い機会となってきた。

9月2日(月) 担当：軽部 真純

9:00 ホテル出発

バスで移動

10:30 ダクシンチトラ見学

13:30 昼食

14:30 バスで移動

15:30 マハーバリプラム
見学

17:30 バスで移動

19:00 日本食レストラン
「赤坂」で夕食

20:00 ホテル到着



この日は終日チェンナイ観光をした。最初に訪れたダクシンチトラはインドの様々な地方の家や文化、民芸品を知ることが出来る博物館のような所だ。州によって多様な特徴があり、インドのダイバーシティを改めて実感した。午後は世界遺産群があるマハーバリプラムを訪れた。私は事前にガイドブックを読んでいなかったのに、建造物の詳しい歴史は知らずに行ったのだが、それでもヒンドゥー教の神様や象の迫力ある彫刻を前にすると圧倒された。夜は久しぶりに日本食を食べ、味噌汁を飲んでホッとしている時、どんな異国にいても、やはり私は日本人なのだと感じた。何人かのインド人も日本食に挑戦していたが、味の控え目な日本食は、あまり彼らの口には合わなかったようだ。

9月3日 (火) 担当： 軽部 真純

10:45 チェンナイ発
13:00 デリー着
21:10 デリー発
(翌 8:45 日本到着)



とうとう本会議最終日を迎えてしまった。この1ヶ月を振り返り、長かったような、けれども名残惜しい気持ちでいっぱいになった。明日からはまた日本での日常生活が待っているという現実が信じられなかった。

お別れするとき、ソムさんがサプライズで、チェンナイでの写真をまとめて編集したオリジナル CD-ROM を皆にプレゼントしてくれ、温かな優しさにとっても感動した。

ABK メンバーの中でも特に仲良くなったハルシャさんとは「また必ず会おう」と約束し、帰国してからも連絡を取り合っている。

最後までインドを満喫したかった私と委員長は、デリーでのトランジットの際に空港を出て、オールドデリーの熱気を肌で感じてから、日本行きの飛行機に乗った。

最後に振り返って感じたこと。JISCに参加して、本当に良かった！

《 企業訪問 》

JICA 訪問レポート

柚木隆太

◆訪問日時：2013年8月7日

◆訪問目的

- ・インドにおけるインフラ整備が人々の生活にどのような影響をもたらすのか、デリー・メトロの現場視察を交えながら理解を深める。
- ・インドのインフラ整備に協力・貢献することで日本にはどのような恩恵があるのか、探っていく。

◆当日のタイムスケジュール

- 14:00-15:00 JICA 全般・デリー・メトロ事業の基礎情報講義及び意見交換会
- 15:00-17:30 デリー・メトロ現場視察

◆概要

- ・JICA とは世界最大規模の二国間援助機関であり、技術協力・有償資金協力・無償資金協力などを各国のニーズに合わせて提供することで国際協力の促進及び日本ないしは国際社会の健全な発展に資することを目的としている。
- ・インドにおける代表的な JICA 協力事例としては、産業面においてはデリー・ムンバイ間に貨物専用鉄道を敷設し、周辺に工業団地・道路・港湾・住居・商業施設などを整備することで産業復興を図るデリー～ムンバイ間産業大動脈構想やインフラ整備により開発を進め、日本企業の進出も促進するチェンナイ～バンガロール間産業大動脈構想、そして製造業経営幹部育成プログラム、インフラ面においては生活に不可欠な水・電気分野に関して包括的に支援する上下水道セクター支援、電力セクター支援がある。教育面においては I I T ハイデラバード校を支援するプログラムがある。

- ・中でも代表的な協力事例は、メトロセクター支援である。JICAは現在デリー、コルカタ、バンガロール、チェンナイにおいてメトロプロジェクトを展開しており、中でもデリーメトロ事業は開通に伴い、①低運賃（初乗り 8 ルピー）による交通渋滞の解消 ②「安全」と「納期」をまもる日本の工事文化の定着に寄与し、マンモハン・シン首相に「Delhi Metro is a shining example of Japan-India partnership.」と言わしめた。



(JICA INDIAOFFICEにて)

◆現場視察を通じた考察

- ・現場視察のみならずデリー滞在中にデリーメトロを頻繁に利用して感じたことであるが、デリーメトロは大変安全な交通手段だと感じられた。インド人は規律よくホームに並び、車内でも静かに電車に乗っており、特に危険性は感じられず、JICAそして日本企業の協力の効果がしっかり出ていると感じられた。
- ・一方で、大変に便利な交通手段であり、間違いなく人々の生活を便利・快適にしていると感じられた、というのは従来であれば渋滞の中を自動車またはリキシャーを使って長時間移動するところを、メトロを利用すればきまった時間で確実に移動できるからだ。市内であれば大抵のところ移動でき、今後はグルガオン方面の路線も開通されるようである。

- ・メトロの車体は韓国の現代ロテム・日本の三菱電機・ドイツのボンバルディアのいずれかが製造しており、印象的にはボンバルディア製が目立ち、JICA が多大な貢献をしたにも関わらずデリーメトロにおける日本・JICA の貢献が見えにくい、と感じられた。メトロのみならず、インドのインフラ整備のあらゆる場面において価格競争で日本の企業が敗れることが多いようで、これを解決していくことが今後の課題である。
- ・メトロ自体は問題なく動いているが、駅中・駅前の商業施設などは少なく、発展段階である。今後メトロの利用を増やしていくためにはコンサルティングも利用しながらメトロ施設を複合的に発展させていく必要があり、日本の駅前・駅中施設が大きく参考になるであろう。

最後に、JICA の皆様、貴重なお話をありがとうございました。

Infosys Limited 訪問

大澤 瑞帆

◆ 1. 訪問日時

2013年8月21日(水)

◆ 2. 訪問場所

Infosys Mysore Campus

◆ 3. 訪問目的

[1] 経済発展の鍵を握るIT産業で成功を収めるインドの代表的な企業を訪問することで、インドの経済発展における理解を深める。

[2] 急速な経済発展の中で、インフォシスがグローバルマーケットにおいて成功した要因を探る。

[3] インフォシスの魅力、そして今後インフォシスがグローバルマーケットの中で目指すべき方向性を知る。

◆ 4. 当日タイムスケジュール

10:00~12:00 会社概要について講義拝聴

12:00~13:00 キャンパス内レストランにて昼食

13:00~15:00 キャンパス内視察

◆ 5. 概要

[1] 1981年に7人によって250万ドルの資金で創立された。今日、売上高68億2500万ドル(2011年度第3四半期)を誇る、ITコンサルティング業界の「次世代型」グローバル・リーダー企業に成長。

[2] インフォシスは、ビジネスおよびテクノロジー・コンサルティング、アプリケーション・サービス、システム統合、プロダクト・エンジニアリング、カスタム・ソフトウェア開発、保守、再構築、独立テスト、検証サービス、ITインフラストラクチャ・サービス、ビジネス・プロセス・アウトソーシングなど 様々なサービスを提供している。

[3] 最高の人材がいて、コストが安く、リスクの少ない場所で作業を実施する、とい

うグローバル・デリバリ・モデル（GDM）の考え方が基本となっており、インフォシスは GDM の先駆者である。

- [4] 米国、インド、中国、オーストラリア、日本、中東、英国、ドイツ、フランス、スイス、オランダ、ポーランド、カナダなど世界各地に拠点を持ち、64 のオフィスと 68 の開発センターに従業員（インフォシスおよび子会社）145,088 人を有している。（2011 年 12 月 31 日時点）。
- [5] 今回私達が訪問させていただいたのが、その中でもバンガロールにある、Infosys Mysore Campus という世界最大級の教育設備である。330,480 坪（270 エーカー）という広大な敷地で、4500 人も人間が同時にトレーニングを受ける事が可能だ。コンピュータ設備、教室、各国料理が楽しめるフードコート、宿泊施設はもちろん、クリケット、テニス、ボーリング、スカッシュなど各種インドア・アウトドアスポーツ施設、映画館や医療施設も用意され、従業員が快適に過ごせるよう深く配慮されている。

◆6. キャンパス見学を通しての考察

- [1] インドの急成長やグローバルな競争下において、人材育成面での遅れの解決に注目したのがインフォシスである。講義によると、エンジニアを学ぶ学生において学術面と産業面の間で広いギャップが生じているという。つまり、学術的には高い能力が備わっているが、それがビジネスを含め産業面で上手くいかせないということだ。また、社会人であっても経験や能力が伴わないうちに昇進するケースが増え、こうした人材を世界に通用する人材に育成するのが、インフォシスのはたらきである。
- [2] キーワードは、グローバルスタンダードだ。インド国内だけに通用する人材を育てるだけでなく、アメリカ、ヨーロッパなど世界で活躍できる人材育成が鍵となる。だからこそ、コンピューター等の技術面の教育だけでなく、なまりのないビジネス英語やチームワークにおけるコミュニケーション、ビジネス時のマナーなども海外での活躍を見据えて教育している。また、欧米を模したキャンパスの環境での教育で、こうした環境への慣れと順応性を育んでいる。
- [3] 講義で何度も強調していたのが、他社とは違うインフォシスの企業理念だ。それは、頭文字をとって、CLIFE と略される。具体的には、顧客の価値、模範となるリーダーシップ、誠実と透明性、公正、卓越性である。こうした企業理念をしっかりと教育し、教育される側もこれを理解し、常に念頭に置いた上で、研修を受け

るというシステムがインフォシスならではである。



IJCCI 訪問報告

森 理恵

～IJCCI とは～

IJCCI (Indo-Japan Chamber and Commerce and Industry)、日本インド商工会は日本の企業家グループと日本総領事の協力により 2006 年に設立された。日本とインドのビジネスの動向、的確なアドバイス、また日本企業が多く進出するバンガロールにおいて日本人向けに生活週刊誌を発刊したりしている。

～訪問目的／動機～

8 月 22 日、東京大学インド事務所所長吉野先生のご紹介のもと、近年インド日本の経済的タイアップが注目される中で、現状把握と今後の課題を議論するために今回の訪問が実現した。

～内容及び感想～

現地インド人2人の職員から2つのプレゼンテーションを頂き、その後質疑応答という形でセッションは進んだ。1つ目のプレゼンテーションはインドと日本の歴史的な経済のつながり、近年の動向、日本企業側がインドに抱いているリスクやポテンシャル、インド側の日本に対するマインドをまとめたものであった。日本は欧米諸国と比べて、インドへの進出が10年以上遅れており、今もなおその動向は相変わらず遅い。インド側はおおむね日本とビジネスすることを歓迎しているが、日本側はインドのマーケット規模には魅力を感じてはいるものの、リスク回避を優先しすぎてコミュニケーションがうまくいっていないようだ。インドも日本も準備はできている。ビジネスにしても政治にしても欠けているのは、お互いの興味、もっともっと相手とコミュニケーションを取ること、それにつける気がした。

2つ目のプレゼンテーションはインドのIT産業について。ITについてはメンバーの誰一人として専門がないため、あまり踏み込んだ議論には発展しなかったが、誰一人としてインドのIT産業のスケールと質には疑いを持った人はいなかった。間違いなくグローバルNo.1の人材をインドは駆使している。IJCCI職員による、取捨選択され、熱意に満ちたプレゼンテーションはメンバー一人一人にモチベーションを持たせた。

これからどの分野に進むにしろ、より深く大きな関係を日本とインドの間に築いていけるアクターは間違いなく私達の世代だ、そんなメッセージも与えられた時間となった。



Sony India 訪問

堀 友香

● 訪問先

ソニー・インディア・ソフトウェア・センター

● 訪問目的

インドといえば IT。しかしなぜインドで IT なのか、そもそも IT とはなんなのか知っている人は少ない。そしてその恩恵を私たちはどんな形で受けているのか。そして、日本企業でありながらインドに進出しているソニーだからこそ語れる目覚ましく経済成長をするインドにおける日本企業の実態を知ることによって日印関係について勉強させていただきたいという思いで企業訪問のお願いをさせていただいた。

● 概要

8 月 23 日、ソニー・インディア・ソフトウェア・センターを訪問。オフィスは経済特別区、ブリンダン・テック・ビル内にある。1994 年 11 月に設立された。ソニー・インディアはここバンガロールをはじめ、インド国内に 23 の拠点を構える。

公用語のひとつである英語、高い数学力を持つ人材、コスト安、地理的条件(アメリカとの時差 12 時間のため 24 時間作業ノンストップ可能)を武器に躍進を続けるインド IT 業界。インド国内各地でソフトウェア開発が活発に行われている。特に私たちが訪れたバンガロールには世界各国から有名企業が集まる。今回ソニーのインドでの事業を含め、様々なお話を伺った。

広大な国土を持つインド。そのため、地域ごとにビジネスの戦略も変化する。また、従来からの主要ターゲットである富裕層だけでなく、拡大しつつある中間所得層へのアプローチも積極的に進めている。主力はテレビ事業。ブラビアは金額ベースでインド No.1 のシェアを誇る。そして、これを追い抜かずと予測されているのがスマートフォン事業である。

今や、世界の三大スマートフォン市場となったインド。世界中から企業が集まり競争を繰り広げる。その中で、ソニーの商品はサムスン、ノキアなどと比較して高い価格設定となっている。街中を見渡せば、ノキア、サムスンといった海外企業、地場企業の商品を多くみかける。親しくなった学生もほとんどがサムスンユーザー。しかし、ソニー商品の人気は根強い。その要因は高い品質とブランド力にある。

価格の安いサムスン、みんながほしい一つの商品を作るアップルに対して、市場調査を行い、その国の需要に合わせた製品を作る。これがソニーの個性だ。青に対する感覚がほかと異なるインド人のために色彩表示を切り替えたり、大音量を好むことからサウンド部分を改良したりとインド人の好みに合わせた工夫をしている。このほかにも、多くの公用語を抱えるインド。その言語環境に合わせて複数の言語に対応した機種も生産している。これは自分のローカルな言語が使えると大変好評だそうだ。このように、インドらしい需要に対応するソニーの個性に、面白さを感じた。IT はこれを技術の面で支える。ここバンガロールでは、主に組み込みとサポートを行っている。1800 人の従業員のうち、日本人はたった 1%。インド全土から優秀な人材を集められる。

世界中の企業が優秀な人材を確保するために高い報酬を用意したりとしている中でソニーはそれほど高くはないようだ。しかし、新人社員の方とのディスカッションの中で、ソニーのブランド力、そして就職した後も学べる研修環境に魅力を感じた就職先に選んだという意見が出ており印象に残っている。

今後も順調な成長利益が見込めるというソニー・インド。インドはソニーにとって中国、アメリカ、日本に次いで 4 番手の市場である。今後もさらに成長していくことだろうが、さらなる努力でアッと驚くような革新を見せてくれることに期待する。

そして、今回訪問を快く受け入れ、このような貴重な機会を設けてくださった武鐘行雄様をはじめソニー・インド・ソフトウェア・センターの皆さん、そしてご紹介していただいた東京大学インド事務所吉野様に感謝申し上げたい。

参照：

<http://www.sony.co.jp/SonyInfo/IR/financial/ar/2011/report2011/arj-11-00.pdf#page=35>



Training Centre of TAFE 訪問レポート

新谷 絵理香

本会議も終盤を迎えてきた8月29日、私たちはProduct Training centre of TAFEを訪れた。チェンナイ市内から南方へバスで1時間、Kelambakkamという地にあるこの企業施設で、インドの農業事情とそれに対する取り組みについて学んだ。

TAFE 概要

Tractors and Farm Equipment Limited という正式名称の表す通り、TAFE は主に農業用トラクターやその周辺機器を製造する企業である。1960年にチェンナイで創設された。トラクターの製造量は現在世界3位、インド国内では2位、国内シェアは25%に上る。子会社の業務内容を含めると、トラクターのみならずエンジン、バッテリー、ポンプなど、器具一つ一つの製造も手掛けている。

私達が訪れた Training Centre は、新入社員の方々がまず農業全般や製品の知識、操作方法を学んだり、社会性を身に着けるためにチーム作業の訓練を行う場であった。

TAFE のはたらき

前述の農業機器類製造と合わせて TAFE が行っているのは、実際に農家の畑へ行き、機械の使用方法の実演をしたり、効果的な作物育成方法や農業知識全般を伝えるというサービスである。これらは、自社製品の周知はもちろんのこと、農業の機械化促進それ自体や、農業に関する正しい知識の拡大をも目的としている。

インドの農業事情と課題

なぜ同社は上記のようなことをも行っているのか。そこには日本とは異なるインドの農業事情があった。近年インドにおける農産業は、GDPに占める割合が16%(*1)とそのウェイトは低くなっているものの、従事者は全労働人口の5割にあたる2億7000



万人(*1)と圧倒的な規模を誇り、依然として国内の重要な産業であると捉えられている。また、世界第7位の国土面積を持ち世界第2位の人口数であるインドは、農産業の生産量がきわめて多い。コメや小麦においては世界第2の生産地だと言えるという。このような圧倒的スケールをもつインド農業であるが、課題もまた存在する。

(写真：自社農地 J-farm)

その一つが、生産性の停滞だ。人口増加の一途をたどるインドではこの先も穀物需要が増えていくことが予測されるが、近年の生産性では対応しきれないと指摘されている。そこで求められる解決策のひとつが、農業の機械化である。創設以来、国内初の農業トラクター生産及び販売会社としてインド農業の機械化を促進してきた同社だが、今後も農業機械市場には大きなポテンシャルがあるという。

ただ一概に機械化推進といっても、一筋縄ではいかない。例えば農業従事者の中には、それまで受けてきた教育との関係で、機械の使い方を自ら学びにくい人も多いという事実が存在する。そこで、同社の人間が直接農地に赴き、機械操作の実演をしてみせる、故障の点検や修理を請け負うなど専門知識を活かしたサポートをする、といったことによって、機械使用へのハードルを下げることが必要なのだという。



(写真：トラクターに試乗させていただいた)

農作物の品質的・数量的喪失を減らすという面からも生産性の向上を図ることができる。それが、前述した同社の別の取り組み、農業の知識やノウハウを伝達することである。この活動は必ずしも自社製品に関わることでなく、CSRの一環として取り組んでいるという。直接農業者に説明をすることに加え、インターネット上でも膨大な量の農業関連情報を提供しており(*2)、興味のある人間は誰でもアクセスできるようになっている。

訪問を通して



インドの農業産業は、日本と比較してその規模も、国内産業における位置づけも異なっている。その背景にあるインド事情の中には、農業に特有の初めて耳にする情報もあれば、これまで学んできたインドに関する別の話題と共通することもあった。このことから、インドの農業について考えることはインド全体についても考えることであり、同社が行っている活動もまた、農業のみならず、ひいてはインドの将来に関わるものなのだと思う。

私達を受け入れ、丁寧に説明をしてくださった Mr. Meenakshisundaram をはじめ、
Training Centre of TAFE の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

参照：(*1)農林水産省

(http://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/k_gaikyo/ind.html)

(*2)Jfarmindia.com (<https://www.jfarmindia.com/jfarmSSLRedirect.html>)

《 分科会報告 》

【コルカタ】

場所：Jadavpur University

形式：グループごとのディスカッション

(グループ：社会における格差、経済発展に伴う文化への影響、
Japan beyond Anime、Issues on gaming)

日程：8月12日(月)、14日(水)、16日(金)

【チェンナイ】

場所：LIBA

形式：2グループにわかれてのディスカッション

日程：8月29日(木)、30日(金)



コルカタ 分科会中

チェンナイ 分科会参加学生と



【全体テーマ】 社会における格差、不平等

【各プレゼン概要】

(日本側)

- 1、 教育の機会均等、格差、貧困について
- 2、 社会福祉について、特に「少子高齢化問題」

(コルカタ側)

- 1、 ポピュラーカルチャーの中でいかに社会格差が写されているか
- 2、 世代による社会への違った視点について
- 3、 メタフィジックスについて
- 4、 ジェンダー問題について

(チェンナイ側)

- 1、 日本の教育制度。初等教育におけるストレス問題、高等教育への政策など
- 2、 日本の仕事における女性の地位。何がジェンダー問題を引き起こしているのか
- 3、 日本文化の影響。特に漫画、アニメ、ビデオゲームについて

【全体考察】

ここでは、コルカタ・チェンナイ 2 都市の全体ディスカッションを比較、検討しながら振り返ることで、その相違点、同質な部分を探っていきたい。詳細に関しては次ページからの各プレゼンテーションをご覧ください。

まず初めに、内容そのものよりもテーマに着目したい。チェンナイ側では、主に教育・ジェンダー・文化という観点から日本を見ている。これはある意味でよくあるテーマ設定であり、日本側のテーマとも似た部分がみられた。一方でコルカタのテーマは日本という視点で見ているわけではなく、また全体テーマにおける社会格差・不平等について哲学的な観点、映画などからの観点といった意外性が見られたところがこの文化会を興味深くしていたのではないだろうか。しかし、その問題点としては内容が幅広くなることで深い議論に達することは難しいことであった。

そこで次にディスカッションの内容について、2 都市の分科会を比較したい。簡潔に述べるとすれば、チェンナイの方が深い議論に達したということである。例えば教育の分科会では、コルカタ側では、各自が思っていることを述べていく、質問のし合いのみに

終始していたが、チェンナイ側では、プレゼン内容に関する根本的な問い、格差がそもそも悪であるのか？といった質問に対して、お互いの意見を言い合うといった場面が見られた。

最後に、この2つの分科会を通して言えることは、この分科会を通して見えた問題というのは両国が共通して抱えているということである。将来の社会を担う世代である僕たちがこうして議論することはとても貴重な機会であったように思う。

~The end of disparity~

【この分科会における目的】

教育の機会均等、格差、貧困について、様々な角度から日本とインド側双方の意識を探りたい。知識披露のし合いにならないようにすること、各個人の意見を聞くことに重点を置いて、ストーリーをいくつか用意しその話に基づいてディスカッションの形式を取ることとする。日本・インドという枠組みにとらわれず、個人の考えが出るようなことについて取り上げていきたい。

【プレゼン内容】

現実社会には必ず格差というものが存在する。その中でも教育格差においては、世界で 6700 万人の初等教育を受けられない子どもたちがいて、世界で 190 万人の先生が不足しているといわれている。さらには、その子どもたちの中でもマイノリティ、つまり障がい児や農村部貧困層、都市部貧困層、僻地住民、少数民族、は困難な状況に晒されていることが分かっている。こういった現実はいくまでデータであり、また事実の一部でもある。こういった現状を元にこの分科会における目的に沿って、ストーリーを3つ用意した。以下がその内容である。

<ストーリー1 ただしいこと?>

(目的) 格差、平等概念に対する正義感を問う

(内容) 想像してください。あなたはある会社の社長さんで、500 万円を子どもの教育のために使ってほしいと考えています。そこである NGO にどうしたらいいか尋ねたところ以下のように返事がきました。「500 万円は一人の子どもに対してだけ使えます」。

その内容は以下のようなものでした。

- A. 貧困に苦しんでいる 9 歳のストリートチルドレンが大学にまで通う費用として使用する。
- B. とても才能のある 9 歳の子どもで、成績は学校で一番優秀、スポーツも万能で柔道では全国大会で優勝をしている。この子が、中学校から名門私立学校に通うための奨学金として使用する。

<ストーリー2 あなたの夢と現実>

(目的) 教育の機会とは何かを知る

(内容) 想像してください。あなたは日本のある町で母子家庭の家に生まれた。外で遊

ぶのが好きで、やんちゃな子どもだった。ある日からあなたは病気により学校に通えなくなる。仲の良い友達とも会えなくなり、次第に気持ちも沈んでいった。学校に通えなくなったことで、自ら勉強することでしか知識を得る手段は失くなってしまった。それでもあなたは夢を持っていた。CAになって世界の各地を回りたいという夢を持っている。病気は治ったものの、病気を治すにはお金がかかり、母子家庭ということもあって、金銭的な余裕はなくなっていた。高校を何とか卒業したものの、あなたは2つの選択で悩んでいた。

A、夢に向かって、必死にアルバイトをしつつ大学に進む。

B、家族のために、働く道に進む

<ストーリー3 スティグマ>

(目的) 社会的スティグマを明らかにする。

(内容) 想像してください。あなたは3人乗りのボートに乗っている。1人はあなた自身で、Aさんはボロボロの布きれを着た貧しそうなお10代の子ども、Bさんは身なりの綺麗な30代の女性、最後のCさんは80代の足に障がいを持ったおじいさんである。ボートが出発してから10分後、ボートは岩に激突してしまい、あなた以外の3人は海に放り出されてしまった。あなたは1人しか助けることができない。A,B,Cさんのどなたをあなたは助ける時に選択するだろうか。

Aさん：ぼろぼろのシャツを着た10歳くらいのお子ども

Bさん：30歳代の綺麗なお姉さん

Cさん：足に障がいを抱えた80歳くらいのお爺さん

【ディスカッションの内容】

この分科会では基本的にストーリーと質問事項によって対話形式のような形で進められた。このディスカッションでは結論などを求めているわけではなく、個人が持つ考えを聞くことに念頭を置いたので、その意見をストーリーごとに順に説明していきたい。ストーリー1では、ほとんどの学生がAを選んだ。その理由には、「基礎教育を受けることが国にとっては大切である。」「Bは既に教育の機会を得られている。」「Aは学校に通えていないから、そのお金が学校に行けるということはとてもいいことである。」それでは、アメリカのようなエリート教育を目指すことで国の発展につながる場合に、Bのような優秀な子に援助するほうがよいのでは？という問いに対しては、「アメリカでは既に基礎的な教育を受けられる子どもがほとんどであるが、インドではまだAのように基礎教育すら受けられない子どもがいる。だから、BよりもAに援助をするべきだ。」といった意見が挙がった。

ストーリー2においては、意見が半々に分かれた。「自分の夢に向かって進みたいからAを選ぶ。」「もし自分の親ならAを選んでと思うから。」などの一方で、「家族は

大切だから B を選ぶ。」「親がもし病気などで大変な状況にあるなら B を選ぶ。」といった意見がでた。そこであなたにとって教育を受けることの意味は何であるか？という質問を行ったところ、「やりたい仕事に就くため。」「生活していくため。」「結婚して家族を養っていくため。」などといった声が聞かれ、またあなたはこの数十年で格差が広がっていると感じますかという問いには、ほぼ全員が yes と答えた。

最後のストーリー3 では、A を選ぶ人が一番多く、次に C、そして 1 人だけ B という結果であった。A を選ぶ人の意見では、「子どもには未来があるから。」「一番残りの人生がまだ長くあると思うから。」といった声の一方で、「子どもを助けた後に大人になるまでの責任を持つことができないから、足の不自由な C のお爺さんを助けたい。」などの意見も出た。B を選んだ人の意見では、「率直な気持ちとして助けたいと思うから。」であった。

【考察】

全体的な考察としては、考えていたよりも貧困や格差については良くないと思っている学生が多くいたことであった。ストーリー1 において、全員が A を選びエリート教育よりも、機会の均等を重視していることが窺えた。またストーリー2 では、意見が半々に分かれ、目的としていたインドはこうであるだとか、日本はこうである、ではなくて個人の意見が聞けたことがとてもよかったように思う。それぞれの価値基準、つまり自分の夢や家族の大切さが人によってどう違うのかを聞けたこと、それによって教育を受けることの意味、教育の機会が得られていることの重要性、また教育を受けた先にあることまで踏み込んで考えられたことは貴重な機会であった。ストーリー3 では、社会的スティグマを明らかにするという目的とストーリーの方向性が必ずしも一致できなかったように思われる。しかし、その中でもやはり弱者、この弱者という言葉にも偏見や偏ったカテゴリー化があると思うのだが、それには助けたいと思う気持ちが表れやすいということを知れたと思う。そこで深く疑問になるのが、なぜそういった気持ちがあるにもかかわらず社会では格差というものが広がっているのかという点である。それはこの分科会を通してはまだ答えは見つかっていない問題である。

【この分科会における目的・プレゼン内容】

コルカタでの分科会と同じなので省略 (p.87 参照)

【ディスカッション内容】

チェンナイにおいては、コルカタとほぼ同じくプレゼン内容、ディスカッションの進め方と共に統一した。そうすることで各都市の違いを比較するためであった。

ストーリー1 では、意見は半々に分かれていた。B を選ぶ意見としては、「国として発展していくには優秀な人材が必要であるから。」「個人ではなくやはり国単位として考えた場合には B を選ぶ方が良い。」といった意見であった。あなたが考える平等とは何か？という問いには、「必ずしも全員が均等というわけではなく、競争の結果として不均等はあるでしょうがない。」との答えが聞かれた。ストーリー2 においては、意見は半々であった。またこの辺りから論点と少しずれてこのストーリーが何の意味を持つのか、あなたはお金持ちになりたいか、なりたくないのか、といったようにストーリーとは違う話題になっていた。ストーリー3 では、A,C,B の順でコルカタと意見ともに相違はそんなに見られなかった。

【考察】

チェンナイとコルカタの最大の相違点は、格差や貧困に対する理解の仕方であった。一概にチェンナイ、コルカタと言えるほどの人と話したわけではなく、あくまでその場にいた学生の意見の違いとして、チェンナイの分科会では、ストーリー1 の部分に大きな違いが出ていた。コルカタでは全員が A を選んでいたが、チェンナイの場合には半々になっていたのである。そこにはあくまで個人的な見解であるが、貧困や格差を必ずしも悪であるとは思っていないことの表れではないかのように思える。つまり、個人の道徳としては貧困や格差がある状況というのは一定の限界が過ぎると許されるべきではないと思うが、社会的効用を最大化するという観点に立てば、格差や貧困というのは許されるのであり、むしろエリート教育を行うことで社会にとってはより良くなるのではと考えられているのである。この点にコルカタの考察で書いた個人の想いと社会格差の拡大に矛盾がみられることの一つの答えがあるのかもしれない。社会的利潤を追求する限り、貧困や格差といった問題は永遠に続くテーマなのではないかと、この2つの分科会を通して感じた。

Social welfare in Japan

【目的】

私は大学で福祉を専攻しており、インドの福祉制度はどのようなものか関心を持っていた。そのためインド人学生と福祉問題について議論したいと思い、上記のテーマを設定した。インドとは異なる日本の福祉問題の特徴として「少子高齢化」が考えられた。そこで、少子高齢化とそれに伴う課題についてプレゼンしつつ、インド人学生に質問を投げかけ、彼らの価値観を探っていった。

【プレゼン概要】

日本では「少子高齢化」が深刻な問題となっている。

インドの人口ピラミッドは山型なのに対し、日本の人口ピラミッドはダイヤのような形をしている。

まず少子化の原因としては、女性の社会進出に伴う晩婚化が考えられる。キャリア志向の女性が増加してきており、働きながら子供を育てたいと思う母親が増えてきた。しかし、保育園が不足していたり、産休・育休への理解が遅れている等の理由で、女性が仕事と子育てを両立するのは容易ではない。パートナーである夫の理解や協力も不可欠で、近年は「育メン」と呼ばれる、子育てに積極的な男性も多く見受けられる。次に、高齢化の原因としては、医療の発達により平均寿命が延びていることが挙げられる。日本は世界有数の長寿国家であり、平均寿命は日本とインドとでは 20 歳ほどの差がある。今までは介護や医療的ケアが必要な高齢者は病院に長期入院していた。しかし、それでは急病者のためのベッドを確保できず、病院としての機能を果たせなくなるし、医療費が国の財政を圧迫することになる。そのような事情で高齢者は長期で病院にいられなくなった。高齢者施設に入所するよりも、住み慣れた地域で家族や友人と共に最期まで暮らせるほうが生活の質（QOL: Quality Of Life）は高いだろうという観点から、現在の日本では介護の「在宅化」を進めようとしている。しかし、在宅介護は家族の負担が大きく、介護疲れによる無理心中というニュースも珍しくない。

このまま少子高齢化が進行していくと、日本の人口は減少していくので、経済が衰退し景気は悪化する。世界的な観点から見ても、日本は競争力の無いパワーレスな国になってしまうだろう。また最近「税と社会保障の一体改革」により、福祉サービスに充てる財源を増税によって確保することで、国民の負担が大きくなっている。来年からは、今まで 5%だった消費税が 8%に増えることが決定している。

<質問内容>

- ・結婚したいと思うか？何のために結婚するのか？
- ・（男性メンバーに対し）男性が育休をとること（育メン）についてどう思うか？
- ・将来、両親に介護が必要になったらどうするか？

（自分は両親と離れて暮らしていて、とてもやりがいのある仕事をしているという設定）

【議論の流れ・進み方】

結婚の話題に関しては世界共通のものなので議論が盛り上がった。「結婚したいか？」という問いに対しては、全員が迷わず「YES!」と答えた。コルカタのような大きな都市には保育園が多いので、働きながら子育てする女性も多いのだという。地方農村ではお金を得る目的で、法律で定められている婚姻年齢より早く結婚させられる女性がいるという話をしてくれた。「なぜ結婚したいのか？」という質問をしたら、「結婚は通過儀礼の1つで、するのが当たり前。何故と聞く方がおかしい。」という意見がインド側学生から出た。日本では生涯独身という選択肢もあるが、インドではそのような考え方は無いらしい。結婚についての価値観の違いが若干見受けられた。

【考察・感想】

インド側学生に聞いた結婚したい年齢やワーキングスタイルについての価値観は、日本側の学生とよく似ていた。しかし、結婚したい相手の条件に「宗教」や「カースト」という選択肢が出てきた点が、インド独特だと感じた。宗教やカーストを重視する理由としては「家族や親戚に反対されるから」というものだった。インドでは日本以上に「結婚は一族に関わる問題」とみなされている印象を受けたし、彼らが親世代になる頃には、このような価値観も変化しているのではないかと思った。

途中で議論が大学教育の話に脱線してしまい、あまり介護や高齢化についての話ができず残念だった。私のプレゼンはディスカッション初日の最初だったということや、プレゼン技術や英語力が未熟だったということもあり、かなり皆に助けられながらの発表になってしまい、とても反省した。しかしインド側学生はどんな話題を投げかけても真摯に受け止め、積極的に持論を主張してくれたので、多くのことを話し合うことが出来た。私も彼らのように英語で人に説明する能力を身に付けたいと強く思った。

【目的・プレゼン概要】

コルカタの分科会と同じなので省略 (p.91 参照)

【議論の流れ・進み方】

チェンナイでも、「結婚したいか?」という質問には全員が YES と答えた。しかし「なぜ結婚するのか?」と尋ねると、「しないと世間体が悪い」「子どもをもつため。(結婚して子どもを持たないのは考えられない)」という、結婚は一種の義務であるかのような消極的な意見が目立った。そのため、必ずしも結婚相手=好きな人というわけではなく Arrange Marriage という選択肢があるのだと感じた。インド人がよく利用するというお見合いサイトを見せてもらおうと、ここでも「年齢」や「職業」といった項目の他に「宗教」や「カースト」という項目があり、彼らはまずここを重視するのだと言っていた。インド側男性に「男性が育休をとることをどう思うか?」と質問すると、「そんな必要は無い」という意見が大半だった。なぜ?と尋ねると「もちろん家事などは手伝う。でもわざわざ会社を休む必要は無い」と返ってきた最後に高齢化や介護の話になり、「将来、自分が実家と離れたところに住んでバリバリ仕事をしているとき、親が介護が必要になったらどうするか?」という問いかけには、日本側学生とインド側学生で意見が分かれ、価値観の相違がみられた。日本側学生は「高齢者施設に入所させる」「実家でホームヘルプサービスを利用する」という意見が出た。対してインド側学生は「いま自分が住んでいる家に呼び寄せて、一緒に暮らす」という意見が多かった。インドでは兄弟が多いので誰かしら世話ができる、看護師やヘルパーを派遣するエージェントの数も多く安価で利用できる、等が理由として挙げられた。日本の孤独死や介護疲れによる無理心中といった問題を知ると、インド側学生一同とても驚いた様子だった。

【考察・感想】

チェンナイの学生はコルカタの学生より年齢層が高く、社会人経験もある人が多かった。比較的コルカタの学生よりも現実的な意見が多く見られた。たとえば育メンの話のとき、私は「子育ては夫婦2人で行うものだ」という価値観だったので、インド側学生に「男性に育休は必要ない」とはっきり言われた時はすこし驚いてしまった。しかし大学院でビジネスを専攻しているキャリア志向の彼らにとっては、子育てのために会社を休むという概念が元々ないのだろうと感じた。同時に、やはり「子育ては女性の仕事」という風潮が根強いのだろうかという印象をうけた。介護の話に関しては、日本とインドでは家族構成や福祉サービス体制が違うため、意見も多様化したのではないかと思った。インドでは地縁・血縁が強いうえ、メイドを雇うことも一般的なので、日本のように孤立無援状態になることは少ないのだと感じた。

経済発展に伴う文化への影響

1. 概要

経済発展がその国にもたらす影響の中でも、人々の文化や価値観といったソフト面における変化について議論した。なおここでいう経済発展とは戦後を想定している。

【動機】

著しい経済成長が注目されるインドだが、日ごろ報道で目にするビジネスではなく、伝統文化や人々の価値観という観点からこの国の発展について見つめたいと思ったため。また、実際に経済発展の渦中にある彼らの感覚を知るため。

【目的】

特に以下二点に集中して意見を交換しあうことを目的とした。

- ・インドの経済発展実態及び意識調査 自国の経済発展に関する印象・意見
- ・日本のケースとの差異 経済発展と伝統文化への影響

2. 議論の流れ

プレゼンテーションでは、戦後日本の経済発展の歴史とそれに付随した文化面への影響について発表した。代表的なものは、「欧米文化の流入」「伝統文化・産業の衰退」。世界的な潮流であろうこれらの傾向の中でも日本独特の変化の仕方を提示し、インドでの実態やそれに対する自身の考えを問うた。

3-1. コルカタでのディスカッション結果

経済発展の影響による伝統文化の衰退という事実はインドでも起こっている。しかし、以下の点においてインドと日本間で差異がみられた。

・欧米化の影響を受けている年齢層：食生活やファッションなど、日本の方が幅広い年代に欧米文化が浸透している。インドでは、今の20代以下の世代において欧米志向・伝統尊重意識低下の傾向が顕著であり（伝統料理離れ、神話への興味の希薄さ等）、それ以上の年代は伝統を重要視する傾向の方が強い。

経済発展の時期・段階が日本と異なる上に、広大な国土と膨大な人口などにより、変化の伝達に時差ができてることが原因かと考えられる。若者間に欧米文化を広めた原因としては、他国同様電子機器とインターネットの普及があげられる。

・事実に対する印象：伝統文化が弱くなっているという事態に対して、日本人よりも悲観的ではない。国土の発展のためにそのような影響は不可避であるという客観的事実の把握、生活の質向上の重視、さらに元来国内でも自分の伝統とは異なる多様な文化を受け入れてきたというインドの背景が影響しているとみられる。

3-2. チェンナイでの議論

そもそも伝統文化の衰退とは、という議論からスタートした。

・「伝統文化の衰退」→「生活に占める伝統文化の要素減退」：問題意識・定義の方法を指摘。伝統文化が「衰退」するという捉え方は、他の文化を暗に非難していることにつながる。文化に優劣はないのであって、一方の文化が他方の文化の衰退を招いていると捉えるべきではない。

・「伝統」「文化」の強さへの自信：確かに伝統文化の勢いは弱くなっている。しかし、量として日常に登場する回数は減っていても、文化は決してなくならない。例えば朝食・昼食は欧米の食事を選んでも、夕食には必ずインド料理を食べたくなる。そこには文化の浸食・衰退という考え方はなく、いいものは生活に取り入れ、しかし自分たちの文化を好む性質は根強く残っているため、そう簡単に衰えない。

4. 2都市を通して

【考察】

彼らの文化に対する接し方・考え方の差異は、個人の見解ということ差し引いても、普段より多文化と共存しながら生きているインド特有の事情によるものではないかと考えられる。すなわち、自分たちの常識とは異なる文化を前にした際に、それを取り入れるか拒否するかという考えではなく、その他文化の存在を認めないと生活が成り立たないのではないか。例えば、インドでは州ごとに言語や食事を含めた文化が異なる。当然実生活ではそれらの差異を乗り越える必要がでてくる。

【反省】

本トピックは人によって感じ方が異なるため、より多くの人と議論する必要がある、今回のディスカッションだけで確固たる結論をつけることは難しかった。ただ、問題に対する姿勢が日本側と異なったことは新鮮な驚きであったし、興味深かった。伝統文化の「衰退」については、共通認識が得られやすいよう産業人口の減少や文化継承者数など数値としてあらわせるものを用意していったが、そもそもの定義として「衰退」という捉え方を指摘されてしまったことは反省点でもあり、また同時に面白くもあった

日本側プレゼンテーション <Japan beyond Anime>

[テーマ説明]

このチームでは「アニメ以外の日本の文化を知りたい」というインド側の希望をもとに各々の文化について様々な視点から紹介し合った。互いの多様な文化を知ることで「一元的ではない、よりリアルな相手の理解」を目標とした。各トピックの伝統文化から現代文化・サブカルチャー、考え方の違いなどについて発表、質問、討論し合った。

[プレゼン内容の概要説明]

インド側は音楽、舞踊、昔話(言い伝え)について、日本側はファッション、テレビ、文化全般についてそれぞれ担当者が発表した。インド側は伝統音楽、伝統舞踊の歴史や種類を中心に説明し、地域による違いや現在でも比較的その伝統が引き継がれていることがわかった。日本側は現代文化を中心に発表し、実際の我々の生活とどのように結びついているのかを説明した。

ディスカッションではなぜその文化が根付いているのか、それについてどう思うか、それは私たちの生活・考え方にどう影響しているのかなどを議論した。

大津嘉奈子 <Japanese Fashion>

【目的】

私はプレゼンのテーマを決める際に、インド側メンバーに日本のどのような文化に興味があるかを尋ねたところコスプレやロリータなど日本独自のファッションに興味があるとの返答があり、私自身もファッションへの関心が高かったことからこのテーマを決定した。プレゼンでは日本のファッションを紹介するだけでなく、日本人とインド(特に若い世代)の美意識や価値観について共に考えることを目指した。

【プレゼン概要】

まず日本の伝統衣装である着物と浴衣について説明をした。浴衣は着物よりもカジュアルな場面で着られる衣装であるということや、着物は何世代にもわたって大切に受け継がれる家庭における一種の財産である、ということを紹介した。次に、日本の中高生が着る制服について説明をした。アニメやアイドルのイメージから、日本の学生はミニスカートや茶髪など自由な着こなしをしているというイメージを持たれがちであるが、実際はほとんどの学校において校則によりスカートの長さや髪型などが厳しく規定されていることを話した。日本における中等教育は、厳格な服装規定にも見られるように「皆

が同じでなければならない」という意識を学生に強く感じさせるものであるということの説明した。そして、日本の若者のファッションについて、ここではロリータ、森ガール、コスプレを例に紹介した。日本の若者ファッションの特徴をして挙げられることは、「変身願望」であると思われる。特に、ロリータファッションに代表されるように、「西洋」に対するあこがれ（コンプレックスとも言うことができる）が強く見られる。

<質問>

- ・学生は制服を着るべきであるか、また制服についてどう思うのか。
- ・日本人/インド人は伝統衣装を着続けるべきであるか。
- ・日本の若者のファッションについてどう思うか。
- ・インドの若者はどのようなファッションを好むのか。

【議論の進み方】

若者のファッションについて特に議論が盛りあがった。日本人は西洋人のような顔になるためにつけまつげやカラーコンタクトを使用したり、時には整形をする人もいるが、インドでも若者の西洋に対するあこがれは強く美白化粧品が流行しているようだ。また、日本側からインド人女性は脚など体の一部を露出するファッションに抵抗があるのかという質問をしたところ、地方や世代によって価値観に違いがあり、ムンバイでは水着を着ている女性もいるということだった。伝統衣装を着るべきかという質問に対してはこれからも伝統衣装を着続けていきたいという意見が出た。ただし、日本人側からみるとインド人学生は日常的に伝統衣装を着ているように思えたが、前の世代に比べると伝統衣装（特にサリー）を着る頻度は低いようだ。

【考察】

単なる日本のファッションの紹介に終わらず、日本とインド両国の若者の価値観について共有する貴重な機会となった。インド人学生の話を知っていると、インドの中に急速に欧米的な文化が入り込んできており、世代により価値観にかなり違いがあることを実感した。実際ホームステイなどで一般家庭の様子を見ても、学生は洋服を着ているが、その母や祖母はサリーを着ていることが多かった。日本においても世代によって価値観の差はあるが、インドではそれがより顕著であると感じた。しかし、学生からこれからも伝統衣装を着続けたいという意見が多く出たことから、インド人の自国の文化に対する誇りを強く感じた。日本もインドも、自国の伝統文化を守りつつ、外国から来た新たなものを受け入れることが上手い国であるように思える。

【プレゼン概要】

私は「日本のテレビ文化」をトピックとし、導入の歴史、普及率・所有数の変遷、視聴時間、人気番組などについて調査・発表した。現代日本において娯楽や情報入手の主な手段として利用されるテレビだが、その普及に伴い我々の生活様式は大きく変化した。例えばそれまで食卓は家族団欒の場であったが、テレビの普及と共に家族の会話が減ったというデータがある。このことからテレビは新たな娯楽を提供しただけでなく、既存の娯楽を侵食したと言えるのかもしれない。

このように、データを見せるだけではなく、その裏で実際の生活文化がどう変化してきたのかに留意した発表を行った。

【質問事項・実際の議論の流れ・進み方など】

大まかに①テレビの家庭への影響②メディアとしてのテレビ、に関して議論した。進め方は個人のテレビ文化、自国のテレビ文化について共有した後に、それぞれの問題点について話し合った。

①インドでは日本ほどテレビが普及していない為、家庭環境にさほど悪影響を与えているとは感じていないようだった。むしろ家族みんなで娯楽を共有できる媒体として考えられている。日本側からは確かにテレビは会話を減らしてしまうこともあるが、一方でテレビを中心に会話が生まれるという場合もあり、一概に家族団欒の場を侵害しているとも言えないという意見があった。

②主にテレビからの情報の信頼性について議論した。テレビは視覚・聴覚に発信するため、比較的多くの人に情報伝達が可能だが、同時に大衆扇動に利用されることもある。議論では、テレビの情報はある程度操作されていることが否めないという意見があった。さらに性質上より印象的なイメージを残すことが可能である。それ故、視聴者が意識的にその信憑性を問うことが必要だということで意見は一致した。それに対して新聞は信頼がおける、というインド側の主張はさらなる議論を煽った。多様なメディアが存在する中で100%信頼に足るメディアは存在しないので、どんな情報にも常に疑問を持ち、無批判に信用するべきでない、というのが日本側の意見だった。

【反省・考察】

考察として、インドではテレビに対する問題意識は比較的低いのが、経済発展によって普及率の増加が推測される中で、テレビの浸透は良くも悪くも文化に影響を与えるであろう。その点において、この議論は有意義であったと思う。日本側にとっても（文化形成に大きな役割を担う）テレビの在り方について、必ずしもネガティブではない見方を持つことができた。日本社会が持つ問題点を議論したことは日本のテレビ＝アニメとい

うイメージを変え、新たなテレビ文化の側面の共有に繋がったと思う。
反省点は議論中に私の指摘した問題点がうまく伝えられなかったことだ。原因は、文化背景の違いから状況が把握されないことに加え、想定する善悪の基準が異なるので（仮に状況が理解できても）それが良い・悪いと評価される論理が理解されないという2点あると思う。これに対しては背景知識をより詳細に示す必要があった。また、日本における一般的な価値基準を示すことで問題点を明らかにできたと思う。

森理恵 <伝統文化・現代文化>

私の回はグループメンバー全員のプレゼンテーションの最後に位置していたため、集大成として議論が深まったトピックについて、また日本人という人間をもっと知ってもらうトピックを抜粋してプレゼンテーションをすることにした。

- ・日本のことわざ／俳句／風説
 - ・民謡／民族舞踊
 - ・日本人の習慣的行動（どうしてごめんなさいとありがとうをよく口にするのか、日本とインドとを比べてひと付き合いの違い etc)
 - ・食文化の違い
- などである。

日本とインドには知れば知るほど、違うところや分からないことがたくさん出てくる。それはお互いにそうだ。ただ多くの人が口にする「日本とインドの考え方は似ているところもある」というのは、その違い・その考え方の動機やルーツをお互いに理解することができるからだと感じている。価値観や物事の捉え方は本当に多様であり、それは育ってきた環境、受けてきた教育、周りにいる家族や友達によって左右される。しかしその違うということを理解し、認め合っていくことの出来る私達の未来は明るい。議論好きなインド人との議論はつきないが、この分科会を通して相互理解の出発点にインド側も日本側も立つことができたと感じている。

インドを知ることはあらゆる多様性と可能性を大きな器を持って理解していかなければならないが、それと同時に日本で生まれ育った私達が持っている常識と価値観をも再認識することになった。お互いのことをしり、自国のことをもっと知り、なんのしがらみもない学生が好き勝手に意見を言える環境に大変感謝したし、とても有意義な交流となった。

日本側プレゼンテーション <Issues on gaming>

[テーマ]

日本ではポータブルゲームプレーヤーを始めオンラインゲーム等、小さな子供から大人まで娯楽としてゲームの人气が根強く、私たちにとって身近な存在だ。任天堂など世界的にも名が知られる会社も多く、世界三大ゲームショーの一つでもある東京ゲームショーが日本で行われるなど、ゲームはある種の日本を代表するサブカルチャーと言っても過言ではない。インドでも近年、ゲームの人气が急速に若者の間で広まりつつあり、インターネットを使えば容易にできるオンラインゲームが増加したことから、彼らにとってもゲームは非常に身近な存在となりつつある。このようにゲーム産業が発展したこと、またゲームが与える影響や問題の認識において日印間にいかなる相違があるのかを探るのが目的である。

大澤瑞帆 <ゲームが我々に与える社会問題>

【プレゼン概要】

トピックとして挙げたのは、主に2点である。一つ目は、ゲームによる視力低下、暴力的行為の促進、社会不適合性の促進などの問題は、ゲームによって生じたものか否かということだ。二つ目は、ゲームの内容から対象年齢を規定すべきか否か、それは何歳から対象にすべきか、そして規定を守らせるに当たりどうすべきかということだ。プレゼンは、聞き手参加型形式にし、プレゼンの流れの中で議論をする進め方を取った。例えば、16歳のゲームに熱中している少年の立場になりきり、どのような意見が出るか考えてもらったり、聞き手を数人ずつに分け立場を割り振り、立場ごとに議論してもらったりした。

【議論の進み方】

実際の議論は、立場になり切って議論したせいか、非常に白熱したものとなった。結果として、一つ目のトピックの結論としては、少年時代は多感な時期であり、その頃にゲームに熱中しすぎることで、上記の問題は一部引き起こされるが、それはゲームだけにより引き起こされたものではないという結論に至った。本や漫画、映画、その他マスメディアなど影響を与えるものは他にもあるということだ。また二つ目のトピックの結論としては、ゲームの対象年齢の規定は物事の分別がしっかりつかない17歳（大学入学時）以前から設けるべきで、そのためにも身分証明証の提示は義務付け、これを順守しない店舗は罰せられるべきであるという結論に至った。何歳より前に規定が必要かという議論は、何歳で大人とみなされるかという議論にも発展し、興味深かった。日本では20歳で大人という認識が強いが、インドでは大学入学とともに大人であるという声

が多く挙げられ、この相違が印象深かった。

【反省】

ストーリー仕立て、役割配分での議論は、議論の白熱に結びついたので良かった。ただ役割配分での議論は白熱すると同時に、感情的な議論になりやすく、またそこから議題がぶれそうになってしまった。プレゼンターとして、議論を上手く回し、意見に対する根拠、その意見に達するまでのプロセスを出してもらえよう調整することがより一層必要だったと思った。

柚木隆太 <ゲームが人々に与える影響>

【プレゼン概要】

最近世界中で話題となっており、日本でもソーシャルゲームの登場によって近年問題化してきたゲーム依存症やネトゲ廃人、重課金などの社会問題に触れつつも、ゲームが日常生活にもたらす娯楽性・満足感について論じた。

【質問事項】

ディスカッションでは、①ゲームの世界では活躍しているゲーム中毒者と毎日ストレスを感じながら嫌々働いているサラリーマンのどちらになりたいか、などの具体的な質問を皮切りに、②ゲームが人々に良い影響を与えるか、与えたとしたらどのような意味・場面なのかについてディスカッションを行い、また③インドではゲームにおける社会問題が生じているのか質問を重ね、日本と比較することで議論を深めようと試みた。①の具体的な質問に対しては日本側インド側共に、たとえストレスを抱えていてもサラリーマンを選ぶ、と答えその理由としては、いくらゲームの中で活躍しても現実世界には有益なものをあまりもたらさないから、というのが挙げられた。②に関して、ゲームは人々のストレスを解消し・想像力を喚起させ友達と仲良くなるツールとしても有益であり、限度を持ってゲームをすれば人々の生活にプラスになるとの結論が出た。③に関して、インドでも日本と同じようにゲームに依存している人は少なからずいるが今のところ日本ほどは社会問題化していないが、今後ビデオゲームやPC、ネット環境の向上によって日本と同じように社会問題化していく可能性は高い、という意見がでた。

【ディスカッションを通しての反省・考察】

全体的に具体的な質問に終始してしまったため、ゲームの良し悪しという本質的な論点について十分にディスカッションができなかった。そしてゲーム好きのメンバーが多か

ったためゲームを肯定的にとられようとする考えがメンバー全体で無意識に働いていてしまっていたかもしれない。またプレゼンにおいて日本の現状を十分に伝えきれず、コルカタ側のメンバーが十分に理解できないままディスカッションに進んでしまった。一方でインド人も日本人も(好きな人は)ゲームは好きで、ゲームに対する考え方も非常によく似ている、と考えられ、インド人側メンバーが日本のゲームをよく遊び親しんでいることから日本のゲームが日本の文化伝達に一定の貢献をしていると考えられる。

《文化交流・フィールドワーク報告》

デリー

担当者：大津嘉奈子

《8月6日（火） 在インド日本大使館表敬訪問》

第17期日本インド学生会議は、在インド日本大使館を表敬訪問し、大使閣下をはじめとした大使館の方々との昼食会に参加させて頂いた。日本とインドの関係について、インドでの日常生活についてなど、貴重なお話をたくさん伺うことが出来た。こうして大使館の方々が日々働いてくださっているから、今の日印の友好関係があるのだと感じた。



大使館にて

《同日 立命館インドオフィス訪問》

立命館インドオフィスでは、日本留学を控えた学生たちが開いたイベントに参加させて頂いた。インド人学生は歌を披露してくれ、私達の手にヘナを施してくれた。私達はソーラン節とボリウッドダンスを披露したが、好評を得ることが出来てよかった。インド人学生たちは皆、英語・日本語ともに堪能で、勉学に対するモチベーションの高さに刺激を



受けた。とても充実した楽しい時間を過ごすことが出来た。

《8月7日（水） JICA インド事務所訪問》

JICA インド事務所では、主にデリーメトロについてお話を伺いその後視察もさせて頂いた。職員の方々は私達の質問に丁寧にわかりやすく答えてくださり、それまで漠然としかわかっていなかったインドの教育やインフラシステムについて理解が深まった。また、実際に乗ってみるとデリーメトロはとても清潔で快適であり、日本の技術が生かされていることが日本人として誇らしかった。



コルカタ

担当者：永田光央

《8月9日（金） 開会式》

第17期日本インド学生会議は、多くの関係者、またインド学生たちと共に、コルカタでの開会式を迎えることができた。開会スピーチの後に、両学生からのパフォーマンスが行われた。ダンス、歌、劇などが行われており、コルカタ滞在の初日で多少の緊張感を抱えながらも皆が楽しく過ごすことができた開会式であった。



また、16期の活動を紹介する場面もあり、この日本インド学生会議が17年間続いている歴史の一部であるということを実感することができた。

《8月10日、17日（土） 文化交流》

文化交流の二日間で一番強く感じたことは、自国の文化を深く知らないことだった。お互いの文化を紹介しあう中で、特にメヘンディと呼ばれる油を使った身体につけるアートがとても印象的であったが、インド学生は自国に誇りを持っているように感じ、そして自国文化についてとてもよく知っていた。民族衣装の交換では、女子学生が浴衣を着ることができて、とても喜んでいるのが印象的であった。



《8月13日（火） 学校訪問》

La Martiniere と呼ばれる女子学校を訪問した。この学校は初等教育を行っているところであり、またインド学生の出身校でもあった。職員の方に案内されて、私たちは数人に分かれて各教室に入っていった。そこに待っていたのはとてもかわいい子どもたち！みんな興味深々のように、英語であいさつすると大きな声で返事をしてくれた。そしてその後、怒涛のサイン会？なるものはじまる。



子どもたちが一斉に日本語のサインを私たちに求めてきたのである。なぜ日本語のサインにそれほど興味を持ったのか今も理解できていないが、子どもたちの嬉しそうな笑顔が今も記憶に残っている。普段足を踏み入れることができない異国の地の学校に入れたことは、とても貴重な一時であった。

《同日 NGO 訪問》

Destiny Foundation と呼ばれる NGO を訪問した。この NGO はトラフィッキングなどの被害にあわれた女性のエンパワーメントを目的としている。また、16期の委員長である豊原



智恵さんがインターンをしているところでもあり、スタッフの方からの説明があった後に、彼女からも実際にどんなことをしているのか説明がなされた。現在も15人の女性が、カウンセリングやリーダーシップトレーニング、職業訓練などを受けながら自立に向けた活動を行っている。その後日本文化を紹介するために短い時間であるが、その女性たちに私たちは簡単なプレゼンテーションを行った。その時にとっても気になったのが、彼女たちが日本の豊かな生活や違う文化に対してどう思うのか、ということだった。内心では、様々な過去の事情を背負ってしまった人たちに、日本という“文化”、“豊かさ”を映し出すことで、そのギャップ、つまりインドの現状、彼女たちの今との差異が彼女たちを傷つけることになるのではないかと心配していた。考えすぎてしまっていたのかもしれないが、彼女たちはプレゼンテーションの後、笑顔だった。短い時間の滞在となってしまったので、次の機会があればもっと長く、深く彼女たちと交流をしてみたいと思った。

《同日 在コルカタ日本国総領事館へ訪問》

私たちはインド学生と共に、公邸でのディナーに招いていただいた。何よりもこの時に貴重であったのは、日本料理を食べられたこと！ではなく、もちろんそれも含むのだが、総領事である川口さんとゆっくりお話する機会を持てたことである。外交の第一線で活躍される方の生の声を聴けることは、私たち学生にとって、違った視点からの大局的な日印関係を知る一つのきっかけになったように思う。またこういった機会があることで、より多くの学生や日印に関係する方々と交流できたことが、とても貴重であるように思われた。



《8月14日（水） 観光》

バスを貸し切り、私たちはビクトリア記念館や右の写真に見える **Hooghly Bridge** をまわり、寺院なども訪れました。泊まっていた **Ramakrishna mission** に着くころにはすっかり夜になっていて、みんなリラックスしながら、たくさんの会話をして、インド学生との仲をこの日だけでもより深くすることが出来た。



《8月18日（日） 閉会式》

長かったようで、短く、でも濃密だったコルカタの本会議がこの日で終わろうとしていた。日本・インド双方の学生が、ニガム先生から修了書を手渡され、両国の歌や踊りでこの閉会式は締めくくられた。



バンガロール

担当者：岡部知美

《8月20日（火）Christ University Campus Tour》

私達はインドの大学生がどのような環境で学生生活を送っているのかに興味があり、Ms. Mallika Krishnaswami、Ms. Renuka Sundararajan のご協力のもと Christ University を学生に案内して頂いた。この大学はバンガロールでもトップレベルの大学であり、インド中から優秀な学生が集まり、留学生も多く受け入れているという。図書館や講義棟、スポーツ施設など諸施設が充実しており、学生たちがそれらを大いに活用している様子が見えた。



熱心に講義を受けるインド人学生達

《8月23日（金）Christ College において大学生と交流》

この日、再度 Christ University を訪れ、日本語を学習する学生達 20 人程と分科会トピックのうち①教育格差、②福祉制度、③経済成長と環境問題、④インフラを取り上げてディスカッションをした。全体を4つのグループに分け、JISC メンバーが自分のトピックに関してプレゼン、問題提起をしてからディスカッションを始めた。時間が30分程度と制限されていたため、深い議論まで詰めることはできなかった。しかし日印間の社会制度の違いが大きい故に互いの主張の前提を理解することは難しい、ということを知ることができた。この機会を通して、インド人学生の社会に対する考えを知ることができた。



ディスカッション後に軽食を取りながら交流



最後に記念写真

《8月24日（土）KOYO との文化交流会》

バンガロールを拠点に日本語教育を行っている団体・KOYOの主催する文化交流会に参加した。KOYOによる伝統舞踊や歌、インド式暗算の方法の紹介などがあり、インド文化の新たな一面を知ることができた。私達はソーラン節を披露した。初めてソーラン節を見る人が多いようで、新しい日本文化を紹介できたことは非常に嬉しかった。プログラムの最後には、Dandya&Garba というスティックを使ってリズムを取り、輪になって踊るインドの伝統舞踊をみんなで踊った。独特なリズムを刻むので少し混乱してしまったが、実際に体を動かしてインドのリズムを感じることができたのはとてもいい経験になった。Ms. Mrudulaを始めご招待、ご協力いただいた KOYO のみなさん、ありがとうございました。



ソーラン節を披露しました



みんなで踊りました

チェンナイ フィールドワーク報告

担当者：軽部真純

《8月27日（火） 開会式》

ABK-AOTS DOSOKAIで第17期日本インド学生会議 in チェンナイの開会式を行った。関係者の方々が挨拶し、キャンドルに火を灯す儀式を行ったあとメンバー1人1人に豪華な首飾りをプレゼントしていただいた。この首飾りは私たちにとって大切な記念品となり、帰国後も部屋に飾ってチェンナイでの日々を思い出している。



《8月27日（火） ウェルカムディナー》

上記の開会式が終わった後はショッピングをし、夜は再びABK-AOTS DOSOKAIに戻ってウェルカムディナーを楽しんだ。ABKの学生とはこの時に初対面を果たしたが、渡印前からSNSを通じてメッセージのやりとりをしていたので、初めて会った気がしないほどスムーズに打ち解けることが出来た。



《8月28日（水） 博物館見学》

タミルナードゥ州立博物館を訪れた。広大な敷地内に様々な建物があり、巡りながらインドの歴史、芸術、文化、宗教を学ぶことができた。展示品は説明書きの無いものもあったが、ABKの学生が解説をしてくれたのでとても分かりやすく理解することが出来た。



《8月28日（水） レクチャー》

JETRO の守岡喜一様に、タミルナードゥ州についてのレクチャーをしていただいた。渡印前にインドについて勉強会をしてきた私たちだったが、初めて知ることが多く目から鱗だった。インドビジネスを成功させるために必要な「3つの『あ』」の話は、今でもとても印象に残っている。



《8月29日（木） タミル映画鑑賞》

モリ（タミル語で「言葉」）というタイトルの映画を鑑賞した。聴覚障害をもつ女性と男性ミュージシャンのラブストーリーで、インド版オレンジデイズといったような感じだった。英語の字幕がついていたので、タミル語が分からない私達でも十分に楽しめた。映画が始まる前には、ABKの学生がインド舞踊を披露してくれ、とても魅了された。



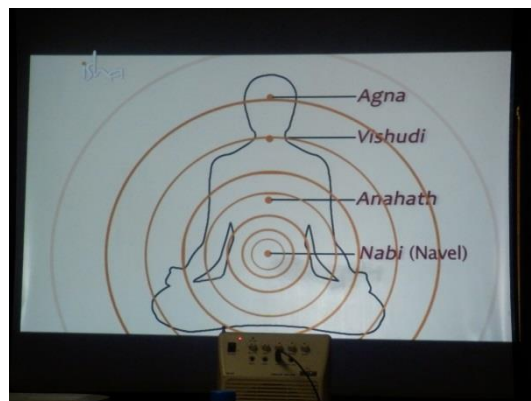
《8月30日（金）日本テクノロジー訪問》

ランガナタン氏が代表を務める IT 会社「日本テクノロジー」を訪問した。ここは日本企業と提携しているため、多くの社員が日本語を学んでいる。いくつかの小グループに分かれ、JISC メンバーと新入社員の方々とで、しばし交流を楽しんだ。エンジニアの中には女性も多い点が、日本とインドの違いだと感じた。



《8月31日（土） ヨガ体験》

ABKにヨガの先生を招いて、ヨガ体験をさせていただいた。「私は体ではない。私は心でもない。」というフレーズを頭で唱えながら深呼吸を繰り返すことで、深い落ち着きを得られるのだという。私がイメージしていた色々なポーズをとるヨガとは違ったが、静かな空間で瞑想し、とてもリラックスできた。



《8月31日（土） ジャパンナイト》

ジャパンナイトとは、チェンナイ在住の日本人や日本好きなインド人が集まって「日本語のみで」楽しむフェスティバルである。JISCはソーラン節と折り紙パフォーマンスを披露し、とても好評だった。日本語学校の生徒による劇は、内容・演出・日本語すべてがとてもクオリティが高く驚かされた。



《9月1日（日） 結婚式参列》

ABK関係者の結婚式に、なんと私達も出席させていただいた。体育館のようなホールは参列者で溢れかえっており、ヒンドゥー教スタイルの飾り付けや衣装がとても華やかで素敵だった。バナナの葉に給仕されたカレーを見よう見まねで手で食べてみたり、いただいた引き出物がヤシの実で驚いたりなど、たくさんの異文化体験ができた。



《 ホームステイ報告 》

担当者：永田 光央

—コルカタ—

ホームステイ先：Mr. Sayan Mukherjee

一言でいえば、本当にご馳走になった一日だった。この日、僕は一日に5食食べた。食べたというよりは、美味しすぎて食べちゃったというほうが当てはまるように思う。Sayanとお父さんと一日コルカタ市内を観光して、親戚の結婚式まで参加した。インド文化の結婚式は僕にとってとても刺激的で、何よりもそのもてなしの気持ちが一番嬉しかった。



—チェンナイ—

ホームステイ先：Mr. Partha Sarathi

お母さんが作ってくれたビリヤニとドーサは格別な味だった。以前に教師をなさっていたこともあり、インドの教育についてもたくさんお話しをしてくれた。夜は寝る前にSarathiと柚木と僕の3人でお互いの国の社会問題、例えば日本では自殺する人が毎年3万人いること、若者は選挙に無関心な人が多い事などについて率直に議論した。異国の地で、フォーマルではない場所で、普段感じている社会に対する問題を話せたことが今も印象に残っている。Sarathiはとても僕たちに気を遣ってくれて、ホームステイの時間をとても楽しく過ごすことができた。



担当者：新谷 絵理香

—コルカタ—

ホームステイ先：Ms. Saheli Barua / Deya Ray

家が近く、特に仲の良い2人のお宅にそれぞれ1泊ずつさせていただいた。2日間にわたって、対話を中心として非常にゆったりと時間を過ごした。当然のように「あなたたちは家族だから」と温かく受け入れてくれる彼女たちとそこそご家族のホスピタリティーは、日本のおもてなし文化とはまた異なった温かさで、本当に心が癒された。



—チェンナイ—

ホームステイ先：Mrs. Durga Rammachandran

4歳の男の子がいる Durga さんのお宅に招待させていただいた。初めは恥ずかしがって近づけなかった彼が、最後には心を開いてくれたことが嬉しかった。また、Durga さんと日本文化について話していく中で、私自身改めて日本の特殊性に気が付くなど、短い時間ながら新たな発見もあった。



担当者：大津嘉奈子

—コルカタ—

ホームステイ先：Ms. Anunita Banerjee/ Ms. Pratishtha Chanda

仲の良い二人のお宅に一日ずつお邪魔した。彼女たちとその家族はみな、私達を温かく受け入れてくれた。インドの家庭料理はレストランのものよりも味が優しく、とても美味しかった。夜寝る前に皆でボリウッド映画を見たり、音楽を聞いたり、話をしたりしたことで、お互いの距離がより一層縮まったように感じた。



担当者：佐波優紀

—コルカタ—

ホームステイ先：Ms. Divya Banerjee

私にとって Divya は、学友のようであり、家族でもある。彼女に、普段通りの貴方の暮らしを体験したいとお願いしたところ、Divya の大学や、バザールに案内してくれた。そして帰宅すると、パパに一日の出来事を報告した。朝の散歩も、一緒に読んだ漫画も、パパの手料理も、決して忘れない。こんな素敵な家族に出会えて、私はかけがえのない二日間を過ごした。



—チェンナイ—

ホームステイ先：Mrs. Druga Ramachandran

Druga さんのお宅へは、新谷、軽部と共に邪魔しました。日本語の勉強に熱心な Druga さん、そして日本語の歌を披露してくれたまだ小さな息子さん、そしてダンディーな旦那さんの、3 人家族だった。夜に公園で遊んだり、(夜の公園は子供連れの家族でいっぱい!) お子さんがある家庭ならではのインドの生活が体験できた。



担当者：岡部知美

—コルカタ—

ホームステイ先：Ms. Writosree Mukherjee

中心部から列車で2時間程の田舎町にステイし、都市部とは一味違うインドが体験できた。観光では教会や寺院を案内してくれた。学生達が宗教についてとても詳しいのには驚いた。家では家族や親戚とその日の出来事等について話した。家族間の距離が非常に近く温かかった。私のことも家族のように受け入れてくれ、素敵な時間を過ごすことができた。



—チェンナイ—

ホームステイ先 : **Mr. Sunder Ram**

日本語を学ぶ双子の男の子のお家にステイした。とても優しいご家族で、「君たちは妹だ」と迎えてくれてとても嬉しかった。子供たちは好奇心旺盛で日本のことについても色々聞いてきた。夜には皆でタミル映画を見に行った。インドの映画館では大声で笑ったり、拍手したりするので、言葉が分からなくても一緒に“楽しさ”を共有できたような気がした。



担当者 : 堀 友香

—コルカタ—

ホームステイ先 : **Mr. Ishan Basu**

当日までどのお宅でお世話になるかわからず不安な気持ちであったが、ホストファミリーと映画やパソコンゲーム、お買い物をするなど、手厚いもてなしの中でそんな不安は吹き飛んだ。また、結婚式の写真や料理を通してインドの文化を知り、浴衣の着付けや、折り紙を通して日本の文化を紹介するなど、お互いの文化の交流ができてとても良い経験となった。



—チェンナイ—

ホームステイ先 : **Ms. Nivetha Thyagarajan**

短い時間であったが、楽しい時間を過ごすことができた。コルカタでは男の子のお宅でお世話になったこともあり、神に花飾り、手にはメヘンディといった女の子らしいおもてなしが新鮮であった。スピーチコンテストが近いということで一緒に日本語の言い回しを考えたり、UNO を楽しんだりと充実した時間を過ごすことができた。夕食のチキンビリヤニは絶品であった。



担当者：柚木隆太

—コルカタ—

ホームステイ先：Mr. Ayan Mitra

アヤンが「インドではゲストは神様の様にもてなすんだよ。」と言ってくれたおかげで大変リラックスして過ごすことができた。お母さんの料理もとても美味しく、アヤンの友人のソハムやサヤンタンと一緒にコルカタ観光へ連れて行ってくれた。インド人の日常生活に触れることができ良かったし、とても楽しかった。



—チェンナイ—

ホームステイ先：Mr. Partha Sarathi

ホームステイして、まず感激したのは Sarathi が本当にお母さんを大切にしていた事だ。自分も親孝行しなければ、と思った。夜には広い公園へ行き、にぎわっている中でバトミントンをしたり夕日を眺めた。お母さんの作ってくれたドーサは本当に美味しく、食べ過ぎてお腹がパンパン。Sarathi とは教育の話など、身近な話題についてたくさん話すことができ大変有意義だったし、彼をよりよく知れてよかった。



担当者：大澤 瑞帆

—コルカタ—

ホームステイ先：Ms. Anunita Banerjee/ Ms. Pratishtha Chanda

二人の家に泊りつさせてもらった。ホストマザーが辛さ控えめの非常においしい食事をつくってくれて、私たちのことを常に気遣ってくれたのが嬉しかった。彼女らの友達の運転でレストランに一緒に行ったり、マーケットで買い物をしたりし、密な交流ができ仲が深まった。



—チェンナイ—

ホームステイ先 : **Ms. Nivetha Thyagarajan**

家では、写真を見ながらお互いの学校生活について語ったり散歩をしたりし、ゆっくりとした時間を過ごした。Nivetha は芸術の才能に大変優れており、夜には私たちの手のひらに繊細なデザインのメヘンディをしてくれた。家族も温かく迎えてくれ、感謝の気持ちでいっぱいになった。



担当者 : 軽部 真純

—コルカタ—

ホームステイ先 : **Ms. Aaleya Chanda**

2 日間、アーレヤ (通称アリちゃん) の御宅にお世話になった。彼女は大の日本通で、お互いの国の文化や習慣について話したり、一緒に折り紙をして過ごした。他にもモールでアイスを食べたり、ハーモニオンという楽器の演奏を聴いたり、インド人形をプレゼントしてくれたりなど、一生忘れない貴重な思い出をたくさん経験させてもらった。



—チェンナイ—

ホームステイ先 : **Ms. Durga Rammachandran**

新谷、佐波と一緒に Durga さんの御宅にお世話になった。彼女の作る料理は本当に美味しく、晩御飯に出されたドーサは皆で何回もおかわりしてしまった。たった1晩しか滞在できなかったが、Durga さん御一家のおもてなしには、とても心温まる思い出だ。



担当者：森 理恵

—コルカタ—

ホームステイ先：Ms. Deya Ray

Fashion デザインを学び、いつも明るく社交的な Deya. 彼女の性格からも分かる様に、両親はとても温かくおらかな夫婦。Deya のお母さんが作る家庭料理は格別！特別どこかへ出かけるという様なお客様扱いよりも、たくさんの友達を家に呼んで歌って食べたりする愛のこもったおもてなし。小さな家に大きな愛を感じた。本当に家族の一員になったような2日間。食べて寝て話して…。食べて寝て話して…。そんなインドタイムホームステイだった。



—チェンナイ—

ホームステイ先：Mr. Sunder Ram

勉強熱心な双子の息子達。教育熱心なお父さん。お上品で控えめ、だけどたくさん美味しいものを作ってくれるお母さん。一晩しかないホームステイだったが、1秒たりとも無駄にしない温かい時間だった。タミル映画を見に行きたい！と言ったらすぐさまチケットを用意してくれ、大きなスクリーンの映画館へ！夜も朝も美味しい南インド料理と、神様のお話でもうお腹いっぱい！



《 本会議反省 》

担当：大津嘉奈子

1. 事前準備

渡航前の事前準備段階では、全員が揃ってのミーティングがなかなか行えなかったことが反省点に挙げられる。特に、7月は大学の期末試験で忙しく、本会議に関する話し合いが不十分なままとなってしまった。それぞれ忙しいが、本会議をより充実させるためには入念な準備を行うべきであった。また、メンバーや役職により仕事の負担量に大きな差があったことも挙げられる。役職の編成を変更するなどして改善していくべきである。

2. 本会議

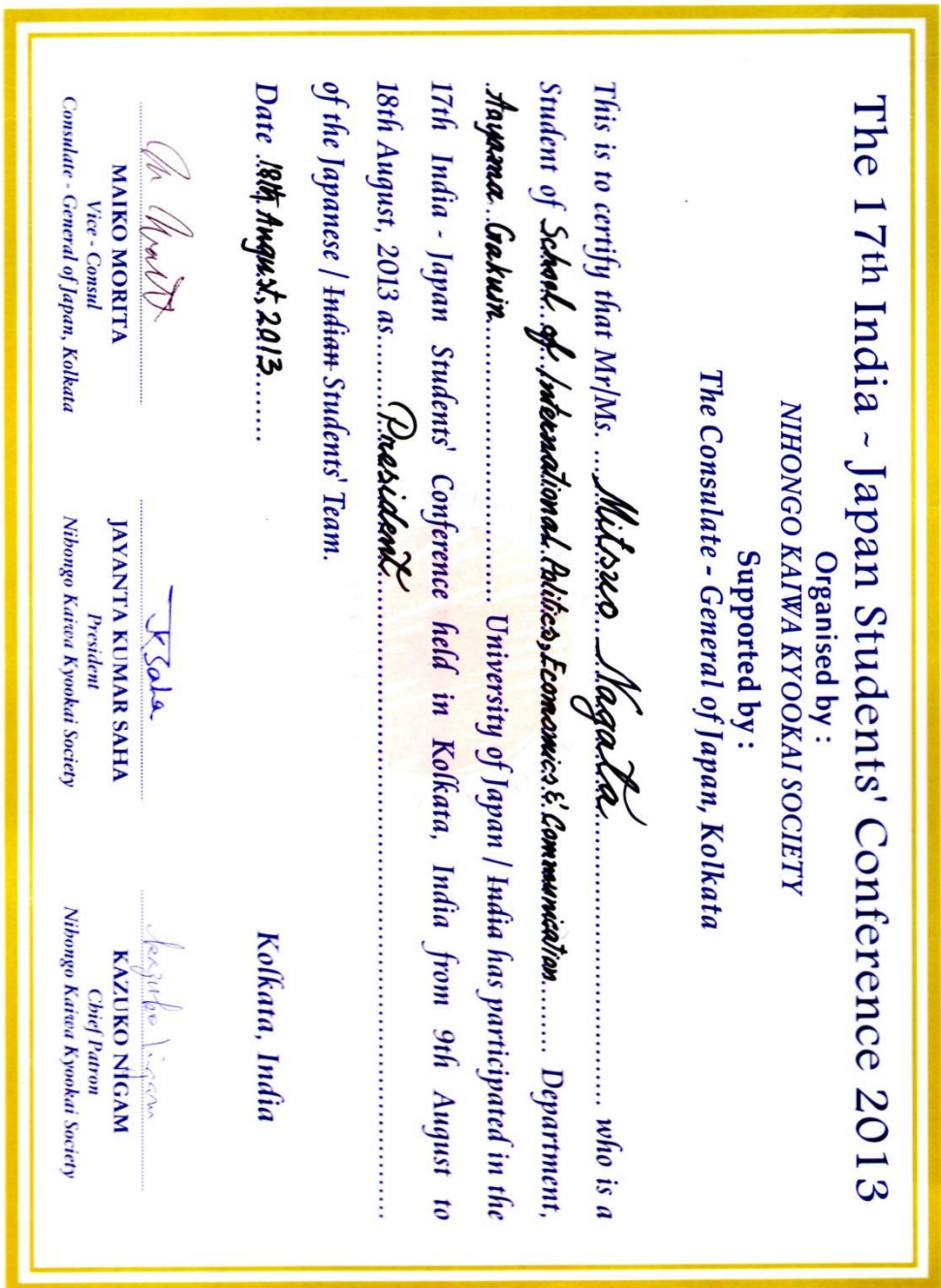
先遣隊派遣に関しては、交通手段の把握や携帯電話の契約など実務的な準備を進められた点から成功であったと言える。1ヶ月間のインド滞在の中で、大きく体調を崩すメンバーがいなかったことは幸いであった。体調管理に関しては、体調が悪く感じたら無理をせずに休むこと、食べ物・飲み物に気をつけること、夜更かしなどをせずよく眠ることなど基本的なことに注意していれば特に問題はないように感じた。

毎日スケジュールをこなすことに精一杯で、メンバー間の話し合いや、本会議のための準備に十分な時間を取れなかったことは反省点に挙げられる。企業やNGOの訪問においても、事前の勉強がより十分に行われるべきであった。分科会に関しては、インド人学生の様々な意見を聞くことができ充実したものであったが、テーマによって議論の盛り上がりには差があったように思われる。また、各自の語学力の向上も課題として挙げられる。各都市で行ったソーラン節やポリウッドダンスなどのパフォーマンスは本会議で忙しい中ダンスの練習を行うのは体力的に厳しい時もあったが、インド側の反応もよく、概ね成功であったと言える。

本会議全体としては、とても充実した有意義な時間を過ごすことが出来た。今回の本会議で挙げた反省点は第18期へと引き継ぎ、今後のより良い会議の開催に向けて改善に努めていく。

《 修了書 》

コルカタ 修了書





第四部 個人語録

- 1、 日本側実行委員からの声
- 2、 インド側学生からの声

《 日本側実行委員からの声 》

3度目のインドにやられた！？

永田光央

過去の延長で今があるとすれば、僕のこの2年間はインドに惹きつけられた時であったと思う。惹きつけられた、最初のインドではむしろ2度目はないと思っていたのだが、結果として第17期日本インド学生会議に参加し、本会議を終えたのであった。そしてそれは僕にとって3度目のインドであった。本会議の僕を自己評価するなら、正直に言う、20%だった。多少の視点をずらして客観的に見たとしても、最大限にその時一瞬を過ごしていたかという、そうは思えなかったのである。個人的な反省点を述べるためにこの文章を書いているわけではなく、JISC参加を考え始めた約1年前から僕が何を考え、何を感じて、何に向かって動いていたのか振り返っていききたい。そして何よりも、この本会議を成功に導いてくれた17期のメンバー全員に、「ありがとう」と感謝を述べたい。

僕にとってインドは3度目だった。1度目のインドでは、先進国と発展途上国、この区分けが正しいのか今も分からないが、その違いを知るために大学1年生の春休みにアメリカ大陸を横断し、帰国して4日後、3.11の震災が起きる1日前に僕はインドに初めて飛びだったのだ。3週間に亘る障がい児ケア施設でのボランティアを終え、大学2年生を迎えていた。それから2年間ほど震災にあった東北の復興に力を注ぎ、しばらくの間インドや海外からは遠ざかっていた。

なぜJISCに参加したのか？それは簡単に分けると3つの理由からであった。

1つ目には、最初のマドゥライでボランティアを経験したことであった。それが僕にとって、日本にいる日常の中でインドという国を思い起こさせ、マドゥライのあの子ども、あの障がいを持った子どもがどう教育を受けていくのか、デリーで見たストリートチルドレン、彼のボロボロになったシャツ、お金を必要として触れた手、その瞬間を撮った写真、どれもが脳裏に焼き付いていた。その経験が後に、東京外国語大学のゼミでインドの初等教育を学んでいくことにつながる。さらなるその延長で、インド人と実際にその教育について、分科会で話し合っ率直な意見を聞きたいと思ったからだった。

2つ目には、4年生を間近にして、将来の選択肢にインドの大学院を考えていたからであった。いつか国連のUNICEFやUNESCO、国際NGO、必ずしも仕事場に拘って

いるわけではないのだが、で働きたいと思っており、何よりも職に関係なく、困難な状況にある子どもたちに対して仕事でその人生の一部に貢献したいと思ったからであった。そのためには、専門性が必要であり修士課程をインドの大学院で取ることも選択肢とし、その可能性を探りたいという思いもあった。

3つ目には、世界の国々を旅する中で、旅によって知れるその国の部分は限られていると思ったからであった。JISC に入ることで、1人では知れない、その部分に触れたいと考えたからだ。

目的は明確であっても、理由が明らかであっても、時としてそれはあまり意味をなさないように感じる。本会議での理想と現実はかけ離れていた。100%以上の力を出すつもりで、準備に半年間の時間を費やし、迎えた本会議でぶつかった壁は大きかった。体調を崩したことは3度目のインドにして初めてであり大きく活動にも響いたのだが、委員長という立場で本会議を楽しみつつ、メンバーにも気を配りながら、1カ月の日程を異国の地で過ごすことがどれだけ大変なことか痛感したのであった。

僕が見て、感じて、考えたことの多くは本会議外にあったのかもしれない。見るというより見てしまうのだが、物乞いをする少女にとって、僕たちはどう映り、何を思われているのだろうか、と。インドの社会が急速に発展する中で、その成長と共に進んでいける人、そして取り残されてしまう人。僕がこのインド訪問に掲げていたテーマは“格差”であった。そのテーマに沿って、僕は1か月間の日々の中で、インドを見ていた。結果として僕が言えるのは、格差が広がっているということだ。その問題は世界中で深刻化していくように思う。もちろん日本でもだ。最近のニュースでは格差を示すジニ係数が過去最大になっているといったことも伝えられている。この先に僕たちは学生を卒業して、社会に出ていく。その時に、僕は取り残されている人の立場になって行動をしていきたいと思った。

最後に、この報告書を手にとって見ていただいた方々に心から感謝の言葉を述べた。また、約一年間に渡り、紆余曲折はあったものの支えてくれた17期のメンバー全員には感謝してもしきれない。今こうして僕たちは本会議を終えた。この経験が未来に対してどう影響していくのかを僕は見つめ続け、そして伝え続けていきたい。

他の記事はさておき、この個人語録を書くにあたっては、遅々として筆が進まなかった。今回の本会議開催を通して経験し、得たもの、受けた衝撃、反省、考えたこと、そして学んだことが多すぎて、何を書くべきかずいぶん困惑したからだ。インドでのエピソードは語りだしたら止まらないほどあるし、私の友人は最近、私がいかにしてインドという国に興味をもち、この度の経験でその関心が深まったか、飽きるほど聞かされている（と思う）。

結論を述べると私は、よりインドが好きになり、さらにこの国について知りたいと思うようになった。要はインドに「ハマった」のである。月並みな言葉になってしまうことが悔やまれる。

日本インド学生会議の活動は、いわゆる「草の根交流」とよばれるものであろう。その規模は大きくはないし、活動の効果が数値として、あるいは迅速に明確化されるものでもない。加えて日印学生会議は、“インドへの興味関心”というシンプルな共通項の元集まった学生によって構成されているため、団体としての具体的な渡印目的が統一されていない。ここに、この学生会議の難しさと、同時に面白さがあると考えられる。すなわち、良くも悪くも団体の意義が不明確なのである。この点は外部の方より問われることが度々あったし、私自身不安視したこともある。しかし本会議を終えた今は、この団体と本会議の持つ、確かな効果とその意義を確信している。

例えば、本会議中の幅広いプログラムがもたらす効果。本会議開催の際は各メンバーのやりたいことを尊重してスケジュールを組むため、自分が従前知らなかった分野のイベントも入ってくる。メンバーの専門や関心がバラバラであるからこそ、自分の専門外の領域も勉強する機会があり、そこから興味がまた広がっていくのだ。私の例でいうと、バンガロールでレクチャーを受けたことによってそれまで関心のなかったインドのICT産業の興隆について触れ、非常に面白く感じ見識を深める意欲が生まれた。

また例えば、現地でのインド人学生との会話のもつ意味。彼らとは真剣な話題からくだらない冗談まで、様々なことを話した。互いの価値観の差異に気が付いたり、その知識の豊富さに刺激を受けたり、何気ない一面から見える意外な共通点に安心したり。彼らとの出会いやつきあい方は、旅行とも留学とも異なる「学生会議」という場であったからこそ実現したものである。

もちろん団体としての改善点は多々ある。しかし、この団体の性質と柔軟性をもってこそ実現したこの本会議の、一連の経験がいかに大きな影響を私たちに及ぼしたかは、私の予想をはるかに超えるものであった。

今回、16期まで続いてきた日本インド学生会議の活動を継続・発展させることができたことを嬉しく思うと同時に、18期以降の更なる飛躍を願ってやまない。私自身は来年より社会人となり学生という立場での参加はできないが、今後も当学生会議との関わりも持ち続けると同時に、日印関係の発展においても公私を通して貢献していきたいと強く思っている。

最後に、この活動を通して始終感じていたのは「人」への感謝の気持ちである。温かく受け入れてくださったインド側カウンターパート様方、充実した時間を共に過ごした印日双方のメンバー、かねてより学生会議をご支援いただいている関係者様、学生会議を通して出会った方々…。この「学生」会議は、学生ならではの良さを含んでいるものの、学生だけでは決して成し得るものではない。数多くの方々のご理解とご協力があったからこそ開催することができているのだと、すべての過程において強く感じた。末筆とはなるが、お世話になった全ての方に深く深く御礼を申し上げたい。



本会議を更なるきっかけに

佐波優紀

物心がついた頃からそれとなくインドに憧れていた。

インドに段々と惹かれていったきっかけは、非常に多くあるため、今となってはその全てを思い出すことは出来ない。インドへの興味は常に成長と共にあった。そしてその過程で前期委員長と出会い、JISCに辿り着いた。

“インドで本会議を行う”

これだけで集まった初対面同然のメンバーと、インドに行くために予定を組み立てなければならない。異国で学生事業を行うための仲間作りという、今までにない人間関係の作り方に戸惑いつつも、本会議が近づくにつれてメンバーに接する機会も徐々に増えていき、いよいよ毎日メンバーとコンタクトを取るようになっていった。時間や環境がそうさせたのか、気心が知れた仲まで発展出来たからなのかは分からないが、このメンバーで本会議に臨むことに前向きだった。

そしてデリーの空港に着いた。8ヶ月に及ぶ準備がいよいよ試される時が来たのだと、思わず身構えた。財務の仕事にはもちろん手を焼いたが、それ以上に自らの英語力の無さを実感した。周りのインド人の英語はおろか、さっきまで日本語で会話していたメンバーが何を言っているのかも分からない。遂には言語の壁により会話がスムーズに運ばないことに対する疎外感に苛まれていた。しかし英語は分からなくても、必死に聞き取る努力をすることは出来る。言語の壁があっても、相手の表情や目を読み取ることで、国は違えども同じ学生という立場を通して、身をもって共有し合えるということを感じた。メンバーの手を借りながらも、自分なりの成果が残せたのではないかと思っている。きっと、コミュニケーションがもっと取れるようになってから感じるインドは、更に違う色を見せてくれるのだろう。

だが、ただ言語に振り回されていた訳ではなく、1ヶ月滞在することによって生まれるであろう、同調を防ぐために、自分が外国人であることを常に意識するよう心掛けていた。

貧しい子供を片手一つで追い払う大人、道端で側転をする子供たち、歩道を40キロで走るバイク、交通事故を起こしても連絡先一つ渡さず決着がつく交通事情。多種多様

な文化が混在しているインドだからこそ、この現状に対する自分なり答えを出すことは1ヵ月という期間の中では出来なかった。しかしどれも"インド事情"で終わりにするのではなく、

一つ一つ向き合うことこそが、自分の中での一つの本会議であった。

本会議でのこういった体験は私に多くの衝撃を与えた。インドに行って、国の下で働く職業ではなく、民間で活躍する進路に変わったと言え、よく世間一般に言う「インドに行けば人生が変わる」の実話の一つと捉えられるかもしれない。

しかし根本的なものは変わっていない。インドは私に多様な考え方や、考えるチャンスを与えてくれた。ただそこに、インドとの関わりを求めるようになったのは、やはり JISC に参加したことで出会った多くの人びとからの影響があると思う。その多くを占めるのが、17 期メンバーや、現地で触れ合った学生だ。インドの学生はとても個性豊かだ。歌が好きな人、踊るのが好きな人、物知りな人、木登り名人、司会者、名脚本家、漫画が好きな人、自分であり続けることを願う人。しかし共通することが1つある。それは母国に対する意識が強いことだ。今ではインドという国が、意識をするたびに私の中で重要な位置を占めていることを気づかされる。

JISC17期の活動を振り返って

軽部真純

2年前、大学生になって初めての夏休みに、私は念願の海外旅行へ出発した。行き先はどこでも良かったのだが、大学で福祉を専攻している私はマザーテレサにとっても憧れがあり、彼女が生涯を捧げた場所を実際に見てみたいと思ったのが、インドを選んだきっかけである。その旅行で感じた カオス、熱気、スパイスの香り、貧富の差、ヒンドゥー教の神様、野良牛、鮮やかなサリー… 初海外の私にとってインドの全てが新鮮だった。インドは一度行くと、大好きになる人と大嫌いになる人ではっきり分けられるとよく言われているが、私は前者の道を真っ直ぐに突き進み、また必ず何かしらの形で、しかも今度は観光ではなくじっくりとインドを見てみたいと思い、この日本インド学生会議に参加した。(この団体に関心を持ったのは、“ナマステインディア”というインドフェスティバルで16期のメンバーにチラシをいただいたのがきっかけだ。)

17期は例年より比較的早く発足したと言われているが、それでも渡印前の準備はバタバタとしていたし、今振り返ると本当にあっという間だった。JISC 浸けの毎日で、こんなに何か1つの目的に向かって没頭するのは初めての経験だった。実務が忙しすぎて嫌になった時もあったが、本会議での日々を想像すると頑張ることが出来た。

そして迎えた本会議。渡印中は長いと感じていた1ヶ月間の滞在も、今となってはあっという間の出来事だった。どの都市でも、出会えた奇跡に感謝したくなるような素敵な友達がたくさんできた。私は英語が上手ではないので、あまり込み入った話が出来なかったのだが、言葉が通じなくても芽生える友情はあるのだと知った。学生会議の醍醐味であるディスカッションでは、インド人の達者な会話力に圧倒されるとともに、私が思いもよらなかった方面から物事を見ている彼らの価値観を知り、とても刺激をうけたし、自分の中でも考え方に変化が生じるようになった。(「インドに行くと人生観が変わる」と言われているのは、このことかもしれない。)

今回の渡印で、私はますますインドに魅了されてしまった。北から南まで縦断したが、まだまだインドの知らない所はたくさんある。きっとまた近いうちにインドに再訪するのだろう(笑)。そして、「いつかインドでソーシャルワークをしたい」という私の夢も、今回の渡印ではっきりとしたものになった。

JISC の活動を通じて知り合った多くの方は、私にとってかけがえのない財産だ。JISC を陰で支えてくださっている関係者の方々、長浜先生、インド側カウンターパート、インドの学生達、そして17期のみんな。出会ってくれて、ありがとう。

もともと大学在学中にインドへ行きたいと思っていた。それをバイトで通じて知り合った友人に話したことがきっかけでこの団体に入ることになった。

参加が決まってからは、週に1回のMTG。意識を高く持つ皆に圧倒されてしまった。ただ、それが面白くもあった。JISCのメンバーは学校の周りにいるような人とはまた違った人たちであるからだ。福祉や教育、政治、文化などそれぞれ異なったインドに興味をもち、この団体に参加している。勉強会では、それまで興味のなかったテーマのプレゼンを聞き、自分の思いつかないような考え方を知るのはとても楽しかった。ひとつのことに対して深く考え、意見を出す姿に、普段から物事を受け入れることに慣れすぎていた私は刺激を受けた。自分の甘さを感じた。

分科会では他のメンバーの助けを借りつつ、インド人メンバーの考えを聞き出し話し合うことができた。彼らの知識の深さ、ディスカッション能力、英語力どれも素晴らしく力の差も感じた。反省点は山ほどある。ただ、本やインターネットでは得られない学生の生の意見を聞くことができたのは本当に良い経験だった。そして、彼らの考え方に對してなぜそのような意見を持つのか、背景を考えることは面白かった。というのも、本会議での活動は分科会だけではないからだ。インド企業やインドに進出する日本企業への企業訪問、インド人女性を支援するNGOへの訪問、ホームステイ、スラムに暮らす方のお宅への訪問…と様々な経験をした。収入も違えば、国籍も違う。様々な立場にある人が置かれている現状、その人たちがその現状をどう思い、解決しようとしているのかなど、様々な立場から見たインドを知ることができたのはこの活動ならではの魅力であると感じる。

そして、友達が出来たことも大きい。今でもSNSで連絡を取っている。写真を見ては楽しかった時間を思いだし、プジャの話を知ればインドへ行きたいという衝動に駆られる。本当に彼らには感謝してもしきれない。

こんな経験ができたのもJISCの創設者、そしてそれを17期へとつなげてくれたOBOGの方々、活動を支えてくださった皆様の存在があったからだ。心から感謝したいと思う。今、大学2年生。これからどうインドと関わっていくかわからないがJISCで得たものをこれからに生かしたいという思いがある。そして、この活動の中で気が付いた自分に至らない点を伸ばす努力をしたいと強く思う。

人との出会いに感謝して。

私にとってインドを訪れるのは今回が初めてであったが、毎日が新鮮な驚きと発見に満ちた、すばらしい経験となった。しかし、インドへ出発する一週間ほど前になって、私は訪印をやめようかと考えたことがあった。日本でインドに関する情報を得ようとすると、「水が危険」「治安が悪い」などネガティブな情報ばかりが耳に入り、急に不安になったのである。それでも私をインドへ向かわせたのは、見たことのないものを見たい、知らないことを知りたい、という好奇心であった。「インドへは行きたいと思っけていても、インド側からお呼びがかからない限り、行くことはできない。インドに呼ばれる時期も決まっている。インドはそういう国なんだ」と作家三島由紀夫が言ったそうだが、私もインドに「呼ばれて」いたのかもしれない。

実際にインドに行って感じたのは、その「多様性」だ。都市ごとに民族、言語、食文化など多くの要素が異なり、伝統的な衣装を身につけて厳格な菜食主義を貫く人はいる一方で、欧米ブランドの服を着てマクドナルドやスターバックスで食事をする若者がいる。高級ショッピングモールで買い物を楽しむ人のすぐそばで、物乞いをしている人がいる。こういった光景は、普段日本で生活しては見ることの出来ない、驚くべきものであった。そして、日本でよく見聞きする「インドは～だ」とインドを一括りにして判断した情報を鵜呑みにしていた自分を恥ずかしく思った。また、インドでは学生をはじめ、たくさんの現地の人々と交流する機会があったが、そのたびに彼らの優しさ、温かさを感じた。学生たちはインド屈指の有名大学に入学するような優秀な頭脳と勤勉さを持ちながらも、常に謙虚であり、私達日本人に対していつも尊敬と思いやりを持って接してくれた。そして彼らが日本の文化や歴史に興味を持ち、「日本語をもっと勉強したい」「いつか日本に行きたい」と語ってくれることは日本人としてとても嬉しいことであった。同時に、身近で彼らの勉強に対する熱心さ、必死さを目の当たりにし、自分の勉強への姿勢について考えさせられた。

日本で私達は、当たり前のように大学で勉強が出来、海外旅行にも行くことができる環境にいる。しかし、その恵まれた環境は、私達若者が作ったものではなく、さらに前の世代の日本人の努力によるものだと思う。だとすれば、私達若者は向上心を持って日々努力をし、これからの日本をつくる役割を担っていかなければならないのではないのか。そして、日本に興味を持っている人たちにより良い情報を発していくことが重要なのではないかと考える。学生という立場ではあるが、将来的な日印関係の発展に貢献できるよう、今後も日印学生会議を皆で支えていきたいと思う。

最後に、私の渡印は一人で行うことは不可能であり、多くの方々の支えがあってはじめて出来たことでした。準備段階からお世話になった長浜先生をはじめ、OBOGの方々、現地でお世話になった方、学生会議開催に協力して下さったすべての方々に貴重な機会を与えて下さったことを感謝致します。ありがとうございました。

本会議を終えて、渡印前の自分と比べて多くの変化があった。そもそも、私が JISC に参加した当初は「大学時代に何か変わったことをしてみたい」「自分を挑戦させたい」という漠然とした目標しか持っていなかった。インドについても知っていることは片手で数えられる程度しかなかった。準備が本格的になるにつれ、本会議への情熱が増していったことを覚えている。

いざ渡印。デリーの空港を出るなりタクシー運転手達に囲まれ声をかけられた。タクシーで町へ出た。その瞬間の衝撃は忘れもしない。想像していたよりも遥かにカオスだった。「ここで1か月も過ごすのか」「変な所に来てしまった」というのが正直な心境だった。始めの数日、そんなネガティブな感情を拭うことはできなかった。常にミネラルウォーターを持ち歩かなくてはならない。そんなちょっとしたことにさえイライラしていた。その時の私は「何故だ」と表面的には思いながらも、その本質を問うことをしていなかった。結局は「こんなの嫌だ」という想いを克服できないことから自己防衛をしていただけだった。そうは言っても、長らくそうしているのもまた辛く。ふと周りを見渡すと、今この時間を有意義に過ごすメンバーもいた。その時、自分がいかにこのせつかくの機会を無駄にしようとしているかに気付いた。「何故こんな大変なところなんだ」という当初の疑問を考えても、それは「インドがそういうところだから」という一言に尽きるのだと思う。それは歴史的、政治的、経済的、宗教的背景による様々な理由があるけれども、それを肌で感じるためにこの夏、インドに来たのだった。そして、その中で自分は何ができるか、何ができないのかを知りたい、と思った。

結果、学生との議論の中で彼らが国への帰属意識が薄いことを知った。ホームステイを通して、家族との関わり方を知った。街に出てみて、経済成長の裏にある問題点（大気汚染、ゴミの路上廃棄など）を感じた。企業訪問で IT 産業の勢いを知った。この全てが実際にインドに来たからこそ知れたことだった。しかし、あくまでその一部を“知った”に過ぎず、その全てを知ったわけではないし、ましてやその一部ですら本当に“理解”できたわけでもない。

準備期間から本会議までを通して学んだことを挙げていたら数えきれないほどある。いかに自分が世界を知らないか、自分に足りないことが多いかを思い知った。知識、コミュニケーション力、行動力、適応能力、その他諸々。その中でもあえて、JISC の活動を通して学んだことのうち最も意義あること（あくまで私個人にとって）を挙げると

するならば、それは「自分の弱さ」を知ったことだ。この渡印を通して（少しは）世界を知り、自分自身を見返すことができた。

こんな素晴らしい機会を与えてくださった全ての方、ご縁に感謝しています。ありがとうございました。インドで出会ったどなたかもおっしゃっていましたが、JISCでの活動を機に今後私がインドに関わっていくかはわからないけれど、この活動は今後の私が生きていく上で間違いなく支えとなり、幾度となく振り返ることでしょう。本当にかげがえのない時間でした。



次の瞬間どんな人に出会い、どんな天気に見舞われ、どんな物を口にし、どんな事が私を笑顔にさせてくれるのか。あらゆる事が予測不可能な、不思議な場所、インド。

そんな場所で私達が出会ってきた人々は、歴史的になんのしがらみもないインドと日本の国際関係を見守り、そして邁進する外交官。ものすごいエネルギーをはなち、インド人の優秀さと広がるマーケットに野心を抱く日本人企業家。「国を築いていくのは人だ」と教育の大切さに全身全霊をかける教授。そして日本が大好き、日本語が楽しい、日本に住みたい、などまっすぐで情熱的な夢をいだく学生達。あらゆる人々が今この瞬間を 100%に生きていた。私達はそんな巡り合わせや新しい経験に感化されるのと同時に、そのエネルギーに負けないよう、そしていつも 100%で向き合えるよう、体力と気力が勝負な 1 ヶ月となった。

正直、インドと日本の国際交流の希薄さ、お互いの認知度の低さ、歩み寄る努力の欠如など、この学生会議を通して、また一個人のインドとの繋がりを通しても、もの申したいことはたくさんある。しかし日本とインドのお互いの文化的な深さや、人々が共有する独特の感性や価値観、生きることに對する意味付けなど、とてもここ数年で自国とインドを理解し、中立な立場で議論が出来るようになるとは思えない。一生をかけて勉強しても到底網羅出来そうもない、広くて深いトピックだ。しかしこの様な素晴らしい二国が手を取り合い、平和のために一歩二歩と踏み出せる時、この世界は震える。そのくらいの可能性と才能に満ちた未来が私達を待っていると確信している。今回の渡印は、そんな私達の使命と責任を再確認し、その一歩を歩みだせる出発点に立てた旅になったのではないかと感じている。

多くの人々がこの団体の可能性を信じ、あらゆる協力と力添えをしてくれた。色々な経験と想いを共に、私達全員がこの様に無事に帰国できたことを心から感謝申し上げたいと思う。

これからの日印関係が更に良くなりますように。

デリー空港に着いた時、ふと懐かしい気持ちとこれからどんな一ヶ月になるのだろうという期待でいっぱいになった。小学生の時にスリランカに住んでいた経験から、南アジアの文化に興味はあったもののインドについては全く知らず、だからこそインドへは実際に足を運び、多種多様と言われるインドを直接肌で感じたいと思っていた。また同世代の学生は何を考え、日々の生活から社会問題についてまでどう感じているのかを深く知りたいと思ったのがきっかけで、私はこの団体に入った。

本会議を振り返ると、毎日が濃かった日々の思い出が蘇り、今すぐにもインドに行きたくするような気持ちになる。現地の人々との触れ合い、学生との白熱した議論、交流、支えてくださった方々の温かさ。楽しい思い出だけでなく、時にインド人の考えや行動が理解できず戸惑うこともあったが、それさえも愛おしく思えるほどインドでの生活が充実していたと感じる。特に印象的だったのが、本会議での学生との交流だ。彼らとの触れ合いの中から学ぶもの、感じるものが多くあった。学生たちは皆人懐っこく、温かく私たちを出迎えてくれ、常に私たちのことを気にかけてくれた。そのおもてなしの心に私は胸が熱くなった。日本でもおもてなしの心を大切にするとされているが、むしろ日本人以上にホスピタリティを重視しているのではないかと思うほどであった。分科会では彼らのコミュニケーション力、知識量の多さに大変驚いたと同時に自分の無知さが恥ずかしくなった。彼らは知らない分野の話であっても、自分の知識の引き出しから関連しているものを出し、新たな観点から意見を述べる能力に長けていた。I don't know で終わらせてしまっていた私にとっては、ぜひこれを真似したいと思った。真面目な話だけではなく、学生と観光やホームステイをすることを通じてプライベートな話をする機会もだんだんと増え、日本人の友人と同様な感じで話せる、もしくはそれ以上に深い話ができる間柄になれたことが本当に嬉しかった。心の距離が縮まっていくのが分かり、本音で話し合える関係になれた。仲が良くなったからこそ、深刻なインドの社会問題についても気軽に聞けるようになり、分科会という枠を作らなくても熱い議論ができるまでになった。もてなす側、もてなされる側という間柄から、大切な友人になっていたところだ。今では毎日インド人と連絡を取り合うほどであるのに、正直インドに来るまでは、ここまでインド人と仲を深められるとは思っていなかった。最後の別れ際に「You are my best friend!」と彼らに言われた時には彼らとまた会って話したいと強く思った。「日印友好関係」と聞くと、難しく聞こえるが、つまりは今回出会えた友人との出会いや繋がりに感謝し、今回築くことができた絆をこれからも長く大事にしていくことなのではないかと私は思う。

初めてのインドであったが、インドにハマってしまい、ここにまた来たいと強く感じた。本会議が終了すると同時にインドを離れたくないという気持ちと寂しさに襲われ、同時によりインドについて知りたい、学びたいと思った。JISCでの活動があったからこそ、このような気持ちになれたのだと思う。最後にJISCを支えてくださった皆様に感謝を心から申し上げたい。

僕にとって、インドの訪問は2回目になる。1度目は家族旅行でインドを楽しんだが、今度はインドの人々ともっと触れ合って、少しでもインドという国を深く理解したい、そしてもう一度インドを楽しみたいという単純な理由で JISC 入り、こうして一か月インドに滞在したのだが、インドは想像していた以上に色々なことを僕に教えてくれた。

最初に言えることは、本当に貴重な経験をしたと思う。今までいわゆる先進国にしか旅行したことのなかった僕は、インドで **SURVIVE** することを学び、その中で最大限頑張ることで自分自身成長できたと思う。そして成長の真ただ中にあるこの国の学生・若者がうれしそうに自分の夢を語り、ここから這い上がってみせるという熱いパッションを感じさせてくれ、いつも適当に頑張り、だらだらと日常を過ごす自分の生活・生き方について色々と考えさせられた。そして、自分の意見を好きなだけ英語でしゃべり続けるインド人学生達と接する中で、話したいことをうまく英語で伝えることの大変さ、自分の英語力・コミュニケーション能力の不足を痛感した。

そしてインドという国への見方もだいぶ変わった。一度目に旅行した印象としては「カオス」で、「旅行客をだまそうとする悪い人がたくさんいる」というステレオタイプな見方しかできなかつた。しかし、滞在の中でインド人と会う中で彼らの思いやり・優しさに触れ、この見方が完全に間違えだと気付いたし、インドでは人との出会いが大切であり、多様性を持った色々なインド人と出会うことがどんなに楽しいことなのか、気づかせてくれた。そして人種が違い、考え方・宗教が違ったとしても人間本来の優しさ・思いやりは同じであり、国籍なんて関係なく結局「その人はその人である」、と強く感じた。

課題を多く感じたが、本当に毎日が充実した一か月であり、このような経験ができたのも長浜先生を始めとする OB・OG の皆様、そして現地でサポートしてくださった先生方、仲良くしてくれたインド人・日本人メンバーのおかげに他なりません。本当にありがとうございました。必ずまたインドに戻ってきます。そのときはよろしく願います。

最後に、このような素晴らしい経験を大学2年生でできた、というのは本当に良かったと思う。今後インドとどのように関わっていくかはまだ自分にもわからないが、この経験をまずは残りの大学2年間で最大限生かしていきたい。

《 インド側学生からの声 》

(Kolkata) 17th IJSC President Ayan Mitra

The 17th India Japan Student Conference is a step towards strengthening the warm relations between the two nations, India and Japan, who have shared a glorious past of almost 61 years being bound by the vows of diplomatic relations. Traces of such interdependence combined with cordial relations of International Cooperation have helped these countries to evolve in their symbiotic relationship. On this opportune moment it is an absolute privilege to be a part of this conference and representing India at the same time.

We came to know about their culture, beliefs and value systems. Interacting with them on a one to one basis provided us with the true representation of their life in Japan.

As students they were interested in our educational system as a result of which we took them to a primary school for a visit where they interacted with children. Along with that social work by NGO's also appealed to them and they were eager to learn more and more about organizations who were involved in this kind of work.

The table discussions proved fruitful as we became aware of the nuances of Japanese life and how society there is continuously evolving and progressing. It was a complete privilege to take them around Kolkata for sightseeing. We visited a few historical places and also took them out for shopping and lunch.

It was a wonderful experience and we enjoyed ourselves thoroughly. Such a conference helps to build relations between nations and also strengthen friendly bonds between individuals. It was an absolute pleasure to get to know these people personally and live a part of our lives with them, sharing their likes, dislikes, and even their mundane habits. With the closure of this conference we are looking forward to the next year with greater zeal and hoping that the next year would be a bigger success in terms of international exchange where geographical barriers would be overcome.

(Chennai) Vedha Narayanasamy

At this era when the world has become a global village, cooperation between countries has gained utmost importance. The power centre is slowly moving from the West towards the East and in this power shift, Japan and India will play a major role in the future. At this juncture, mutual understanding and cooperation between the two Asian neighbours play an important role in increasing the friendship and goodwill between the two countries. JISC is a fantastic platform in this regard. Youth are the future of tomorrow and when the youth from both these two culturally similar countries come together in friendship and cultural exchange, the future of both the countries look brighter.

I am very proud and happy to have been the organiser for the 17th JISC in Chennai on behalf of ABK AOTS DOSOKAI. The students were great cultural ambassadors and their willingness to understand and adapt to the Indian culture was truly heart warming. Each of the students actively participated in all the activities arranged by ABK AOTS DOSOKAI. Some of the students were also ill during their stay in Chennai, but they put in their best foot forward to make the most of their trip and understand the dynamic culture that makes India what it is. I am sure the students would have learned a lot about our country and the Indian students also greatly benefitted from the student exchanges. Events such as the JISC go a long way in bridging the gaps between India and Japan. I truly appreciate the efforts of all those who were involved and we all eagerly look forward to hosting the JISC of the coming years as well. I wish the best of luck to all the students of the 17th JISC and pray for all success in their lives.

おわりに

- 1、 謝辞
- 2、 日本インド学生会議規約
- 3、 編集後記

《 謝辞 》

第 17 期日本インド学生会議の活動において、私たちは非常に多くの方々にご支援、ご協力を賜り、様々な面で助けていただきました。学生会議と申しましても、学生だけではどうしても力の及ばないところや、目の行き届かない点が多々あります。そのようなとき、皆様からの助言が、私たちをより実りある方向へと導いてくださいました。

下記の方々をはじめとする、多くの方々にご尽力いただき、第 17 回目となる日本インド学生会議を無事に開催できましたことを、この場を借りて実行委員一同心より御礼申し上げます。今後、第 17 期実行委員は、任務を全うした後も OBOG として日本インド学生会議をサポートし、より良い学生会議づくりに励む所存でございます。これからもより一層のご指導いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

2013 年 11 月

第 17 期日本インド学生会議実行委員会 実行委員一同

記

- 助成： 公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団
独立行政法人 国際交流基金
- 後援： 在日インド大使館
在インド日本国大使館
在コルカタ日本国総領事館
在チェンナイ日本国総領事館
公益財団法人 日印協会
国際交流基金 ニューデリー日本文化センター
- 協力： コルカタ 日本語会話協会(Nihongo Kaiwa Kyokai)
Destiny Foundation / Reflection
チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI

東京大学インド事務所
バンガロール KOYO group
INFOSYS
Sony India Software Centre

創設発起人 長浜浩子氏
日本インド学生会議 OBOG 会

以上

《 日本インド学生会議規約 》

日本インド学生会議規約

前 文

日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。

日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

第一章 総則

第一条 名称

本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を「Japan-India Student Conference」とする。

また、省略名称として「JISC（ジスク）」を使用する。

各代実行委員会に対しては「第○期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第○期日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「○○年東京（カルカッタ）大会」などの名称も使用する。（○は英数字とする。）

第二条 活動

（一）本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。

1. 本会議の開催
2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催
3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成
4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催
5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動

- (二) 本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。
- (三) 本団体公式マークを以下のようにする。



第三条 規約

本団体は、この「日本インド学生会議 規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設ける。

- 「日本インド学生会議 実行委員会規定」
- 「日本インド学生会議 OB・OG 会会則」
- 「日本インド学生会議 会費規定」
- 「日本インド学生会議 創設趣意書」
- 「日本インド学生会議 基本理念」
- 「日本インド学生会議 各代実行委員会趣意書」
- 「日本インド学生会議 長期計画案」

第二章 構成員および組織

第四条 構成員

日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG 会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

第五条 実行委員

日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

第六条 発起人

発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者（石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏）の3名である。

第七条 顧問

本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

第八条 会計監査

本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

第九条 賛助会員

賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営における協力者と認めたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有する。

第十条 OB・OG 会

OB・OG 会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG 会会員たる要件は別規定でこれを定める。

第十一条 総会

日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。

- 一、 役員の選出および罷免
 - 二、 役員の退会
 - 三、 予算および決算
 - 四、 顧問の委託
 - 五、 規約の改正
 - 六、 その他必要と思われる事項
- また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上（但し OB・OG の議決権が有効な事項に関しては、OB・OG 会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める）の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択する事ができる。

主な議案に対する、現役・OB/OG が持つ議決権の一覧は以下の通りである。

<議案>	<現役の議決権>	<OB/OG の議決権>
役員の選出および罷免	○	
役員の退会	○	
予算の承認	○	
決算の承認	○	○
顧問の委託		○
規約の改正	○	○
本会議の解散	○	○
活動方針の変更	○	○
OB/OG 会に関する事項	○	○

第十二条 任期および会計年度

(一) 任期および会計年度

実行委員会は、来期の本会議の六ヶ月前に改組し、その後一年間を任期および会計年度とする。

(二) 業務の延長

前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はその業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

第十三条 退会

(一) 実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。

(二) 実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

第十四条 個人情報の管理の努力規定

各構成員は、本団体の活動に際して知り得た個人情報（個人に関する情報であつて、個人が識別可能なものをいう。）について、みだりに団体外部および他の構成員に漏洩することのないように努めなければならない。

第三章 処分

第十五条 処分

(一) 長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(二) 総会は、長期に渡り実行委員としての義務を果たさない者、または前文に掲げた主旨及び目的に著しく背く言動・行動その他日本インド学生会議の運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員に対して、規定の有無にかかわらず、3分の2以上の賛成で、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(三) 前項の処分についての発議しようとする構成員は、まず OB・OG 会事務局および、各期代表世話人に事実の調査の申立をしなければならない。

(四) 前項の申立を受けた OB・OG 会事務局および各期代表世話人は、申立人、被申立人（処分の対象として申立をされた者。以下同じ。）および他の構成員に対し、意見の聴取を含む事実の調査をおこなう。

(五) 総会は、処分についての議決を、OB・OG 会事務局および各期代表世話人の調査にのみ基づいてする。申立人、被申立人、その他関係人・OB・OG 会事務局および各期代表世話人が認めた者は、第 11 条の規定にかかわらず、議決権を有しない。

第四章 附則

第十六条 執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

第十七条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の用件を以って、承認される。

第一回改正 平成 11 年 1 月 第二回改正 平成 12 年 4 月 第三回改正 平成 16 年

《 編集後記 》

渡印前は長いと感じていた1ヶ月間も渡印も、今となってはあっという間の出来事でした。帰国後、私たちはそれぞれの日常生活に戻り、インドでの強く鮮明な思い出も、あれは夢だったのではないかと思うほどです。しかし、本会議に参加したことで、実行委員各々の中に、確かな変化があったと私は感じています。今後、どのような形で今回の経験をアウトプットしていくかは、人によって異なりますが、日印友好の懸け橋になろうという学生の意志を、この報告書から読み取っていただければ幸いです。

第17期日本インド学生会議の開催につきまして支えてくださった皆様へ、もう一度深い感謝の気持ちを述べさせていただくとともに、これからの日印関係が更なる発展を遂げますよう祈りを込めて。

ありがとうございました。

2013年11月13日

第17期日本インド学生会議 広報局 軽部 真純

第17期日本インド学生会議報告書

2013年11月発行

編集 広報局 軽部 真純

発行 第17期日本インド学生会議実行委員会

印刷・製本 株式会社 エイト通商